

只上深町遺跡

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

東日本高速道路株式会社
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

只上深町遺跡

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇二二

東日本高速道路株式会社
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

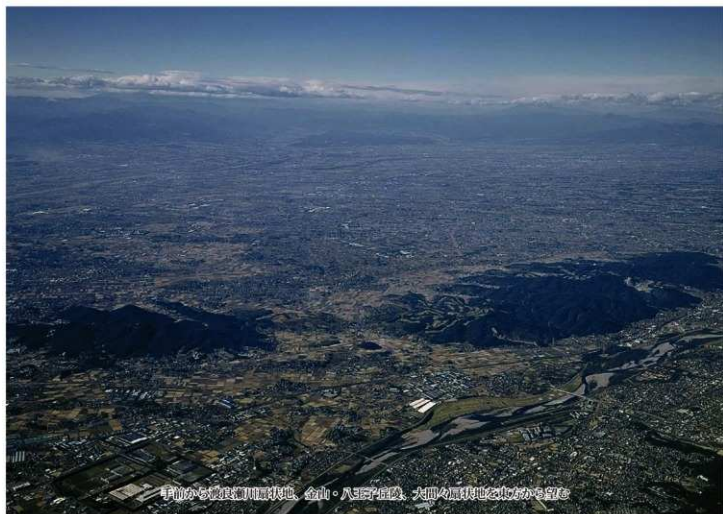


只上深町遺跡

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

東日本高速道路株式会社
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



市街の北東部を流れる川、金沢・八幡川、大田川と川合流する川



道沿西上谷小島池田川を流す川

序

本書は、太田市只上町に所在し、北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域建設事業に伴い発掘調査された只上深町遺跡の調査報告書です。発掘調査は、東日本高速道路株式会社関東支社からの委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が、平成17年度に実施しました。

本地域は、栃木県境となる渡良瀬川に近接し、中世以前において渡良瀬川の古い流路の一つとされる矢場川の左岸にあります。発掘調査では矢場川氾濫によって埋まった中世から近世の水田も発見されました。また、周辺では古代の幹線道路である東山道駅路の存在も知られており、平安時代に比定される生活遺構が見つかったことは、今後の地域解明に寄与できるものと考えます。

この報告書が群馬県の歴史研究をはじめ、地域の資料として学校教育、郷土学習にも役立てていただけるものと確信いたしております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にいたるまで、東日本高速道路株式会社関東支社、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会、地元関係者の皆様からご指導、ご協力を賜りました。心より感謝の意を表し、序といたします。

平成24年2月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 須 田 栄 一

例 言

1. 本書は北関東自動車道(伊勢崎～県境)建設に伴い発掘調査された「只上深町遺跡」の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 遺跡は太田市只上町1835、1835-2、1837-1、1837-3、1847-2番地(以上1区)、1810-3、1814-1、1815-1、1816-3、1822、1823、1824-1番地(以上2区)、1818-1、1819、1820、1826、1827、1829番地(以上3区)に所在する。
3. 事業主体は東日本高速道路株式会社関東支社(旧日本道路公団)である。
4. 発掘調査の主体は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
5. 調査期間は平成17年1月1日～平成17年3月31日、および平成17年10月1日～平成18年3月31日である。
6. 発掘調査体制は次のとおりである。

平成16年度 只上深町遺跡2区(表面積3,416㎡、延調査面積6,832㎡)
発掘調査担当 斎藤利子(専門員)・黒澤照弘(主任調査研究員)
遺跡掘削請負工事 山下工業株式会社
委託 地上測量:株式会社栗原総合測量 空中写真撮影:株式会社シン技術コンサル
平成17年度 只上深町遺跡1区、3-1区・3-2区(表面積5,309㎡、延調査面積14,317㎡)
発掘調査担当 石塚久則(専門員)・佐藤亨彦(調査研究員)
遺跡掘削請負工事 山下工業株式会社
委託 地上測量:株式会社栗原総合測量
7. 整理事業の期間と体制は次のとおりである。

整理期間 平成23年5月1日～平成24(2012)年3月31日
整理担当 高井佳弘(主任調査研究員)
遺物写真撮影:佐藤元彦(補佐) 保存処理:関 邦一(補佐)
8. 本書作成の担当者は次のとおりである。

(1)編集 高井佳弘、デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)
本文執筆 菊池 実(第1～3章、第4章中の土坑と住居)、飯森康広(第4章中の土坑と住居を除くすべて)
遺物観察 石器・石造物:岩崎泰一(上席専門員) 縄文土器:橋本 淳(主任調査研究員) 土師器・須恵器:神谷佳明(上席専門員) 中近世陶磁器・土器:大西雅広(上席専門員) 石材鑑定:飯島静男(群馬地質研究会)
9. 発掘調査および報告書作成に際しては、群馬県教育委員会・太田市教育委員会をはじめ、関係機関ならびに多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。記して感謝いたします。
10. 只上深町遺跡の出土遺物と調査・整理の諸資料(遺構図・遺物実測図・写真類・各種台帳類)は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

凡 例

1. 本文中に使用した方位は全て国家座標(2002, 4改正前の日本測地系)の北を使用している。真北との偏差は、調査区中央付近で、東偏0度15分26秒である。

2. 遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位はmを使用した。

3. 遺構名称は1～3の各区で遺構種類ごとに通し番号をつけ、番号・遺構種類名で呼称した。また本文中では1面から6面に分けて報告する。

4. 遺構・遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構 住居-1:60、カマド-1:30、掘立柱建物-1:80、土坑-1:30、1:60、ピット-1:80、溝-1:40、1:50、1:80、1:100、1:120、1:400、水田-1:200、畝-1:40、1:80、1:100、1:200、畦畔-1:40、1:200、河道-1:80、トレンチ-1:40

遺物 土器-1:3、石器・石製品-1:1、1:3、鉄製品-1:2

5. 本書の図版に使用したスクリーントーンは次のことを表示している。



6. 住居の床面積は、デジタルプランメーターにより住居の壁の内側を3回計測し、その平均値である。住居の方位は竈を持つ壁に直交する壁を主軸線とした。遺構の計測値で全体を計測できないものについては、現存の値を記載し()に、推定で全体がわかるものについては〔 〕に表示した。

7. 遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。

- ・土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に基づいている。
- ・胎土表記中の細砂・粗砂・礫については、径2mm以上を礫、径2～0.2mmを粗砂、径0.2mm以下を細砂とした。
- ・計測地の口:口径、底:底径、高:器高、台:高台径を示す。
- ・金属器類観察表の計測値に()がついているものは残存部分での値である。
- ・石斧刃部側の摩耗痕については縦位定規線で、着柄部と想定される部分の摩耗痕については横位定規線で図示した。
- ・磨石等礫石器類に用いた縦位・横位定規線は摩耗範囲を示す。その他の斜位定規線は線条痕の走行を示す。
- ・石皿については、使用部の摩耗および再生状態(再敲打)を表現するため、必要に応じて拓本を使用した。
- ・台石については、打痕・摩耗痕を含む礫面の状態を表現するため、必要に応じて拓本を使用した。

8. 本書で使用した浅間山及び榛名山噴火による降下火砕物等の呼称については以下のように表記する。

浅間A軽石:As-A(1783年) 浅間B軽石:As-B(1108年) 榛名山二ツ岳軽石:Hr-FP(6世紀中葉) 榛名山二ツ岳火山灰:Hr-FA(6世紀初頭) 浅間C軽石:As-C(3世紀終末～4世紀初頭) 浅間板鼻黄色軽石:As-YP 浅間板鼻褐色軽石:As-BP

9. 調査時における基本土層は、各調査区間の調整を図るため、整理段階で再編成を行った。このため、遺物との照合を考慮して、調査段階の基本土層を小文字標記とし、遺物観察表等の記載を行った。

10. 水田の記載において、「疑似畦畔」という用語を使用する。疑似畦畔とは、「畦畔ではない畦畔状の高まり」(斎野1987)のことであり、本報告書では『富沢遺跡』における「疑似畦畔B」について使用している。この疑似畦畔Bとは、

水田の畦畔直下に認められる床土(基盤層)上面の畦畔状の高まりを指している。この場合、直接畦畔が検出されなくとも、疑似畦畔Bの検出により水田の存在が想定できると考えられている。

引用文献 齋野裕彦1987「遺構の種類別と遺物の分類」『富沢』仙台市教育委員会 91-92頁。

11. 本書に掲載した地図は下記のものを使用した。

国土地理院 地形図1:25,000「足利北部」(平成15年1月1日発行)「足利南部」(平成14年9月1日発行)

国土地理院 地勢図1:200,000「宇都宮」(平成16年8月1日発行)

太田市 1:2,500地形図(平成18年8月測図)

第一軍管地方迅速測図『足利町』『太田町』(明治17・18年測図)

目次

口絵	
序	
例言	
凡例	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	
報告書抄録	
第1章 発掘調査に至る経緯	1
第2章 調査の方法と経過	
第1節 発掘調査の方法	
(1) 遺跡番号	3
(2) グリッドの設定	3
(3) 調査区の設定	3
(4) 遺構の調査	3
第2節 調査の経過	3
第3節 整理作業の方法	6
第3章 遺跡の立地と周辺の遺跡	
第1節 遺跡の立地	7
第2節 周辺の遺跡	10
第4章 発掘調査の記録	
第1節 遺跡の概要	
1 遺構の概要	18
2 基本土層	28
第2節 1面の遺構と遺物	
1 2区	
(1) 土坑	30
(2) 溝	30
(3) 畠	32
(4) 遺構外出土遺物	32
2 3-1区	
(1) 溝	33
(2) 水田	33
(3) 遺構外出土遺物	35
3 3-2区	
(1) 土坑	36
(2) 水田	36
(3) 遺構外出土遺物	38
第3節 2面の遺構と遺物	
1 2区	
(1) 土坑	39
(2) 畦畔	39
(3) 旧河道	39
2 3-1区	
(1) 溝	40
3 3-2区	
(1) 土坑	40
(2) 溝	40
第4節 3面の遺構と遺物	
1 3-1区	
(1) 土坑	43
(2) 溝	44
(3) 遺構外出土遺物	47
2 3-2区	
(1) 溝	51
(2) 遺構外出土遺物	52
第5節 4面の遺構と遺物	
1 2区	
(1) 畠	53
(2) 旧河道	54
2 3-1区	
(1) 畠	54
3 3-2区	
(1) 畠	57
第6節 5面の遺構と遺物	
1 2区	
(1) 竪穴住居	63
(2) 掘立柱建物	68
(3) 土坑	69
(4) ビット	70
(5) 溝	72
(6) 遺構外出土遺物	73
2 3-1区	
(1) 竪穴住居	74
(2) 土坑	76
(3) 遺構外出土遺物	78
3 3-2区	
(1) 土坑	79
(2) ビット	80
(3) 溝	81
(4) 畠	84
(5) 遺構外出土遺物	84
第7節 6面の遺構と遺物	
1 2区	
(1) 畠	86
第8節 まとめ	90

挿 図 目 次

第1図	北関東自動車道関連遺跡	1
第2図	遺跡位置図	2
第3図	調査区および隣接遺跡位置図	4
第4図	明治時代前半の周辺地形図	8
第5図	遺跡周辺地形分類図	9
第6図	渡良瀬川扇状地の地形分類図	9
第7図	周辺遺跡の分布図	11
第8図	遺跡の基本土層	19
第9図	全体図(1～3面)	20
第10図	全体図(4～6面)	21
第11図	2区全体図(1・2・4面)	22
第12図	2区全体図(5・6面)・遺構外遺物出土状況図	23
第13図	3-1区全体図(1～3面)	24
第14図	3-1区全体図(4・5面)	25
第15図	3-2区全体図(1～4面)	26
第16図	3-2区全体図(4・5面)	27
第17図	2区1面1号土坑	30
第18図	2区1面1号溝	30
第19図	2区1面2～6号溝	31
第20図	2区1面高	32
第21図	2区1面遺構外出土遺物	32
第22図	3-1区1面1号溝	33
第23図	3-1区1面水田	34
第24図	3-1区1面水田出土遺物	34
第25図	3-1区1面遺構外出土遺物	35
第26図	3-2区1面1・2号土坑	35
第27図	3-2区1面水田出土遺物	36
第28図	3-2区1面水田(1)	37
第29図	3-2区1面水田(2)	38
第30図	2区2面2号土坑	39
第31図	2区2面畦畔	39
第32図	24号トレンチ断面図	39
第33図	3-1区2面2～5号溝	41
第34図	3-2区2面3号土坑、1～4号溝	42
第35図	3-1区3面1～6号土坑	43
第36図	3-1区3面6号溝出土遺物(1)	44
第37図	3-1区3面6号溝・同出土遺物(2)	45
第38図	3-1区3面7・8号溝	46
第39図	3-1区3面9号溝・同出土遺物(1)、10・11号溝	48
第40図	3-1区3面9号溝出土遺物(2)	49
第41図	3-1区3面遺構外出土遺物	50
第42図	3-2区3面5・9・10号溝・同出土遺物、同遺構外出土遺物	52
第43図	2区4面高	53
第44図	2区4面旧河道断面図	54
第45図	2区4面旧河道出土遺物	54
第46図	3-1区4面3・4号高	55
第47図	3-1区4面1・2号高(1)	56
第48図	3-1区4面1・2号高(2)	57
第49図	3-2区4面1・1・2号高	59
第50図	3-2区4面2-1～5号高	60
第51図	3-2区4面3号高	61
第52図	3-2区4面4号高	61
第53図	3-2区4面5-1・2号高、6-1・2号高	62
第54図	2区5面1号住居(1)	63
第55図	2区5面1号住居(2)	64
第56図	2区5面1号住居出土遺物	65
第57図	2区5面2号住居	66
第58図	2区5面2号住居出土遺物	67
第59図	2区5面1号掘立柱建物・同出土遺物	68

第60図	2区5面3～6号土坑	70
第61図	2区5面ピット群	71
第62図	2区5面7・8号溝	72
第63図	2区5面遺構外出土遺物	73
第64図	3-1区5面1号住居(1)	74
第65図	3-1区5面1号住居(2)	75
第66図	3-1区5面1号住居出土遺物	75
第67図	3-1区5面7～26号土坑	77
第68図	3-1区5面遺構外遺物	78
第69図	3-2区5面4号土坑・同出土遺物	79
第70図	3-2区5面5・6号土坑	80
第71図	3-2区5面1～4号ピット	81
第72図	3-2区5面6・7号溝	82
第73図	3-2区5面8号溝	83
第74図	3-2区5面高	84
第75図	3-2区5面遺構外遺物	84
第76図	2区6面3・4号高	87
第77図	2区6面1・2号高	89

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	15
第2表	調査面別遺構一覧表	18
第3表	2区1面遺構外出土器	33
第4表	2区1面遺構外出土陶磁器類	33
第5表	2区1面遺構外出土石器	33
第6表	2区1面遺構外出土鉄製品	33
第7表	3-1区1面水田出土陶磁器	34
第8表	3-1区1面水田出土鉄製品	34
第9表	3-1区1面遺構外出土陶磁器	35
第10表	3-1区1面遺構外出土鉄製品	35
第11表	3-2区1面水田面積計測表	36
第12表	3-2区1面水田出土陶磁器	37
第13表	3-1区3面6号溝出土器	44
第14表	3-1区3面6号溝出土鉄製品	44
第15表	3-1区3面9号溝出土遺物	47
第16表	3-1区3面遺構外出土鉄製品	50
第17表	3-1区3面遺構外出土器	51
第18表	3-2区3面10号溝出土遺物	51
第19表	3-2区3面遺構外出土器・鉄製品	52
第20表	2区4面旧河道出土遺物	54
第21表	2区5面1号住居出土器	65
第22表	2区5面2号住居出土器	67
第23表	2区5面2号住居出土鉄製品	68
第24表	2区5面1号掘立柱建物出土鉄製品	69
第25表	2区5面1号掘立柱建物計測表	69
第26表	2区5面ピット計測表	70
第27表	2区5面遺構外出土遺物	73
第28表	3-1区5面1号住居出土器	75
第29表	3-1区5面遺構外出土器	78
第30表	3-1区5面遺構外出土石器	78
第31表	3-2区5面4号土坑出土遺物	79
第32表	3-2区5面ピット計測表	80
第33表	3-2区5面遺構外出土器	85
第34表	3-2区5面遺構外出土石器	85
第35表	掘立柱石材表	90
第36表	割片石材組成表	90
第37表	高計測数値一覧表	91

写真図版目次

- PL.1 1区全景(東から)
2区1面空中写真(南東から)
- PL.2 2区1面1号溝全景(東から)
2区1面2号溝全景(東から)
2区1面3号・5号溝全景(北から)
2区1面4号溝、1号土坑全景(北から)
2区1面6号溝全景(東から)
2区1面高全景(北から)
2区2面2号土坑全景(南から)
2区2面畦畔全景(南西から)
- PL.3 2区4面高全景(南東から)
2区5面空中写真(南から)
- PL.4 2区5面1号住居完壁全景(南から)
2区5面1号住居廻り方全景(南から)
- PL.5 2区5面1号住居遺物出土状況(南から)
2区5面1号住居作業風景(南から)
2区5面1号住居カマド遺物出土状況(南から)
2区5面1号住居カマド完壁全景(南から)
2区5面2号住居完壁全景(西から)
- PL.6 2区5面2号住居遺物出土状況(西から)
2区5面2号住居廻り方全景(西から)
2区5面2号住居作業風景(北から)
2区5面2号住居カマド完壁全景(西から)
2区5面2号住居カマド廻り方全景(西から)
2区5面1号掘立3号ビット遺物出土状況(南から)
2区5面1号掘立6号ビットセクション(南から)
2区5面1号掘立7号ビットセクション(南から)
2区5面1号掘立12号ビットセクション(南から)
- PL.7 2区5面1号掘立全景(西から)
2区5面25~27号ビット全景(南から)
2区5面3号土坑全景(南から)
2区5面4号・5号土坑全景(南から)
2区5面6号土坑全景(南から)
- PL.8 2区5面14~16号ビット全景(南から)
2区5面13号ビットセクション(南から)
2区5面14号ビットセクション(南から)
2区5面15号ビットセクション(南から)
2区5面7号・8号溝全景(北東から)
- PL.9 2区6面空中写真(東から)
2区6面空中写真(南から)
- PL.10 3区全景(南東から)
3-1区1面全景(北東から)
- PL.11 3-1区2面全景(北東から)
3-1区2面2~5号溝全景(南東から)
- PL.12 3-1区3面6号溝(東から)
3-1区4面全景(南西から)
3-1区4面全景(南東から)
3-1区4面作業風景(南東から)
- PL.13 3-1区5面全景(西から)
3-1区5面1号住居全景(南西から)
- PL.14 3-1区5面1号住居遺物出土状況(東から)
3-1区5面1号住居カマド全景(南から)
3-1区5面1号住居内2号土坑全景(西から)
3-2区1面水田全景(北東から)
3-2区1面全景(北東から)
- PL.15 3-2区1面東側全景(西から)
3-2区1面1号土坑全景(北西から)
3-2区1面6号畦畔(南から)
3-2区1面2号畦畔(北から)
3-2区1面2号畦畔セクション(南西から)
- PL.16 3-2区2面1~4号溝全景(南東から)
3-2区2面東側全景(西から)
- PL.17 3-2区3面5号溝全景(南から)
3-2区3面9号・10号溝全景(南西から)
- PL.18 3-2区4面1号畠全景(北東から)
3-2区4面2号畠全景(南西から)
- PL.19 3-2区4面2号畠(南東から)
3-2区4面2号畠(南東から)
- PL.20 3-2区4面5号・6号畠全景(南西から)
3-2区4面5号・6号畠全景(東から)
- PL.21 3-2区4面3号畠(南西から)
3-2区5面4号土坑遺物出土状況(西から)
3-2区5面7号・8号溝全景(西から)
- PL.22 3-2区5面畠全景(東から)
3-2区5面東側全景(北東から)
- 以下、出土遺物
- PL.23 2区1面遺構外、3-1区1面水田、3-1区遺構外、3-2区水田、3-1区6号溝、3-1区9号溝(1)
- PL.24 3-1区9号溝(2)、3-1区遺構外(1)
- PL.25 3-1区遺構外(2)、3-2区3面遺構外、3-2区3面10号溝、2区5面1号住居、2区5面2号住居(1)
- PL.26 2区5面2号住居(2)、1号掘立柱建物、2区5面遺構外、3-1区1号住居
- PL.27 3区5面遺構外、3-2区5面4号土坑
- PL.28 3-2区5面遺構外

第1章 発掘調査に至る経緯

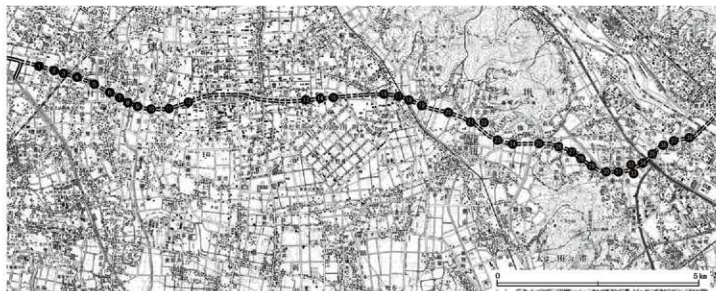
只上深町遺跡は北関東自動車道(伊勢崎～県境)建設事業に伴い、平成17(2005)年1月から同年3月31日、および平成17年10月1日から平成18(2006)年3月31日にかけて発掘調査が行われた。

北関東自動車道は高崎ジャンクションで関越自動車道から分岐して、前橋市南部・伊勢崎市北部・太田市北部を経て、栃木県、茨城県を東西に連絡する高速自動車道路である。

この伊勢崎インターチェンジから栃木県境までの17.7kmの発掘調査が開始されたのは、平成12年度である。平成12(2000)年6月、日本道路公団、群馬県土木部、群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の4者による協議において、道路公団から橋梁下部工事等の工事優先区間の一部について、同年8月から発掘調査実施の要請があった。これを受けて当事業団は用地解決状況、残土置き場の確保、側道と本線の調査地区分

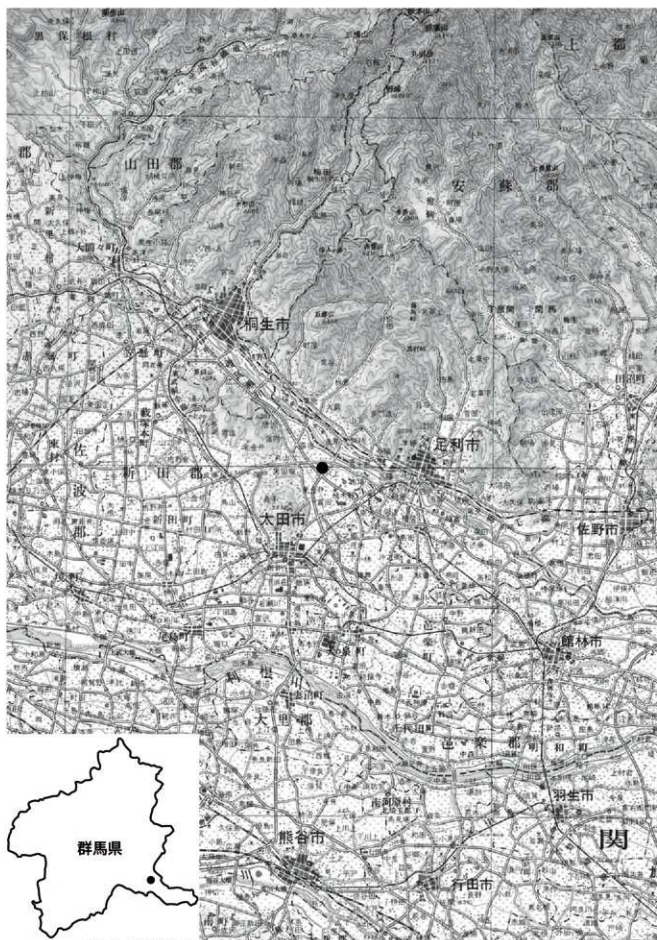
の検討等、調査実施への準備を進めた。8月1日、日本道路公団、群馬県教育委員会、当事業団の3者による「北関東自動車道(伊勢崎～県境)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し、これに基づき公団と事業団による平成12年度発掘調査の契約が結ばれ、発掘調査は伊勢崎市上遺跡から着手となった(第1図)。

只上深町遺跡は、矢場川を挟んで南西に矢部遺跡が、南から東にかけて新島遺跡の1区から4区が、北東方向には道原遺跡が隣接している。さらに北関東自動車道建設事業に伴う発掘調査以前に、一般県道竜舞山前停車場線緊急地方道路整備事業に伴う、矢部遺跡・新島遺跡の発掘調査が、平成15・16年に当事業団により実施されている。この新島遺跡の以東にある只上深町地内においても遺跡の存在が予測され、只上深町遺跡と仮称されて290mが調査されているが、この地区では遺構・遺物の検出はなかった。



番号	KT	遺跡名	所在地(調査時)
1	340	遺上遺跡	伊勢崎市二和町
2	350	大久保遺跡	伊勢崎市二和町
3	360	大上遺跡	佐波郡東村西小保方・上田
4	370	前道下遺跡	佐波郡東村上田
5	380	塚下遺跡	佐波郡東村上田
6	390	上穂穴遺跡	佐波郡東村東小保方
7	400	湯西遺跡	佐波郡東村田部井
8	410	下石塚遺跡	佐波郡東村田部井
9	420	下田遺跡	佐波郡東村田部井
10	430	南田原遺跡	佐波郡東村田部井
11	440	下大久保遺跡	佐波郡東村田部井
12	450	大久保原遺跡	新田郡新島本町大久保
13	510	大原白石遺跡	新田郡新島本町大原
14	520	山ノ神野田遺跡	新田郡新島本町山ノ神
15	530	山ノ神南原遺跡	新田郡新島本町山ノ神
16	540	新島西野原遺跡	新田郡新島本町新島
17	550	西長岡根塚古墳群	太田市西長岡町
18	560	熱谷戸遺跡	太田市西長岡町
19	570	西長岡岡遺跡	太田市西長岡町
20	580	菅塩遺跡	太田市菅塩町
21	590	成塚遺跡	太田市成塚町
22	600	成塚向山古墳群	太田市成塚町・成金井町
23	610	大塚遺跡	太田市大塚町
24	620	上張戸遺跡	太田市張戸町
25	630	東山遺跡	太田市張戸町字東山
26	640	藤原遺跡	太田市藤原町
27	650	古久保平太田遺跡	太田市藤原町
28	660	二の宮遺跡	太田市藤原町
29	670	八ヶ丘遺跡	太田市藤原町・東今泉町
30	680	大道西遺跡	太田市東今泉町
31	690	大道東遺跡	太田市東今泉町
32	700	赤倉遺跡	太田市以上町
33	710	鹿島遺跡	太田市東今泉町
34	720	内久保遺跡	太田市以上町
35	730	穴倉遺跡	太田市以上町
36	740	只上深町遺跡	太田市只上町
37	750	新島遺跡	太田市只上町
38	760	道原遺跡	太田市以上町

第1図 北関東自動車道開通関連遺跡



第2図 遺跡位置図(国土地理院 地勢図1:200,000「宇都宮」(平成16年8月1日発行)使用)

第2章 調査の方法と経過

第1節 発掘調査の方法

(1) 遺跡番号

北関東自動車道(伊勢崎～県境)建設事業に伴う発掘調査では、伊勢崎市三和町の書上遺跡(KT340)から太田市只上町の道原遺跡(KT760)まで、遺跡ごとに北関東自動車道の略称記号「KT」を付けた遺跡番号で登録した(第1図)。只上深町遺跡の遺跡番号は「KT740」である。この番号で遺物の注記が行われている。なお、「KT001～KT330」は北関東自動車道(高崎～伊勢崎)関連の遺跡番号である。

(2) グリッドの設定

グリッドの設定には国家座標(日本測地系第IX座標系)を用いた。これは北関東自動車道関連遺跡のグリッドに共通である。グリッドは南北方向のX座標(X軸)、東西方向のY座標(Y軸)の南東交点を基準とし、各座標値の一桁数値が0から5になる5m間隔の数値をグリッドとして採用した。一つのグリッドの大きさは5m×5mとなり、グリッド番号は各座標値の下3桁の値を用い、X軸-Y軸の順に併記した。たとえば3-2区内のグリッド表示の一例を示すと、X座標37100、Y座標38500の場合、このグリッド番号は「100-500」となる(第9～16図)。

(3) 調査区の設定

只上深町遺跡と南西に隣接する矢部遺跡、南に隣接する新島遺跡との境界は、矢部川の流路である。調査区は北東から南西に約340mあることから、現道や用水を境界として西から1区・2区・3区を設定した。ただし3区については、現道を境に3-1区、3-2区と分割、さらに調査の過程で3-2区を3-2-1区、3-2-2区と細分して発掘を行っていた。しかし整理作業の段階では、その煩雑を避けるために3-2-1区と3-2-2区を統合して、3-2区と一括して報告することになった(第3図)。

(4) 遺構の調査

表土およびほ場整備盛土については重機によって掘削した。その後、人力による遺構確認作業を行い、遺構平面の確認後遺構を掘り下げた。遺構の掘削も人力によった。また、調査面が多数に及んだため、随時トレンチ調査を併用して調査面を確認しながら進めた。この場合も可能な範囲で重機による掘削を行っている。

遺構番号は調査年や調査担当者の変更があることから、遺跡全体の通し番号ではなくて、調査区ごとに1から通し番号を付けた。

遺構写真の撮影は、6×7cm判モノクロフィルム、35mm判モノクロフィルム、35mm判カラーリバーサルフィルムの3種類を基本とした。全景写真については、高所作業車を使用したり、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した調査面もある。

遺構測量は、平面図については電子平板によるデジタル測量を、断面図についてはアナログ実測で行っている。住居や土坑などの平面図は1:20、水田や畝、溝については1:40とし、土層断面図は1:20で作成した。

第2節 調査の経過

本調査に先立ち試掘調査を平成16(2004)年の11月10日から3日間実施、水田面の存在を確認した。そして2区の調査を齋藤利子・黒澤照弘の2名で平成17(2005)年1月から開始、3月末日で終了した。1区と3区の調査については石塚久則・佐藤亨彦の2名で、平成17(2005)年10月から開始し平成18(2006)年3月末日をもって終了した。

平成16(2004)年

11月10日 試掘調査を開始。1号～10号トレンチを設定する。

11日 複数の水田異質(As-B土、洪水層下)を検出する。

12日 記録作業と埋め戻し作業を行う。

平成17(2005)年



第3図 調査区および隣接遺跡位置図

(この地図の作成にあたっては、太田市長の承認を得て、同市発行の2,500分の1の地形図を使用し、複製したものである)

- 1月 7日 2区の作業準備に入る。
- 11日 重機による表土剥ぎを開始する。
- 18日 周辺の草刈りとジョレンによる遺構確認作業を行う。
- 20日 重機による表土剥ぎを終了する。
- 24日 1～3号溝を検出。
- 25日 1～3号溝の全景写真と平面図の作成を行う。
- 26日 4号溝、1号土坑の調査とIV層下面の検出作業を行う。
- 27日 畝、5・6号溝の調査を行う。
- 2月 1日 2区の空撮をラジコンヘリで実施する。
- 3日 6号溝の写真撮影、重機による掘削を開始する。
- 7日 新たな検出面（調査時3面、整理時に2面に変更）の精査を行う。
- 9日 水田を検出、2号土坑の調査を行う。
- 14日 2号土坑の写真撮影と旧河道のセクション写真撮影。重機による掘削を行う。
- 15日 4面の遺構確認作業を行う。
- 18日 畝を検出する。
- 21日 4・5面の遺構確認作業を行う。
- 22日 5面から住居跡、掘立柱建物跡を検出する。
- 28日 1号掘立柱建物跡の調査を行う。
- 3月 2日 1号住居、1号掘立柱建物の調査を行う。
- 7日 8号溝の調査を終了する。
- 8日 5面の空撮を実施する。
- 9日 1・2号住居の調査を継続する。
- 10日 1号住居の遺物出土状況と2号掘立柱建物（整理時に25～27号ピットに変更）の写真撮影を行う。
- 15日 1号住居のカマド調査と空撮を実施する。
- 16日 住居の調査継続、4・5号土坑の写真撮影と実測図の作成を行う。
- 18日 住居の掘り方調査と写真撮影を行う。
- 22日 1・2号住居の掘り方調査と6号土坑の調査を行う。
- 25日 2区の調査をすべて終了する。
- 28日 発掘区の埋め戻し作業を行う。
- 30日
- ※ ※ ※
- 10月 4日 3区は道を挟んで西側を3-1区、東側を3-2区に分ける。土層を確認するために試掘グリッドを設定する。
- 7日 3-1区は3グリッド、3-2区は7グリッドを掘削する。
- 12日 3-1区1～3グリッド、3-2区1～7グリッドの全景写真撮影と1区草刈り作業を行う。
- 17日 1区、3-1区、3-2区の表土掘削を開始する。
- 19日 3-2区1面（近世面）の調査を行う。
- 21日 3-2区で畦畔を検出する。
- 26日 3-2区近世水田調査、3-1区トレンチ調査を行う。
- 31日 1区の調査を終了する。
- 11月 8日 3-1区近世面の調査、3-2区近世面の調査を行う。
- 14日 3-2区近世面の掘り下げと3-2区北東部の写真撮影を行う。
- 15日 3-2区北東部で2面（古代）を検出する。
- 29日 3-2区を高所作業車で写真撮影を行う。



3-1区作業風景



3-2区作業風景

第2章 調査の方法と経過

30日	3-2区の畦畔の断面を写真撮影する。
12月 2日	3-2区水田面の測量を実施する。
9日	1面(IIb層下)As-B上面の調査を終了する。
12日	3-2区2面(IV層下)の調査に着手する。
13日	3-2区1~4号溝の調査を行う。
16日	3-2区3面の遺構検出作業を行う。
平成18(2006)年	
1月 6日	3-2区1面-水田、2面土坑・溝(古代)、3面(報告4面)一畝(古代)、4面(報告5面)一畝(古代)と把握する。
10日	5号溝調査。
16日	3-2区4号土坑の調査。
19日	3-1区1面水田、3-2区トレンチ発掘(As-C上面まで)を行う。
25日	3-2区北東部から縄文後期の土器片が出土する。
26日	3-1区写真撮影と測量作業を行う。
31日	3-2区北東部の縄文包含層調査を行う。
2月 2日	3-1区IV層下面の調査、3-2区北東部の縄文包含層の調査を継続する。
3日	3-2区北東部で旧石器の調査を行う。
6日	3-2区高所作業車による写真撮影の実施。
7日	3-1区3面を検出、3-2区北東部の旧石器調査を継続する。
9日	3-2区縄文・旧石器調査を継続する。
14日	3-1区6~8溝の調査、3-2区北東部から埋め戻しを開始する。
23日	3-1区高所作業車による写真撮影、3-2区南西部縄文と旧石器の調査を実施する。
24日	3-1区5面住居跡を検出する。
28日	3-1区1号住居カマドの調査を行う。
3月 2日	3-1区縄文包含層の調査を行う。
3日	3-1区1号住居の床下調査を行う。
6日	3-1区、3-2区埋め戻し作業を開始する。
9日	3-1区旧石器調査、土坑調査を行う。
17日	本日で作業員の雇用を終了する。
24日	埋め戻し作業終了、機材を撤収する。

第3節 整理作業の方法

報告書作成のための整理作業は、平成23(2011)年5月1日から平成24(2012)年3月31日まで実施した。

出土遺物については調査終了時までに洗浄され、遺跡略号(KT740)、調査区、調査面、遺構名・グリッド名等、遺物No.が注記されている。

整理作業においては、遺物を種別・器種別に分類した。そして縄文土器、土師器・須恵器、陶磁器、石器・石製品等のそれぞれについて、接合・復元・写真撮影・実測・トレース作業を実施した。これについては、接合復元班、縄文実測班、石器専業班、実測班、トレース班、写真室がそれぞれに対応した。遺物の実測は手作業で実施したが、その一部については長焦点デジタルカメラと三次元計測システムで測定して素図を作成、最終確認は手作業で行い図化した。これらのトレースも手作業で行い、作成したものをスキャニングしてデジタルデータ化して報告書掲載図とした。古銭、金属製品については当事業団保存処理室で錆落としの作業を実施後、実測等を行った。

遺構図については平面図と断面図の照合・修正とレイアウト作業を編集班で行い、デジタルトレースをデジタル専業班が行い報告書掲載図とした。

遺構写真については報告書に掲載する写真の選定とレイアウトを編集班で行い、調査時に撮影したネガフィルムをスキャニングし版下作成作業をデジタル専業班が実施した。遺物写真撮影は当事業団写真室でデジタルカメラを用いて行い、編集班のレイアウトをもとにデジタル専業班が加工・編集し、図版作成を実施した。

併行して本文・表・土層注記等の原稿執筆を行った。報告書の出稿にあたっては原稿、挿図、写真のいずれもデジタルデータ化を行った。

その後、校正作業を経て、平成24(2012)年3月に「只上深町遺跡」として発掘調査報告書(本報告)の刊行を行った。

報告書に掲載した資料については、管理台帳作成後、収納作業を行ったが、掲載されなかった遺物については出土地区・遺構ごとに分類して収納作業を行った。

第3章 遺跡の立地と周辺の遺跡

第1節 遺跡の立地

只上深町遺跡は太田市只上町地内に所在する。東部伊勢崎線太田駅の北北東約5km、平成20(2008)年に開通した北関東自動車道太田インターチェンジからは北東約1.3kmの位置にある。

当遺跡の所在する太田市は関東平野の北西部にあり、群馬県東部のいわゆる東毛地区に位置している。南の利根川と北東の渡良瀬川に挟まれて、北に桐生市・みどり市、北東に県境を挟んで栃木県足利市、南東は邑楽郡邑楽町と大泉町、南は利根川を県境として埼玉県熊谷市、西は伊勢崎市にそれぞれ接している(第2図)。

以下、『太田市史 通史編 自然』(平成8(1996)年)の内容を参考として記述する。

太田市の地形は丘陵地、台地および低地に概略区分される。丘陵地は市域の北半分を占めている金山(最高地点235.8m)と八王子山(262.8m)である。金山丘陵は吉沢字萩原のごく低い鞍部を境として、八王子丘陵と離れている。しかし渡良瀬川が現在の流路をとる以前、これらの丘陵は足尾山地とひと続きになっていたものと考えられている。金山・八王子丘陵の西側には大間々扇状地の低平な台地地形が広がる。そして丘陵の東と足尾山地との間には渡良瀬川扇状地が存在し、只上深町遺跡はこの扇状地上に立地している(口絵参照)。

渡良瀬川扇状地は桐生市赤岩橋付近(標高110m)を扇頂に、太田市東部の下小林町から足利市の御厨地区付近(標高30m)を扇端とする、南北18km・東西7.5kmに及ぶ。形成期の異なる4つの扇状地面(岩留面を含む)で構成されている。各扇状地は南北に長く分布し、東西の幅が狭い。そして、扇状地面上に旧河道地形や沖積低地が発達するために、面の分布が分断され、複雑な形態を示めている。低地は金山の東側で幅広くなり、また渡良瀬川の旧河道と考えられる矢場川に沿って帯状に南南東に続いている。

渡良瀬川扇状地は次のように分けられている。

扇状地Ⅰ面—八王子丘陵から金山丘陵の東麓に沿って細長く分布する。幅0.7～1km弱の細長い地形面である。本面には、扇状地礫層の上に厚さ80cm程度の上層ローム層が堆積している。その下部に板鼻褐色軽石層(As-BP)が5～10cmの厚さで堆積する。

扇状地Ⅱ面—Ⅰ面の東側、薮川台地と矢場川との間に分布する。丸山東部から只上の猿楽・矢部、富若、上小林町の集落列を西縁とし、只上東部から市場台地を東縁とする。市場—植木野—上小林町のラインで幅が約2.5kmある。本面には風成(一次)堆積のローム層は存在しないが、扇状地礫層の直上に厚さ0.8～1mの二次(再)堆積のローム層が認められる。上部ローム期の後半から末期に、離水が完了していない本面上に降下堆積した火山灰が移動し、再堆積したものと推察されている。

扇状地Ⅲ面—Ⅱ面の東側、矢場川から浅間山丘陵の間に形成された。本面は、歴史時代まで渡良瀬川の氾濫原であった。只上に広く、東新町北部から市場南東部にも分布する。そして本面には旧河道が顕著に発達し、二次堆積のローム層は認められない。扇状地を形成した渡良瀬川が西から東へ遷移したことがわかる。

上記の区分に従うと、扇状地Ⅰ面には大道西遺跡と大道東遺跡の所在する東今泉の台地が該当し、Ⅱ面については矢部遺跡以西が該当する。Ⅲ面については縄文から古代の集落が発見されている。しかしながら渡良瀬川扇状地の区分については、北関東自動車道関連の遺跡地調査成果によって、扇状地の区分をはじめ、より複雑な地形発達の変遷があったことが想定され、これまでの地形区分に再検討の余地が生じている。

当遺跡は第6図で示したように、扇状地Ⅱ面からⅢ面上の標高約46.3～48mに立地している。一方、第5図の分類に従うと谷底平野に該当する。調査時に行った土層の観察から得られた基本土層は第8図に、矢場川を挟んだ南側の新島遺跡の基本土層とともに示し、第4章第1節の2で詳述してある。

なお、3—2区の調査時(地表から110cmほど掘り下げた状況)における早田勉氏の見解を参考までにあげる。

第3章 遺跡の立地と周辺の遺跡

下位より若干色調が暗い灰色土(層厚1cm以上)、灰色粗粒火山灰層(層厚1cm)、灰褐色土(層厚4cm)、若干色調の暗い灰色土(層厚14cm)、灰色土(層厚5cm)、黄灰色砂層(層厚4cm)、砂混じり灰色土(層厚10cm)、灰褐色土(層厚5cm)、炭化物混じりで若干色調の暗い灰色土(層厚21cm)、鉱毒対策関連客土(層厚40cm)が認められる。灰色粗粒火山灰層は浅間B軽石に同定されるものであり、その下位の若干色調が暗い灰色土は水田耕土に、また上位にある黄灰色砂層の直下にも畦畔上の高まりや地割れのような構造が認めらる。

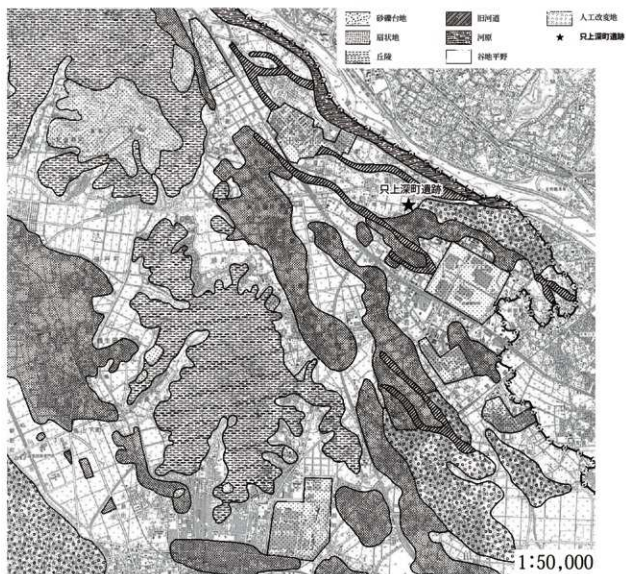
渡良瀬川が現河道を流れるようになる前の旧河道につ

いては、現在の菟川と矢場川の流路が想定されているが、発掘調査では複数の旧河道が明らかにされている。さらに周辺遺跡の調査からは、火山灰のほかに泥流起源の特徴的な洪水堆積物をはじめとする複数の洪水起源の砂層が認められている。洪水層のうち、泥流起源の特徴的な洪水堆積物については、弘仁9(818)年、あるいはそれに近似した年代指標に使える可能性も指摘できる。

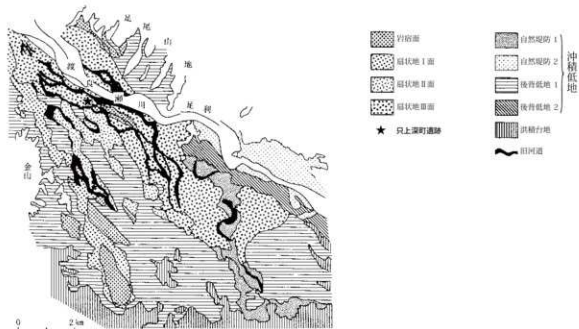
当遺跡を含めた周辺地区の遺跡立地や展開に関する地形発達史、比較的新しい地質構造の解明は今後とも必要であろう。



第4図 明治時代前半の周辺地形図 (第一軍管地方迅速測図「足利町」「太田町」(明治17・18年測図)を使用)



第5図 遺跡周辺地形分類図(群馬県「土地分類基本調査」深谷(1991) 桐生及び足利(1977)による)



第6図 渡良瀬川扇状地の地形分類図(『太田市史 通史編 自然』p40、1966による)

第2節 周辺の遺跡

現在の太田市は、平成17(2005)年に太田市と新田郡下の新田町・尾島町・藪塚本町との合併で誕生した新市である。遺跡の所在する太田市只上町は、市北東部の毛里田地区にある。渡良瀬川中流右岸に位置し、対岸は栃木県足利市になる。

明治22(1889)年に渡良瀬川右岸に位置した8箇村、すなわち只上、市場、富若、東今泉、古氷、矢田堀、吉沢、丸山の各村が合併して毛里田村となった後、昭和38(1963)年に旧太田市に合併、編入している。毛里田地区は旧村名と大字太田の瀬戸口を含め、9つの大字から構成されている。そして遺跡地は渡良瀬川の旧河道のひとつであった、矢場川と沖積低地に挟まれた低台地上にある(第4図)。

第7図は太田市毛里田地区からその南の葎川地区、金山丘陵の北東麓から渡良瀬川扇状地上にかけて形成された遺跡の分布図である。遺跡番号の1が当遺跡であり、13までが北関東自動車道建設に伴って調査された遺跡である。また111～120は栃木県足利市所在の遺跡になる。

以下、当遺跡周辺の歴史的環境を時代を追って記述する。なお、文中の遺跡名の後ろに付く〔〕番号は第7図の遺跡番号に対応している。

(1) 旧石器時代

当遺跡では3-1区と3-2区で旧石器調査を実施したが、遺物は検出されていない。

平成8(1996)年刊行の『太田市史 通史編 原始古代』では、旧太田市域で確認されている遺物を出土した遺跡を16遺跡としているように、金山・八王子丘陵周辺地域でも、これまで旧石器時代の遺跡は非常に少なかった。さらに、これまで発見された遺跡は、低地部を望む丘陵先端部に立地しており、丘陵内部の山間部に立地する遺跡は発見されていなかった。ところが、北関東自動車道建設事業に伴う峯山遺跡の調査によって、As-BPグループ中・上部降灰層準の第1文化層(伊豆・箱根系黒曜石と信州系黒曜石を利用した石器群)と、AT下層の暗色帯層準の第2文化層(剥片を主体とした石器群、主な石器石材はチャート)が検出された。ローム層やテフラなどの

詳細、石器群の内容を解明するために大きな役割を果たすことになった。

渡良瀬川扇状地については、同じく北関東自動車道建設事業に伴うハケ入遺跡〔7〕、矢部遺跡〔4〕が調査されている。ハケ入遺跡では一次堆積層のAs-YP下層から湧別技法による細石刃石器群が検出された。石器石材は硬質頁岩を主体として、さらに黒曜石の原産地は箱根産、神津島産、信州産が確認された。矢部遺跡では礫層上面からチャート製の剥片が出土した。

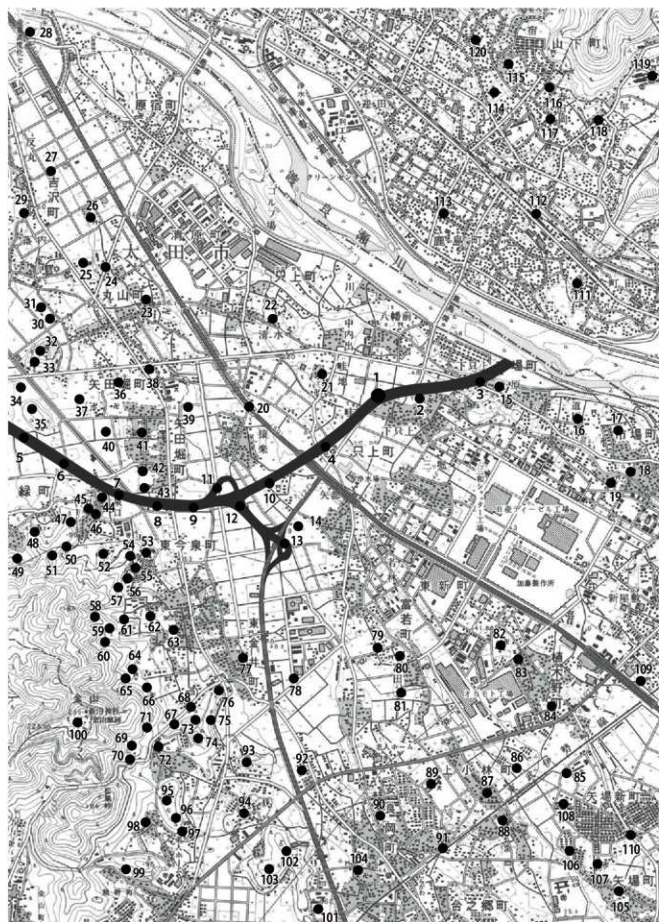
このように金山・八王子丘陵や渡良瀬川扇状地など渡良瀬川右岸地域では、遺跡の発見例が増加している。

この他、井口遺跡〔76〕からチャート製の槍先形尖頭器、蕨山北遺跡と焼山南遺跡〔94・102〕から槍先形尖頭器、ナイフ形石器など、内並木遺跡〔96〕、細田遺跡〔101〕からも槍先形尖頭器が採集されている。なお、渡良瀬川左岸の地域には遺跡は少なく、〔119〕の智光寺跡に隣接する平石遺跡からチャート製の石器が出土している程度である。

(2) 縄文時代

当遺跡からは縄文時代の確実な遺構は検出されていないが、3-2区を主体に中期の土器片と後期の称名寺式、堀之内1式の土器片、そして石器が出土している。

渡良瀬川扇状地の扇頂部付近を横断している北関東自動車道、その発掘調査の結果は、『大道東遺跡(1)―縄文時代編―』2009年で指摘されているように、扇状地扇頂部付近に所在する遺跡の実態をある程度反映しているものと思われる。それは第7図中〔9〕の大道東遺跡(1)の乗前遺跡〔11〕、東今泉鹿島遺跡〔13〕、向矢部遺跡〔10〕、矢部遺跡〔4〕、只上深町遺跡〔1〕、新島遺跡〔2〕、道原遺跡〔3〕と続く遺跡の様相から明らかとなる。金山丘陵北東部の大道東遺跡〔9〕から乗前遺跡〔11〕にかけて中期後半から後期前半の住居(敷石住居を含む)や土坑が検出され、多量の遺物が出土している。隣接する鹿島浦〔12〕は上記遺跡の東端に位置しており、検出された集落の縁辺部にあっている。このために住居は検出されていないが、中期後半の埋張や土坑が発掘されている。これに続く向矢部遺跡や矢部遺跡からも早期の土坑群や中期後半から後期前半の土坑群が検出されており、遺跡は継続的に発見される。しかしながら当遺跡や新島遺跡では縄



第7図 周辺遺跡の分布図 (1:25,000)

文時代の遺構は検出されていない。そして再び渡良瀬川右岸の道原遺跡において中期の集落が出現している。これらのことから、この時期渡良瀬川の旧河道は、当遺跡や新島遺跡周辺を流れていたものであろう。

後期後半以降になると遺跡が極端に減少して、この時期から弥生時代にかけて、居住はほとんど行われていなかったと思われる。

渡良瀬川扇状地上で最も古い遺構は、下宿遺跡(78)で検出された爪形文土器を伴う草創期の土坑である。続く早期では金山丘陵北東部の東今泉鹿島遺跡(13)で押型文土器が出土している。前期では金山丘陵南東部の細田遺跡(101)と北部丘陵沿いの二の宮遺跡(6)で集落が、東今泉鹿島遺跡で土坑が検出されている。

渡良瀬川左岸では前期までの遺跡が多く、中期以降の遺跡は少ない。

(3) 弥生時代

当遺跡の3-1区、3-2区から中期中葉の土器片が出土している。いずれも遺構外からの出土である。

渡良瀬川流域における弥生時代遺跡の分布は希薄である。金山丘陵北東部の小丸山遺跡(35)で遺物の散布が認められるほか、同東部の葎川左岸、磯之宮遺跡(86)で中期後半の住居が検出されている。さらに東の渡良瀬川流域(付近の芋ノ森遺跡[109]で中期の土器が確認されている程度である。

渡良瀬川左岸でも弥生時代の遺跡は希薄である。

(4) 古墳時代

当遺跡からは、古墳時代の遺構と遺物は検出されていない。

古墳時代前期の遺跡は八王子・金山丘陵西部において急激に増加するが、渡良瀬川扇状地ではそれほど多くはない。住居跡は八王子丘陵南東部の丸山北遺跡(31)で確認されているほか、葎川左岸の渡良瀬川扇状地上に位置する、磯之宮(86)・矢場向(108)・駒形(85)・駒形南遺跡(110)、同右岸の下宿遺跡(78)で検出されている。東今泉鹿島遺跡(13)で前期末から中期初頭にかけての集落がみられ、竪穴住居11軒がまとまって検出された。古米条里制水田跡(5)からは前期の土器が多量に出土した溝、渡良瀬川沿いの道原遺跡(3)からは周溝墓が検出さ

れている。金山丘陵南東部の細田遺跡(101)でも方形周溝墓が見られるが、全体的に遺跡数は少ない。古墳は、金山丘陵東部にあって、墳長117mの前方後方墳・藤本観音山古墳、次の段階である墳長約80mの前方後円墳である矢場兼師塚古墳がある。

渡良瀬川左岸では前期の遺跡はさらに少なく、春日遺跡(117)から方形周溝墓が検出されている以外、遺跡はほとんどない。

中期の遺跡は前期の遺跡と同様に数少ない。金山丘陵北東部地域では流作場[24]、ハケ入[7]、東今泉鹿島(13)などから住居や遺物が検出されている。5世紀前半から中頃になると金山丘陵の南東側低台地上に、墳丘長210mで主体部に長持形石棺を有する前方後円墳の太田天神山古墳や帆立貝式古墳の女体山古墳が築造されるが、当遺跡周辺では金山丘陵東部からやや離れて位置する、径60mの円墳である上小林稲荷山古墳(87)がある程度である。

後期になると集落だけではなく須恵器窯等の生産遺跡が見られるようになり、群集墳が多く築造される。

集落は八王子丘陵南東部で祭祀遺構が発見された反丸遺跡(27)、金山丘陵北東部のハケ入[7]、大道西[8]、そして大道東遺跡[9]、桑前遺跡[11]で100軒以上の竪穴住居が検出されている。金山丘陵で開始された須恵器生産との関連、すなわち須恵器工人の集落であった可能性が考えられる。八王子丘陵南東部や金山丘陵南東部では、遺跡数は少なく、検出住居数も多くない。渡良瀬川左岸地域においても同様である。

その須恵器窯跡は金山丘陵北東麓裾部から東麓裾部にかけて検出されている。菅ノ沢1遺跡(窯跡7基と未焼成窯跡6基)[50]、八幡窯跡群(窯跡4基)[53-57]、辻小屋窯跡群(窯跡4基)[59-60]、亀山須恵器窯跡(窯跡2基)[75]等、須恵器窯が40基以上確認されており、金山丘陵窯跡群と総称されている。この時期の一大生産地であった。操業開始時期は6世紀前半、6世紀後半以降大規模に生産されるようになる。生産された須恵器は群馬県内や埼玉県北部にまで供給されている。7世紀末から8世紀初頭になると、丘陵西側に移動して操業しており、この時期に大きく窯場が移動している。

また金山丘陵東麓には母衣墳輪窯(67)、金井口墳輪窯(68)も存在する。須恵器生産地の一角で墳輪窯も行わ

れていた。

水田遺構は東今泉鹿島遺跡〔13〕で古墳時代後期から飛鳥時代と推定される水田が検出された。

金山丘陵北東部から八王子丘陵南東部にかけての地域では、東毛地域唯一の終末期方墳である巖穴山古墳〔43〕、菅ノ沢御廟古墳〔45〕、家型石棺を有する今泉口八幡山古墳〔46〕等が集中している。この時期この地域の中心的場所であったと思われる、窯跡群との関連も考えられる。金山丘陵南東部では、丘陵の裾に沿って金井口古墳群〔71〕、亀山古墳群〔73〕、亀山京塚古墳〔74〕、内並木古墳群〔95〕、馬塚古墳群〔97〕、寺ヶ入古墳群〔98〕と続き、やや東に離れて焼山古墳群〔94〕がある。矢場川流域には、かつて90基が存在したとされる矢場川古墳群があった。『上毛古墳総覧』によると、毛里田村には22基が掲載されている。只上では円墳3基が確認されていたが、国道50号線に伴う発掘調査の結果、8基の古墳跡が確認され、猿楽古墳群〔20〕と呼ばれることになった。

渡良瀬川左岸にも多くの古墳群が存在している。

(5) 奈良・平安時代

当遺跡からは9世紀後半の堅穴住居3軒と掘立柱建物1棟、溝、畠が検出されている。

遺跡周辺は、律令制の施行に際して山田郡に属している。そして山田・大野・園田・真張の4郷が設置されていた。遺跡の所在する太田市只上は、そのうちの太野郷の一部とみることができる。大野郷地域は桐生市広沢町および市域の只上・市場・富若・上小林・植木野や足利市南大町にまたがる、並川と矢場川に挟まれた沖積平野の北部地域である。園田郷は市の吉沢・矢田堀・東今泉・東長岡・安良岡・台之郷・石原・下小林にまたがる地域、すなわち八王子丘陵南東麓、金山丘陵北東麓から南東地域が比定されている(『太田市史 通史編 原始古代』1996年)。当遺跡から西約2.5kmに位置する緑町には「古米」〔5〕の地名が残り、古くから山田郡の郡家比定地として注目されている。

奈良・平安時代になると、集落は大きく広がる。金山丘陵北東部では二の宮〔6〕、八ヶ入〔7〕、大道西〔8〕、大道東〔9〕、薬前〔11〕、鹿島浦〔12〕、東今泉鹿島〔13〕、猿楽〔20〕、向矢部〔10〕、矢部〔4〕の各遺跡から、多数の住居跡が検出されている。金山・八王子丘陵と渡良瀬川

の間の大部分で集落が見られるようになる。これに対して、渡良瀬川左岸ではこの時代の集落も少ない。

古墳時代後期から開始された須恵器生産が引き続き行われている。現在までに明らかになっている、須恵器生産が行われた窯跡は金山丘陵南東麓から東麓、八王子丘陵南東麓地域に分布している。7世紀末から8世紀初頭段階に丘陵西側に窯場が移動して作業が続けられる。9世紀後半には丸山腰巻遺跡〔34〕のように丘陵上ではなく、台地上から須恵器窯1基が検出されている。また、瓦窯跡は八王子丘陵南東麓に集中する傾向がある。

さらに須恵器の窯跡と重なるようにこの時期には鉄生産も開始される。八王子丘陵南東部に位置する峯山遺跡では7世紀末から8世紀前半の製鉄が(簡型炉3基)、鍛冶遺構、炭窯が検出されている。鉄生産から鉄器製作にいたる一連の作業が行われたことが明らかとなった。金山丘陵北東麓の菅ノ沢1遺跡〔50〕では平安時代の製鉄炉3基、炭窯1基が検出されている。寺中遺跡〔36〕でも平安時代の鍛冶遺構が検出されている。また、渡良瀬川左岸では春日遺跡〔117〕から、鋳造の可能性のある炉が検出されている。

このように八王子丘陵南西麓から金山丘陵北麓一帯にかけては、古墳時代後期以降、須恵器や瓦生産と製鉄・鍛冶の作業が行われていた、地域社会における重要な生産地域であった。そうした生産をになっていたのは、古墳時代にあつたは地元の豪族層であり、律令制の成立以降は、在地の有力豪族の中から郡司が選任され、郡の主導の元に窯業・製鉄生産が行われたものと考えられる。

八ヶ入〔7〕、大道西〔8〕、大道東〔9〕、鹿島浦〔12〕の4遺跡から、幅約12から13mで、両側に側溝を持つ道路遺構が検出されている。4遺跡間の約1kmをほぼ直線で結んでいることから、古代官道としての東山道駅路であろうと推察される。

東山道は古代の地域区分である五畿七道のひとつで、近江・美濃・飛騨・信濃・上野・武蔵(後北海道)・下野・陸奥・出羽の九つの国からなると同時に、都を起点に全国に向けて造られた七つの官道のひとつでもある。上野国内での東山道駅路は、現在の確氷峠のあたりから安中を抜け、国府推定地である前橋市元総社町付近まで直線的に進む「国府ルート」が推定されているが、東部では東西に直線的にのびる古代道路が2本、発掘調査によって

見つかっている。そのうち南側のものは、高崎市南部から玉村町、旧境町、旧新田町南部にかけて検出されている「牛堀・矢ノ原ルート」と呼ばれている。北関東自動車関連の道路遺構は、規模や位置からこの「牛堀・矢ノ原ルート」になる可能性が高い。この道路は東山道駅路であると推定され、さらに大道西〔8〕や大道東遺跡〔9〕では竪穴住居との重複関係から6世紀より後出で、8世紀中葉以前には廃絶していることが調査の結果明らかとなっている。

すでに記したが、当遺跡の所在する金山丘陵東部一帯は山田郡に属すと考えられる。太田市緑町の古水地区には、「堂上」「堂下」「石倉」などの小字名が遺っており、郡家施設との関連が想定されているが、今のところ郡家に関わる遺構は全く検出されていない。しかし、八ヶ入〔7〕・栗前〔11〕・鹿島裏〔12〕・向矢部〔10〕・矢部〔4〕等の遺跡から、三彩陶器片・軒丸瓦片・円面硯・獣脚円面硯・漆紙文書など、近隣に官衙的施設の存在を思わせる遺物が出土している。

古水条里制水田跡〔5〕の調査により、天仁元(1108)年に降下した浅間B軽石層下の水田面が検出されている。水田区画は条里制地割に合致しており、奈良時代後半から平安時代前半に開田されたものと考えられている。この時代の集落が前代よりも分布範囲を拡大しているのは、それまでの自然湧水を利用した農耕が主であった前代から、新たに用水系を整備することにより、耕地の拡大、微高地への進出が可能になったためと考えられる。

(6) 中世～近世

当遺跡からは水田と畠、土坑と溝が検出されている。12世紀、上野国の平野部には天仁元(1108)年の浅間山の噴火による降灰によって壊滅した耕地を復興する過程で、各地で荘園や御厨が成立していった。久寿元(1154)年頃には新田郡南西部に新田荘が成立する。同じ頃、太田市域東部には園田御厨、大倉保、寮米保が分布していたとされる。その中で園田御厨は園田郷を中心として成立したとされている、伊勢神宮の所領で1156(久寿3)年に成立、200余丁の広さを有するとされていた。只上周辺もこの中に含まれていたと考えられる。その厨務を執る御厨司に在地領主の園田氏がいた。園田氏は鎌倉時代には御家人となるが、室町時代になると衰退し、その

領域は岩松氏、横瀬氏の支配下に入ったと考えられている。

中世の城郭としては、金山丘陵上にある山城、金山城〔100〕がある。応永3(1469)年岩松家純によって築城された。以後、享禄元(1528)年には岩松氏の重臣横瀬氏へ、さらに天正12(1584)年には後北条氏へと城主が変わっているが、東毛地区の中心的な城として重要な役割を果たした。しかし天正18(1590)年豊臣秀吉の小田原城攻略により後北条氏は滅亡、金山は廃城となった。

金山城域は広大で、山頂部に実城を置き、山頂から延びる西尾根に西城を、北に延びる観音山に北城を持ち、南の中八王子山には八王子山ノ背を構える。山頂部の実城域に日ノ池・月ノ池の大池を持ち、石垣・石敷き通路・石組み排水路・石組み井戸など山城としては珍しい施設を有している。昭和9(1934)年に国史跡に指定される。

矢田堀集落の中に矢田堀館跡〔41〕、独立丘陵丸山には丸山の背〔32〕、当遺跡の北西約500mの矢場川左岸には只上の背〔21〕がある。いずれも金山城と関連している。

第1表 周辺遺跡一覧表（本表は（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団「新島遺跡」2011.の第1表をもとに加除等している）

番号	遺跡名	旧石器	集落・遺跡										備考	文献		
			集落・遺跡		墳墓		弥生		古墳		中世					
			早	中	後	中	後	前	中	後	奈良	平安			近世	
1	只上深町遺跡														■平安集落・島	
2	新島遺跡														○当該遺跡 奈良平安集落 古墳後期～平安島	45
3	道原遺跡														○縄文中期集落 古墳前期方形周溝墓 古墳平安時代道路	43・44
4	矢部遺跡	△													○縄文中～後期土坑 奈良平安集落 漆紙文書出土	28・29・37・41・43・44・45
5	古米条半制水田跡														■As-8下水田	1・49
6	二の宮遺跡														○縄文前期集落 奈良平安集落	49
7	八ヶ人遺跡	△													○古墳中期・奈良平安集落 東山道駅跡	53
8	大道西遺跡														○東山道駅跡 馬形墳輪出土	23・50
9	大道東遺跡														○縄文中期～後期集落 古墳後期～平安集落 東山道駅跡	1・51
10	向矢部遺跡														○古墳後期～平安集落	32・33・34・35・46
11	築前遺跡														○縄文中期～後期集落 古墳後期～平安集落	
12	鹿島前遺跡														○奈良平安集落 東山道駅跡	52
13	東今泉鹿島遺跡		△	○											○縄文前期土坑 古墳前期土～平安集落 漆紙文書出土	47
14	矢部城跡														○16世紀 堀 土層 礎	4
15	国濟寺城跡(道原城跡)														○16世紀 堀 土層	4
16	市場古墳群														●後期群集墳	1
17	八幡林遺跡														△古墳遺物散布	19
18	市場城跡														○二重堀 土層 16世紀	4
19	市場稲荷山古墳														●後期円墳 径32m 6世紀前半	1
20	築家遺跡														●後期古墳群 奈良平安集落	1・38・40
21	只上の穴跡														○16世紀 堀	4
22	七日市古墳群														●古墳後期	19
23	丸山古墳群														●6世紀末～7世紀前半方後円墳1基 円墳8基	1
24	流作場遺跡														○古墳中後期集落 船輪船	1・22
25	吉祥寺遺跡														●時期不明ビット群	22
26	諏訪古墳														●後期円墳	19
27	反丸遺跡														●古墳後期集落 古墳 祭祀遺構	1・22・49
28	原宿川向遺跡														△古墳遺物散布	19
29	落内遺跡														○古墳後期・奈良集落	1・25
30	宮の上遺跡														△古墳遺物散布	25
31	丸山北遺跡														○古墳前期集落	24
32	丸山の穴跡														○16世紀 櫓部 烽火台	4
33	丸山遺跡														△弥生・古墳遺物散布	19
34	丸山腰谷遺跡														●須恵窯1基	36
35	小丸山遺跡														△縄文～平安遺物散布 瓦塔出土	1
36	寺中遺跡														●平安鍛冶遺構	1
37	寺前遺跡														○古墳集落	16
38	上宿遺跡														○古墳・平安集落	38
39	東田遺跡														○平安集落	27
40	矢田堀前田遺跡														●時期不明土坑等	25
41	矢田堀前跡														○16世紀 堀 土層 戸口	4
42	矢田堀古墳群														●終末期群集墳	19
43	巖穴山古墳														●1辺30m方墳 複式構造横穴式石室 7世紀中葉	1・21
44	菅ノ沢日遺跡														○灰原 須恵器出土	21
45	菅ノ沢御嶽古墳														●直径30m円墳 横穴式石室	1
46	今泉口八幡山古墳														●前方後円墳 横穴式石室 家形石棺 6世紀末～7世紀初	1・16
47	菅ノ沢古墳群														●円墳5基 7世紀	1・21
48	八ヶ人穴跡														△灰原 須恵器・鉄滓出土	19
49	諏訪ヶ人遺跡														△灰原 須恵器出土	19
50	菅ノ沢1遺跡														●須恵窯 灰原 製鉄炉 古墳	1・3・6・21
51	菅ノ沢田遺跡														●生産遺跡	19
52	川西遺跡														●須恵器	19
53	八幡I遺跡														●須恵窯4基 灰原	20
54	八幡IV遺跡														●窯 灰原	20
55	八幡II遺跡														●窯2基 灰原	20
56	八幡V遺跡														●窯 灰原 円墳1基	20
57	八幡III遺跡														●窯1基 灰原	20
58	押ヶ入日遺跡														△灰原 須恵器出土	19
59	辻小屋遺跡														●須恵窯4基	1

第3章 遺跡の立地と周辺の遺跡

番号	遺跡名	集落・溝等												墳墓			遺物のみ			備考	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世					
60	辻小屋京跡群												◆					須恵窯4基	20		
61	狸ヶ入1遺跡												◆					窯1基	19		
62	狸ヶ入跡跡														○		堀 土居 戸口	4			
63	今泉城跡														○		16世紀 堀 土居	4			
64	人宿2遺跡																灰原	20			
65	人宿1遺跡																灰原	20			
66	人宿田遺跡																灰原 須恵器出土	20			
67	母衣埴輪窯跡												◆					埴輪窯	1		
68	金井口埴輪窯跡												◆					埴輪窯3基以上	1		
69	柳天沢遺跡												●					円墳 横穴式石室 中世墓	5		
70	丸屋敷の砦														○						
71	金井口古墳群												●						19		
72	東金井城跡														○		15・16世紀 堀 土居 戸口 櫓郭	4			
73	亀山古墳群												●					後末期群集墳	1		
74	亀山京塚古墳												●					後期円墳 陶棺 6世紀中	1		
75	亀山京跡												◆					須恵窯2基 灰原	1		
76	金井口遺跡												◆					埴輪窯2基 製鉄窯1基	9		
77	宿裏遺跡	△	△											△	△			古墳・平安遺物散布	10・12		
78	下宿遺跡	○													○	○		縄文草創期土坑 古墳前期・平安集落 中世溝	10・13		
79	正郷遺跡																	古墳遺物散布	19		
80	富田跡跡																	16世紀 堀 土居 戸口	4		
81	堂目木遺跡																	10世紀小畿治 中世火葬墓	26		
82	宗金寺塚遺跡																	16世紀 2重の堀	4		
83	相方遺跡														△			平安遺物散布	1		
84	橋木野城跡																	16世紀 堀 土居 戸口	19		
85	駒形遺跡																	古墳前期～中期集落	1・24		
86	磯之宮遺跡																	弥生中期・古墳前期・平安集落	1・25		
87	上小林稲荷山古墳												●					中期円墳 径60m	1・25		
88	八坂神社古墳												●						19		
89	西浦遺跡																	平安集落 中世墓坑	25		
90	安良岡古墳群												●					後期群集墳	1		
91	塚木遺跡																	古墳集落	39		
92	原店遺跡																	古墳遺物散布	19		
93	堀ノ山遺跡																	円墳1基	1		
94	焼山北遺跡	△	△															旧石器～古墳遺物包蔵地 後期円墳または帆立貝式古墳	1・2		
95	内並木古墳群																	円墳3基現存	1		
96	内並木遺跡																	旧石器包蔵地 灰原 須恵器出土	1		
97	馬塚古墳群																	後期群集墳	1		
98	寺ヶ入遺跡																	円墳約30基現存	1・14		
99	富士山古墳群												●						19		
100	金山城跡																	1469年築城 石垣・石敷き通路・石組み排水路・石組み井戸等	15・17・18		
101	羅田遺跡	△	○										●					旧石器包蔵地 古墳前期方形周溝墓 縄文前期・平安集落	7・8		
102	焼山南遺跡	△	△															旧石器～平安遺物包蔵地 後期前方後円墳	1・2		
103	焼山古墳群												●					前方後円墳1基(焼山古墳) 円墳6基以上	1・2		
104	安良丘遺跡																	古墳遺物散布	19		
105	相場観音経塚																	一字一石経塚 江戸中期か	19		
106	稲荷宮遺跡																	平安集落	24		
107	矢場氏東代の墓																	五輪塔・宝篋印塔等の墓石群 永禄5年等の銘あり	19・42		
108	矢場向遺跡																	古墳前期・平安集落	1・24		
109	芋ノ森遺跡		△		△													縄文・弥生土器・土師器・須恵器散布	1		
110	駒形南遺跡																	古墳前期・後期・奈良集落	1		
111	難山遺跡		△															縄文土器散布	54		
112	山前駅遺跡																	土師器散布	54		
113	義鳥菜師庵寺																	寺院跡 中世瓦・須恵器・板碑等出土	54		
114	山下山遺跡																	土師器・中近世土器散布	54		
115	山下山郷遺跡																	中世館跡 土器現存	54		
116	春日岡古墳群																	方墳1基・円墳7基現存	54		
117	春日遺跡		○										●					縄文前期集落・古墳・古代跡透が等検出	55		
118	山王遺跡		△															縄文・古墳～平安・中近世の遺物散布	54		
119	智光寺跡																	中世寺院跡 基壇・礎石建物検出	56		
120	宿屋跡		△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	○	○	○			縄文前期土坑 弥生系土器 中世後半居館跡	57		

参考文献

- 1 太田市「太田市史 通史編 原始古代」1996
- 2 はにわの会「焼山道跡総合調査報告」1968
- 3 日本考古学会「考古学雑誌」56巻3号1970
- 4 群馬県教育委員会「群馬県の中世城跡誌」1989
- 5 太田市教育委員会「聖天沢道跡調査報告書」1972
- 6 駒澤大学考古学研究会「首ノ沢道跡、巖六山古墳調査概報」1978
- 7 太田市教育委員会「細田道跡発掘調査概報」1978
- 8 太田市教育委員会「堀田道跡発掘調査概報Ⅱ」1979
- 9 太田市教育委員会「金井口道跡発掘調査略報-第2次調査-」1979
- 10 太田市教育委員会「下宿道跡発掘調査概報」1985
- 11 太田市教育委員会「下宿道跡-宿黄地区-」1986
- 12 太田市教育委員会「下宿道跡E地点」1987
- 13 太田市教育委員会「下宿道跡D地点」1988
- 14 太田市教育委員会「寺ヶ入道跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ」1992
- 15 太田市教育委員会「金山城跡大手道発掘調査」1994
- 16 太田市教育委員会「今泉口八幡山古墳発掘調査報告書」199743 (B)
群馬県埋蔵文化財調査事業団「年報24」2006
- 17 太田市教育委員会「金山城跡・月ノ池」1997
- 18 太田市教育委員会「史跡金山城跡環境整備前報告書発掘調査編」2001
- 19 太田市教育委員会「太田市の道跡地区」2006
- 20 駒澤大学考古学研究会「群馬・金山丘陵道跡群Ⅰ」2007
- 21 駒澤大学考古学研究会「群馬・金山丘陵道跡群Ⅱ」2009
- 22 群馬県教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報」1983
- 23 群馬県教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報」1984
- 24 太田市教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報」1985
- 25 太田市教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報」1986
- 26 太田市教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報」1987
- 27 太田市教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報」1988
- 28 太田市教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報」1989
- 29 太田市教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報」1989
- 30 太田市教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報」1988
- 31 太田市教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報-案前道跡-」1994
- 32 太田市教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報-向矢部道跡(第Ⅱ次農政分)-」1996
- 33 太田市教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報-向矢部道跡(第Ⅱ次文化庁分)-」1996
- 34 太田市教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報-向矢部道跡(第Ⅲ次農政分)-」1997
- 35 太田市教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報-向矢部道跡(第Ⅲ次文化庁分)-」1997
- 36 太田市教育委員会「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報-丸山腰巻道跡-」2000
- 37 太田市教育委員会「市内道跡IX」1993
- 38 太田市教育委員会「市内道跡XⅢ」1997
- 39 太田市教育委員会「埋蔵文化財発掘調査年報2」1992
- 40 太田市教育委員会「埋蔵文化財発掘調査年報3」1993
- 41 太田市教育委員会「埋蔵文化財発掘調査年報4」1994
- 42 太田市H P 太田の文化財 恵林寺矢場氏墓石群
- 43 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「年報24」2006
- 44 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「年報25」2007
- 45 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「矢部道跡・新島道跡」2006
- 46 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「向矢部道跡」2007
- 47 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「東今泉殿高道跡」2007
- 48 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「案前道跡(1)」2009 「案前道跡(2)」2010
- 49 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「古水条里水田跡・二の宮道跡」2009
- 50 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「大道西道跡」2010
- 51 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「大道東道跡(1)」2009 「大道東(2)」2010 「大道東(3)」2010
- 52 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「鹿島浦道跡」2010
- 53 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「八ヶ入道跡Ⅰ」2010 「八ヶ入道跡Ⅱ」2010
- 54 足利市教育委員会「足利市道跡地区」1988
- 55 足利市教育委員会「春日道跡第1次発掘調査報告書」1977
- 56 足利市教育委員会「智光寺跡第2次発掘調査報告書」2000
- 57 足利市教育委員会「宿屋館跡発掘調査報告書」2001

第4章 発掘調査の記録

第1節 遺跡の概要

1 遺構の概要

本遺跡は矢場川に近接しており、洪水砂を起源とする砂質土が厚く堆積する。このため、平面的な調査面数が多くなり、調査区ごとの対応関係が複雑となっている。調査段階では、調査過程に応じて上面から随時付番されていた。しかし、本報告では時間的な相関関係を重視して、調査面の名称を統一することとした。したがって、2区3面は、調査面がないことに留意願いたい。各調査面における遺構内容は、第2表に示したとおりである。また、調査段階との対応関係も、あわせて表中に示した。

1面は近世の洪水層を鍵層として平面的な調査を行ったもので、3-1区の一部、3-2区では水田が良好に検出された。また、2区では近世以降の土坑・溝・畠が検出された。

2面は浅間B軽石を含むIV層を埋没土に持つ遺構群であり、概ね時期は中世以降である。土坑・溝が多くを占めるが、2区では一部で畦畔が検出されている。

3面は4面に先行する溝群であり、調査段階では4・5面も含めて3面として調査されたが、報告では別の調査面として分割した。2区では検出されていない。

4面はVI層を埋没土に持つ畠であり、すべての調査区で検出されている。ただし、VI層が洪水砂を起源とする

砂質土であり、層位が完全に一致しているわけではない。また、各調査区ともに2～3時期にわたる畠が重複してほぼ同一面で確認され、更に位置関係により細分される。2区は2時期で1・2号畠とした。3-1区は3時期で1～3号畠がある。3-2区は調査区が東西に分かれるが、西側では1-1・1-2、2号畠が重複して3時期にわたり、更に2号畠は走向方位により2-1～5号畠に分かれる。東側の調査区では3・4号畠が離れて存在し、これらと5・6号畠が重複して3時期となる。5・6号畠は畠間の走向方位の違いなどにより、それぞれ2つに細分される。

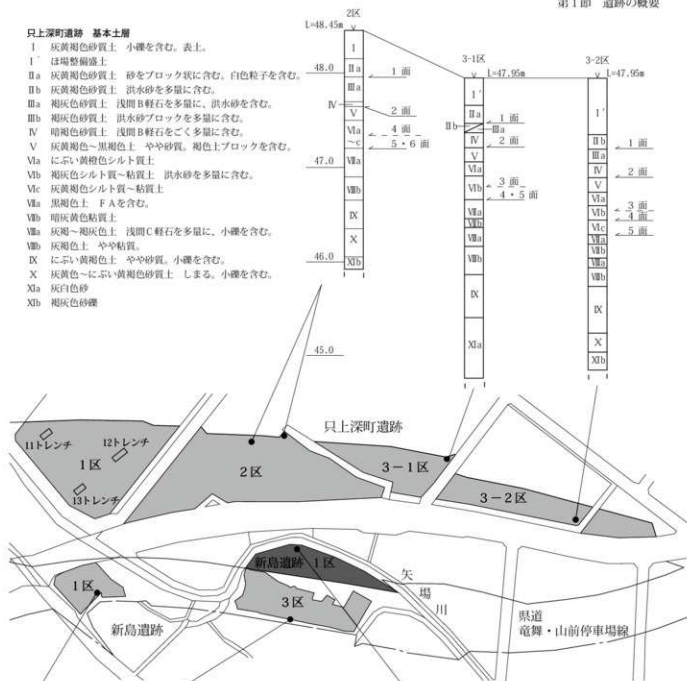
5面は集落面であり、3-1・3-2区は最終面にあたる。2区では竪穴住居2軒、大型の掘立柱建物1棟を含むピット群ほかがある。3-1区では竪穴住居1軒と土坑2基が検出されている。3-2区は西端でピット群が検出されるが、それより東方は主に生産域となり、畠や溝が発見されている。

6面は2区のみで確認される。1～4号畠はそれぞれに重複し4時期にわたっている。

縄文時代および弥生時代と判明した遺構はない。調査段階では、3-1・3-2区の5面で検出された土坑が同時代と想定されるが、出土遺物では追認できなかった。なお、VI層の包含層調査において、縄文時代中期・後期、弥生時代中期中葉の土器・石器が出土しており、遺構外遺物として掲載する。

第2表 調査面別遺構一覧表

調査区	2区					3-1区					3-2区				
	1面	2面	4面	5面	6面	1面	2面	3面	4面	5面	1面	2面	3面	4面	5面
掲載名	1・2面					1面		3面	4面	5面	1面	2面	3面	4面	5面
調査時				5面(1)	5面(2)			3面	3面		1面	2面	3面	3面	4面
竪穴住居				○						○					
掘立柱建物				○											
ピット				○											○
土坑	○	○		○				○		○	○	○			○
溝	○			○		○	○	○				○	○		○
畠	○		○		○				○					○	○
水田											○				
畦畔						○									
旧河道		○	○												



1区基本土層 新島遺跡(県道分) 3区基本土層

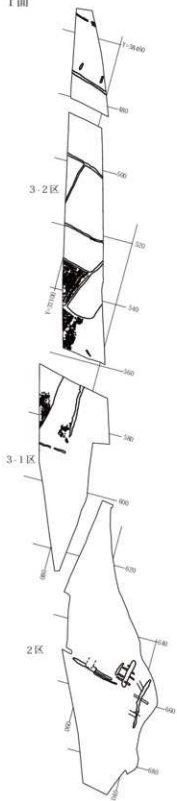
層	厚	新島遺跡(県道分) 3区北壁
Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ 灰褐色砂質土(現堀耕作土)
Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ 灰褐色砂質土(上地改良客土)
Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ 灰白色砂質土
Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ As-B粒含む灰白色砂質土(下方層境は第1面)
Ⅴ	Ⅴ	Ⅴ 暗灰白色砂質土
Ⅵ	Ⅵ	Ⅵ 灰黄褐色砂質土
Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ 暗灰褐色粘質土 径1~5mmのAs-C粒・Hr-FAに伴う軽石を少量含む(下方層境は第2面)
Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ 黒褐色土 径1~5mmのAs-C粒・Hr-FAに伴う軽石含む
Ⅷb	Ⅷb	Ⅷb 黒褐色土
Ⅷc	Ⅷc	Ⅷc 淡黒褐色土(淡色黒ボク土。下方層境は第3面)
Ⅷd	Ⅷd	Ⅷd 灰黄褐色土
Ⅷe	Ⅷe	Ⅷe 明灰黄褐色砂質土
Ⅷf	Ⅷf	Ⅷf 灰褐色洪水砂 多量の雲母を含む。
Ⅷg	Ⅷg	Ⅷg 黄褐色砂質土
Ⅷh	Ⅷh	Ⅷh 礫層(扇状地礫層)

新島遺跡(国交省分) 1区基本土層

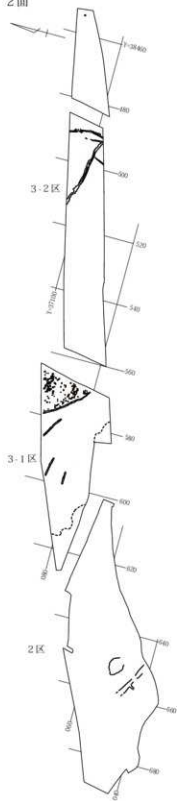
層	厚	新島遺跡(国交省分) 1区
Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ 表土
Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト層
Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ 灰黄(2.5Y6/3)シルト層
Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ 灰黄(2.5Y6/2)シルト層 畚掘耕作土
Ⅴ	Ⅴ	Ⅴ 暗灰(10YR3/1)粘質土、FA少量混
Ⅵ	Ⅵ	Ⅵ 暗灰(10YR4/1)粘質土、FA少量混
Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ 暗灰(10YR5/1)ローム質土
Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ 浅黄(5Y7/3)ローム質土、縄文包含層
Ⅷa	Ⅷa	Ⅷa 黄灰(2.5Y4/1)
Ⅷb	Ⅷb	Ⅷb 暗灰(10YR5/1)

第8図 遺跡の基本土層

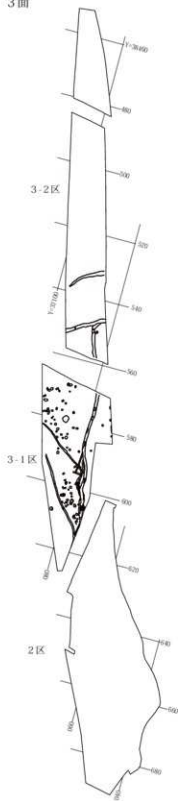
1面



2面

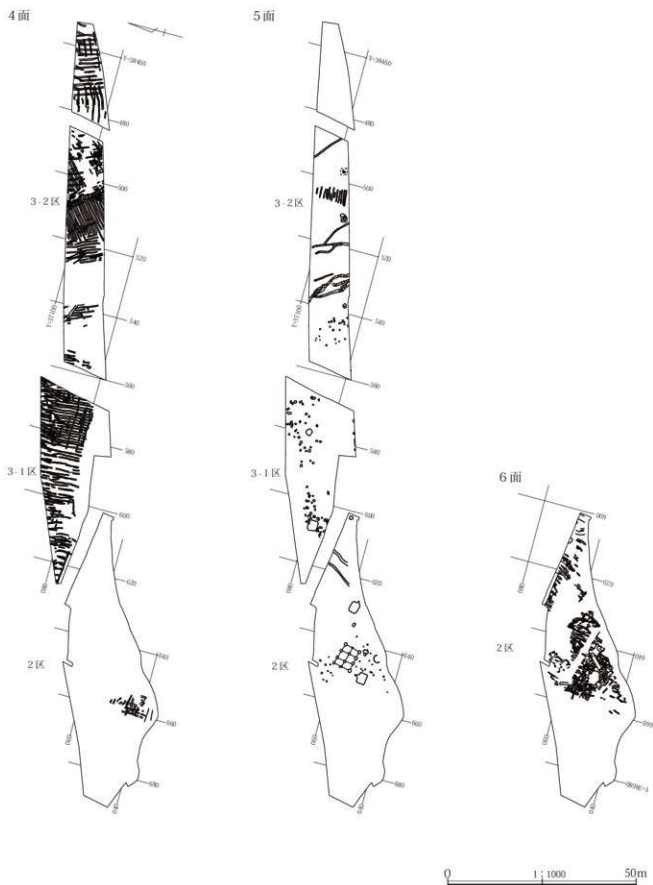


3面



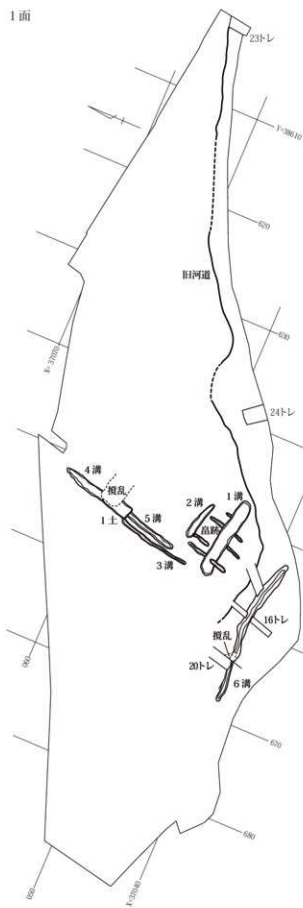
0 1:1000 50m

第9図 全体図(1~3面)

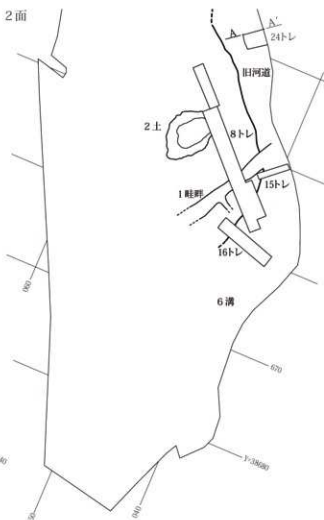


第10図 全体図 (4~6面)

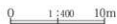
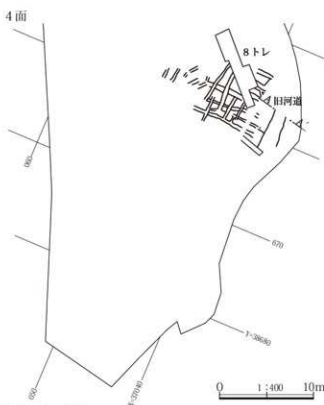
1面



2面

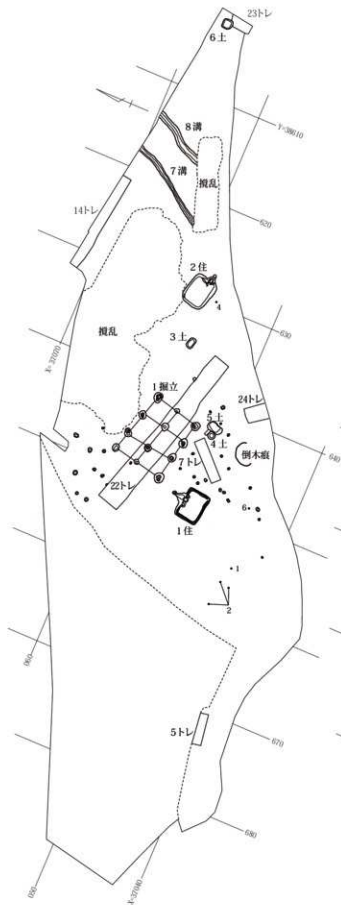


4面

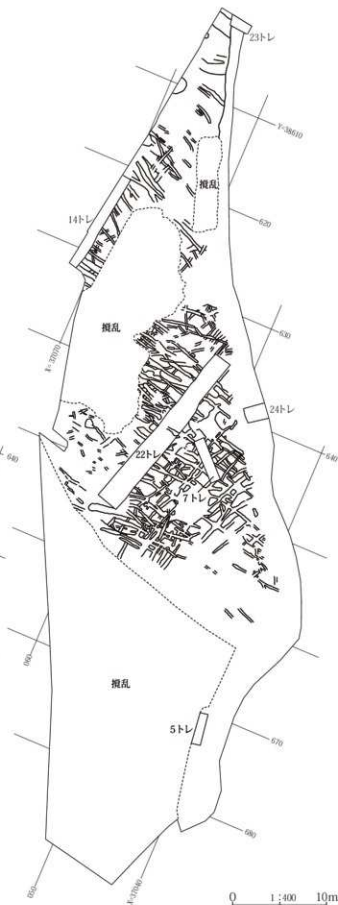


第11図 2区全体図 (1・2・4面)

5面

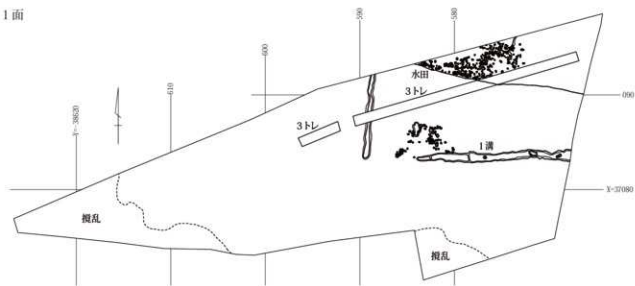


6面

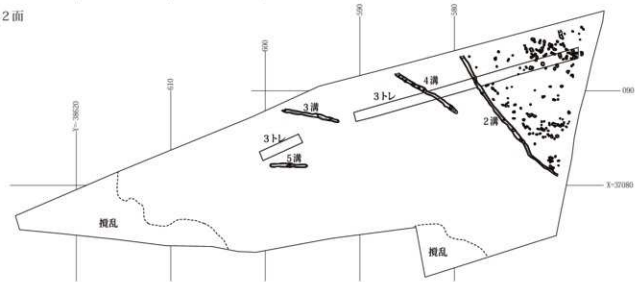


第12図 2区全体図(5・6面)

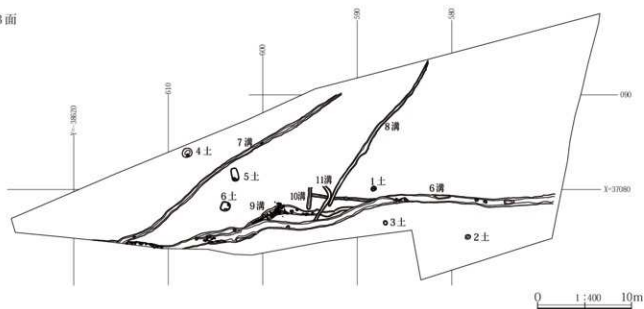
1面



2面

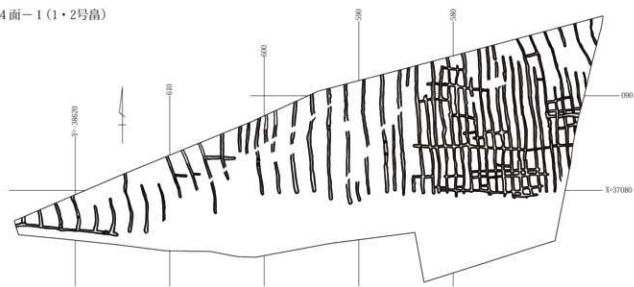


3面

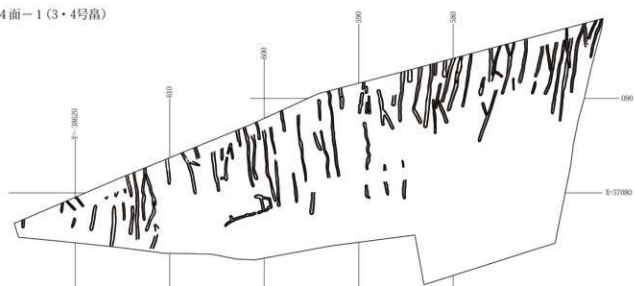


第13図 3-1区全体図(1~3面)

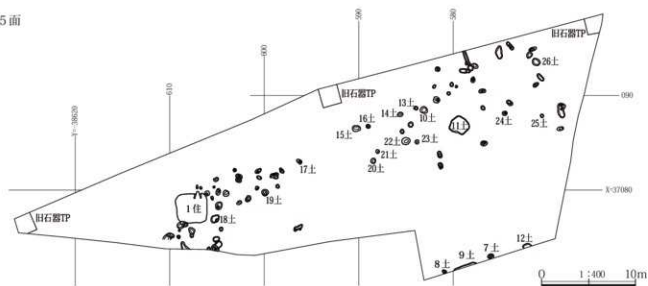
4面-1 (1・2号冢)



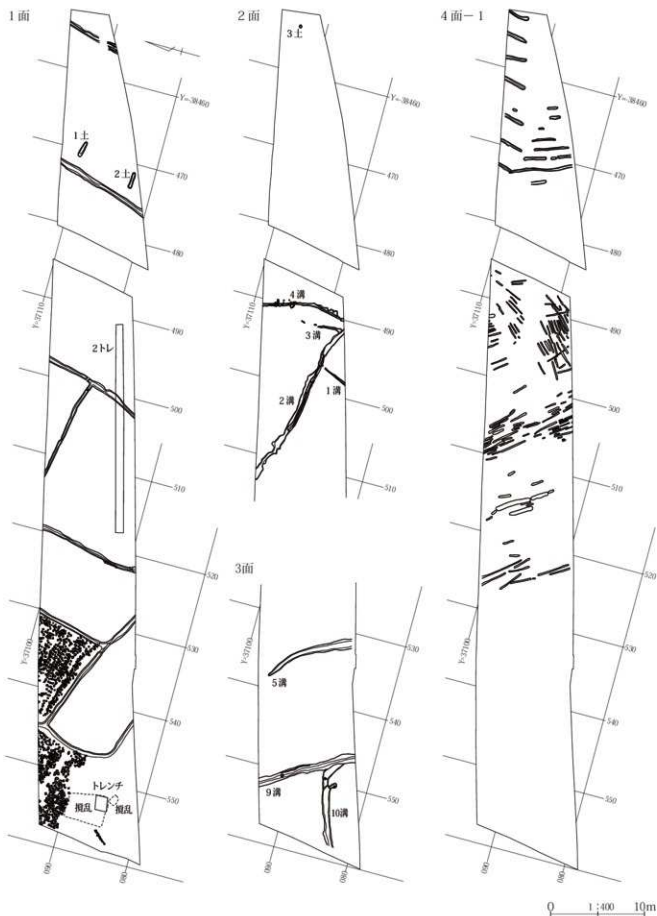
4面-1 (3・4号冢)



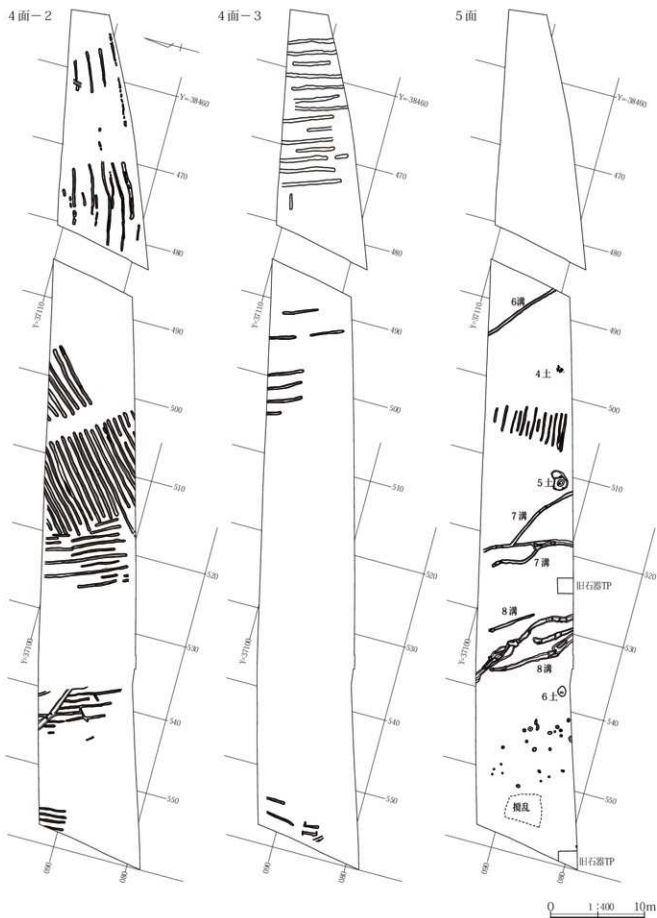
5面



第14図 3-1区全体図 (4・5面)



第15図 3-2区全体図(1~4面)



第16図 3-2区全体図(4・5面)

2 基本土層

第8図に示したとおり、本遺跡の南には、矢場川を挟んで、新島遺跡(国交省分)1区と新島遺跡(県道分)があり、それぞれに遺構の様相も含めて、基本土層に若干の違いが生じている。以下、本遺跡の基本土層の説明とあわせて、補足的に触れることとする。

本遺跡 各調査区ともに、ほ場整備による造成盛土があり現地地形を留めていないが、2区は3-1・3-2区よりも50cm程標高値が高い。表土下のII層は、洪水砂を含んでおり、特に洪水砂の多いII b層は、3-1・3-2区に見られ、下面で水田や畦畔が1面として検出されている。検出面は疑似畦畔の可能性が高い。

As-Bの純堆積層は確認できず、IV層が最も混入が多い鍵層となっている。2面は埋没土としてIV層土を主体とする遺構の調査である。ただし、2区では狭い範囲で畦畔も検出されており、疑似畦畔の可能性が高い。なお、IV層は調査時のII層に相当する。

3面は3-1・3-2区において、7・9号溝が4面を壊してV層土中から掘り込まれていることが、調査区壁の観察より判明した。ただし、調査段階では便宜上同一の4面として調査されている。また、V層は調査時のIII層に相当する。(調査時の基本土層は、小文字を使用する)。

VI層は洪水を起源とする砂が多く混入し、数度の洪水による被災を想定できる。中でもVI b層としたものは、洪水砂を多く含み、3-2区では4面晶の畝間を被覆している。ただし、VI層全体が洪水起源の土層であるため、VI b層としたものが各調査区により、時期を異にする可能性が十分にある。また、2区の基本土層ではVI層の細分ができなかったが、畝は土層中位に位置しており、5面との相対的な関係から4面とみなされる。一方、3-1区ではVI c層がなく、4面と5面が同一面で遺構確認されている。なお、VI層の一部は調査時のIII層FA混土に相当する。

VII a層は安定した黒褐色土であり、全調査区で堆積する。FAは小ブロック化して混入する程度である。上位VI層との層境は明瞭で、攪拌されたサクがVII a上面で確認でき、畝として調査できる。また、VI b・c層中で5面の集落遺構も形成されており、VII a上面で遺構の重複

が激しくなっている。2区では6面として集落遺構よりも古い段階の畝が発見され、VI c層を遺構覆土としている。また、3-2区5面でも、土坑・ピット・溝と同一面で畝が確認されており、あるいは6面と同時期である可能性も残る。VII層は縄文土器・石器、弥生土器の包含層でもあるが、古墳時代以降の遺物も含まれている。なお、VII層は調査時のIV層に相当する。

VII a層は浅間C軽石を多く含むが、遺構は発見されていない。IX層はやや砂質であるがローム相当層であり、旧石器試掘調査を行っている。VIII層は調査時のv A・B層、IX層は調査時のv D層、X層は調査時のv E層に相当する。XI層以下は砂礫層となり、旧渡良瀬川に起源を持つものと考えられる。

新島遺跡(国交省分) 1区は矢場川に接するため、その直接的な影響下にある。調査区の北半部は近世以降に埋没した旧河道となっており、最上層は盛土で被覆されている。南半部も水成堆積で埋没する近世の溝があり、河道の影響下にある。1面はIII層シルト下面が確認面となり、中近世面と位置づけられる。

2面はIV層シルトが畝間を埋める畝である。V層は畝の耕作土として一部確認されているが、全体としてVI層が高検出面となる。畝は古墳時代後期~平安時代に位置づけられている。VI層はFAを多く含む黒褐色土であり、本遺跡のVII a層に対応する。したがって、この2面は本遺跡の第4~6面に対応しよう。なお、1区は表土以下VI層まで矢場川の氾濫に伴うシルト層が堆積するため、浅間B軽石を含む土層が確認されていない。

3面は、IX層浅黄色ローム質土を縄文包含層として調査したもので、同時期の遺構は検出されていない。なお、礫層の正確な深度は示されていないが、XI層近くであり表土下2mには達していない。

新島遺跡(県道分) 1・2区は、V層より上位に盛土が厚く堆積しており、切り土による削平を受けている。2面とされる遺構は、層的に3区の4面に相当しよう。また、3面の層位は示されていないが、住居の時期も考慮すれば、3区の5面と対応しよう。以下、3区を中心に本遺跡と比較を行う。

1面は近現代の遺構であり、層位は不明確である。2面はV層を確認面としており、浅間B軽石を含むIV層がサクに混入する畝を検出している。なお、As-Bの純堆積

層は5号溝埋没土上位で確認されている。この2面は本遺跡の2面に相当している。

3面はV層暗灰白色砂質土の下位で検出された溝・水田・畝である。明確な洪水層ではないため、水田も疑似畦畔の可能性を残す。4面はVI層灰黄褐色砂質土下位に位置するが、畝の状況は3面に連続する。本遺跡との対応関係では、第3・4面に相当しよう。

5面はVIII層黒褐色土を確認面とする住居・畝である。VIII層はFAを含んでおり、本遺跡のVIIa層に相当する。したがって、遺構面は本遺跡の第5・6面に対応しよう。また、新島遺跡(県道分)3区では、第6・7面として、X・XI層上面で畝が確認されている。5面も含め、いずれも耕作痕跡をとらえた遺構であり、確認面を個別の文化層とするには、検討の余地があるものと考えられる。

以上、本遺跡の基本土層と、新島遺跡(国交省分)・(県道分)を比較して相関関係を見た。まとめると、矢場川を挟んで左岸にある本遺跡と、右岸にある両新島遺跡ではAs-B降下以降に相違点が認められる。右岸では、遺構の埋没土以外では浅間B軽石が見られず、洪水起源の土層で占められる。一方、左岸では浅間B軽石を含む土層が安定して堆積しており、洪水砂を多く覆土とする中世以降の水田が検出されたことも特筆される。

新島遺跡(国交省分)3区3号溝は矢場川の旧河道と考えられ、規模から渡良瀬川の旧流路の一つと位置づけられている。時期は出土遺物が少なく詳細は不明であるが、確認面や遺構の新旧から中世以降となる。このため、渡良瀬川の変流時期とあわせて、中世後半の可能性も提示されている(新井2011)。本遺跡2区が矢場川を挟んだ対岸にあり、4面で旧河道を検出しているため、比較が必要であろう。

新島遺跡(県道分)3区では埋没土上位にAs-Bが覆覆して、洪水砂で埋まる平安時代の溝(9世紀中頃下限の遺物)が検出されている。本遺跡では、こうした特徴的な遺構は見つかっていないが、地域的に重要な課題である。矢部遺跡1区では溝出土遺物の検討から、7世紀代と9世紀代の洪水が想定されている(坂口2006)。弘仁9年(818)の地震とそれに起因する洪水の認定が争点となる。本遺跡のV・VI層についても、これに関連する洪水砂の存在が問題視され、第4～6面の遺構評価にも関わっていることを付言しておく。

As-B降下以前は類似点が多い。本遺跡VIIa層黒褐色土は、新島遺跡(国交省分)VI層、新島遺跡(県道分)VIII層に相当することが判明した。遺構についても、これを確認面とする畝が、それぞれに検出されている。ただし、この黒褐色土より上位は、洪水砂を起源とする砂質土が重層的に堆積する。本遺跡のV・VI層に対応するが、他の遺跡も含めて洪水層として平面的にとらえられたものはない。

本遺跡2区・3-1区西半部では、平安時代の住居が調査され、微高地として集落域となっていた。遺跡全体としてもVIII層以下は比較的安定した堆積状況となっている。これは矢場川あるいは旧渡良瀬川の流路変遷とも関係しよう。

渡良瀬川は中部As-B降下前(2000年前)、八王子丘陵の西から東に流路を変えたという。流路変更の要因については不明だが、扇状地堆積が進み、より低い所へ流路を変えたと見られている。東長岡ではAs-B以前の台地を浸食し、縄文期中期前半より古い浸食谷が確認されている。これにより、丘陵付近を南流した流路の存在が確実となり、浸食規模からみて旧渡良瀬川の河道と考えられている。渡良瀬川は徐々に東遷するが、北関東自動車道関連の遺跡動向(現河道に近い道原遺跡には縄文期遺構がある)を見る限り、縄文期河道は新島・深町遺跡付近から現矢場川筋を想定するとしている(岩崎2009)。したがって、縄文期には本遺跡周辺に渡良瀬川の本流が流れていたこととなる。その後、本流は現流路へと移動し矢場川は支流となるが、本遺跡の土層堆積および遺構変遷に大きな影響を及ぼしていることは確実であろう。

参考文献

- 新井仁2011「総括」『新島遺跡』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 岩崎泰一2009「まとめ」『大道東遺跡(1)』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 坂口一2006「矢部遺跡1区3号溝の洪水層について」『矢部遺跡・新島遺跡』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

第2節 1面の遺構と遺物

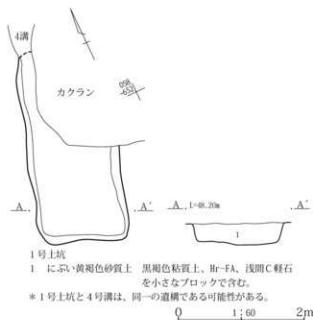
1 2区

(1) 土坑

1号土坑(第17図、PL. 2)

位置 055-650グリッド

4・5号溝と接している。推定の長さ305cm・幅141cm・深さ35cmの長方形を呈する。底面はほぼ平坦である。埋没土は砂質で軽石を含む。遺物の出土はなかった。攪乱によって1/2ほどを壊されているために4号溝との重複が不明である。4号溝の延長とも考えられる。



(2) 溝

溝は埋没土により3種に分かれる。1～3号溝は浅間B軽石を多量に含み、4・5号溝は黄褐色土と黒褐色土が混じる。6号溝は砂を主体としている。ただし、1～5号溝は走向方位が平行または直交しており、地割りなど共通するなんらかの要因に規制されている。6号溝は洪水による埋没が想定でき、旧河道の影響下にある。形態から考えても他の5条とは性格が異なる。1・2号溝は約2mの間隔で並走し、これに近接して直交方向に3～5号溝が並走する。6号溝は東方にやや離れている。

1号溝(第18図、PL. 2)

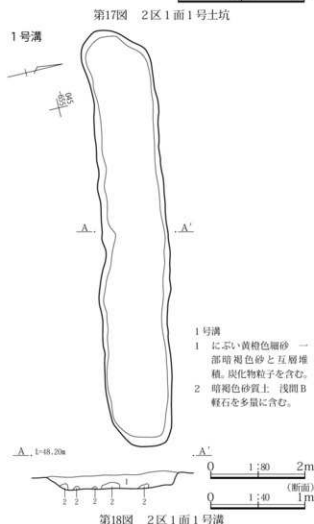
位置 040～045-645～655グリッド。平面形は直線状。走向方位はN-81°-W。断面形は皿状。底面は平坦。両端の比高差は1cmで、勾配0.1%で東方へ下向する。埋没土は砂が多く、一部に水成堆積も見られるが、上層は均質な砂質土である。埋没状況不詳。規模は長さ8.77m上端幅132～148cm深さ28cmである。遺物は出土していない。

2号溝(第19図、PL. 2)

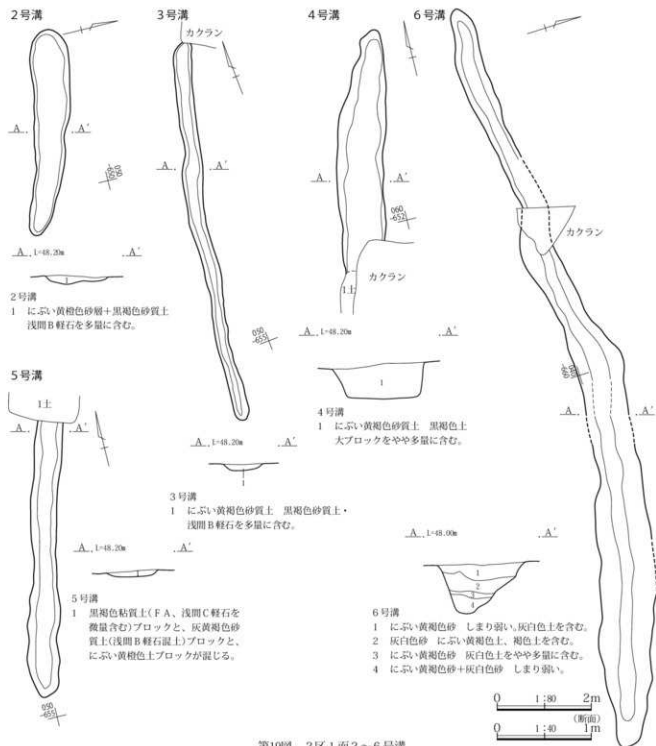
位置 045～050-645～650グリッド。平面形はわずかに弧状。走向方位はN-74°-W。断面形は皿状。底面は平坦。両端の比高差は4cmで、勾配0.9%で東方へ下向する。埋没土は均質な砂質土である。埋没状況不詳。規模は長さ4.35m上端幅49～82cm深さ17cmである。遺物は出土していない。

3号溝(第19図、PL. 2)

位置 045～055-650～655グリッド。平面形はほぼ直



線状。走向方位はN-9～16°-E。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は3cmで、勾配0.4%で北方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ8.09m上端幅25～43cm深さ14cmである。遺物は出土していない。



第19図 2区1面2～6号溝

4号溝(第19図、PL. 2)

位置 055～065-650グリッド。平面形はやや弧状。走向方位はN-17°-E。断面形は逆台形。底面は平坦。両端の比高差は11cmで、勾配2.2%で南方へ下向する。にふい黄褐色砂質土で一気に埋まる。水成堆積も見られ、洪水による埋没か。規模は長さ5.05m以上、上端幅48～100cm深75cmである。出土した須恵器小片69gは混入である。

5号溝(第19図、PL. 2)

位置 050～055-650～655グリッド。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-15°-E。断面形は皿状。底面は平坦。両端の比高差は1cmで、勾配0.2%で北方へ下向する。均質な砂質土である。埋没状況不詳。規模は長さ5.81m上端幅46～67cm深さ13cmである。須恵器小片39g、近世国産磁器2点、同焼締陶器3点、近世磁器1点が出土している。

6号溝(第19図、PL. 2)

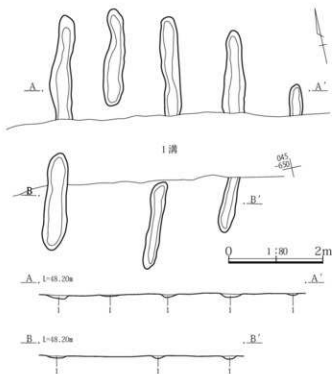
位置 035～040-650～665グリッド。平面形は中央部で折れへの字形。走向方位はN-76°-W-N-87°-E。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は17cmで、勾配1%で西方へ下向する。にぶい黄褐色～灰白色砂で埋まる。洪水により一気に埋没する。規模は長さ16.17m上端幅41～115cm深さ105cmである。出土した土師器大片40g、同小片5g、須恵器小片1gは混入である。(3)畝(第20図、PL. 2)

位置 040～050-645～655グリッド。1号溝と重複するが、新旧関係不明。5条の畝間が検出された。平面形はやや弧状。走向方位はN-9°-15°-W。畝間の最大残存長は、分断されたものの一部を復元的に認識して4.98m。畝間の断面形は潰れたU字形で、幅23～50cm深さは最大7cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は約70～118cm。遺物は出土していない。

(4)遺構外出土遺物(第21図、PL.23)

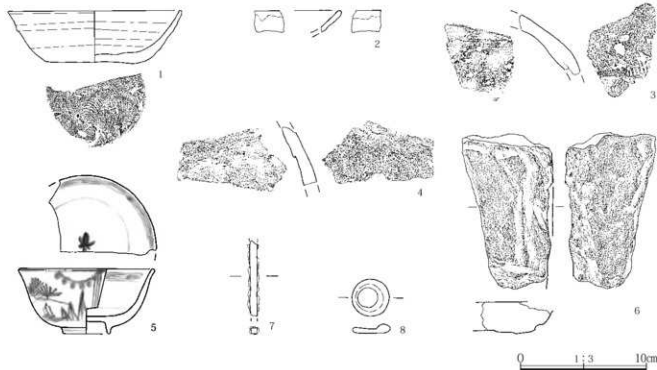
第21図・3焼締陶器以外は表土・表採・攪乱からの出土である。このうち同図1・須恵器椀は、5面と同時期の遺物である。掲載遺物のほかに土師器大片4975g、同小片289g、須恵器大片1968g、同小片1271g、灰釉陶器片5g、中世国産焼締陶器片1点、近世国産磁器片4点、

同施釉陶器片5点、同在土器片1点、近現代陶磁器片17点、時期不明1点が出土している。



1 面畝
1 にぶい褐色砂質土 浅間B軽石・黒褐色土ブロックを多量に含む。

第20図 2区1面畝



第21図 2区1面遺構外出土遺物

第3表 2区1面遺構外出土土器

No.	種別 PL.番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	第21図 PL.23	須恵器 杯	1/2	口 13.6 高 4.1 底 7.4	細砂粒/還元焼/灰白	口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	

第4表 2区1面遺構外出土陶磁器類

No.	種別 PL.番号	種類 器種	器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
2	第21図	古瀬戸陶器	緑軸小皿	表土	-	-	-	小片	灰黄		口縁部のみ灰釉。	13～15世紀。
3	第21図	常滑陶器	甕か	-	-	-	-	破片	浅黄		細部片。外面は自然釉が斑状に降る。甕か焼。	中世。
4	第21図	常滑陶器	甕か	14試掘地	-	-	-	斜部片	暗灰黄		外面に自然釉かかる。	中世。
5	第21図 PL.23	瀬戸・美濃焼	端反碗 器	表探	(10.5)	3.6	5.2	1/4		白	口縁部は外反。外面は簡略化した海浜風流。口縁部内面は簡略化した四方摩文か。底部内面は1重圈線内に不明文様。	19世紀前半～ 中頃
8	第21図	ガラス製品	おはじき?		2.9	2.9	0.7	完形	オリブ 灰		透明オリブ灰色で気泡を含む。円形の中央部を丸く窪ませる。	近現代。

第5表 2区1面遺構外出土石器

No.	種別 図版番号	種類 器種	形態・素材	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	製作・使用状況	石材
6	第21図 PL.23	石製品	板碑	表探	(12.2)	(7.1)	2.5	341.8	加工位置については不明だが、板碑片の右側縁を粗く打ち欠き整形。裏面側に斜位・製状工具痕が残る。	

第6表 2区1面遺構外出土鉄製品

No.	種別 PL.番号	種類 器種	出土位置	残存率	計測値	特徴・状態
7	第21図 PL.23	鉄器	釘	攪乱	内端部欠損 長(3.9) 幅 0.4 厚 0.3 重(2.4)	錆化が進んでいる。

2 3-1区

(1)溝

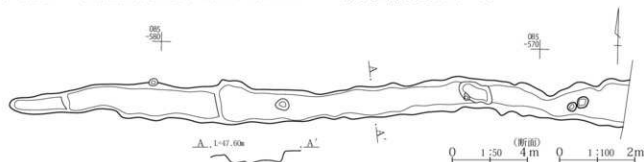
1号溝(第22図)

位置 080～085-565～580グリッド。東端は調査区域外へ延びる。平面形はやや蛇行する。走向方位はN-88°-E。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は15cmで、勾配0.9%で東方に下向する。埋没土は詳細不明。規模は長さ16.29m以上、上端幅58～69cm深さ14cmである。出土した土器器大片16g、須恵器大片8gは混入である。水田の南限に位置し、畦畔と直交方向にあることから、畦畔の脇に形成された溝である可能性もある。

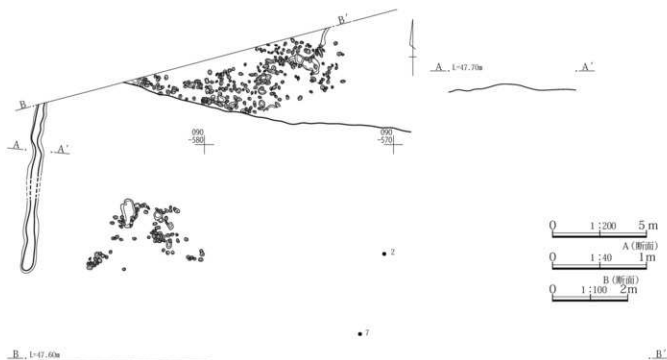
(2)水田(第23図、PL.10・23)

位置 080～090-585～590グリッド。調査区全域を面的に精査したが、調査区中央で畦畔1条とその東でやや

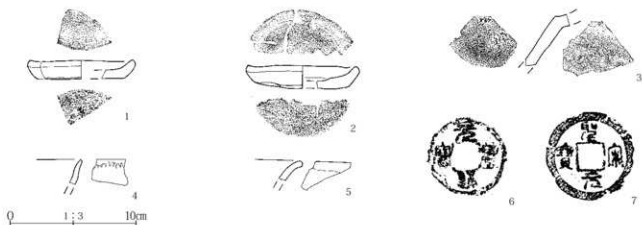
凸凹する平坦面を検出した。畦畔の走向方位はN-5°-E。規模は長さ9.02m以上、上端幅16.5～55.5cm下端幅53.5～80.5高さ6.5cmである。水田区画の規模・形状は不明。耕作土は不詳。東西幅10.7mの比高差は4cmで勾配0.4%。出土遺物では、調査区南西部分で江戸期の4・尾呂茶碗が出土し、遺構年代の参考となるが、畦畔検出部分とは離れており、直接結びつけない。一括遺物ではあるが、中世の1・カワラケや6・銅銭も同一面でも出土している。同種の遺物(2・7)が2面V層から出土しており、耕作土中の可能性も考慮して本遺構で扱った。同層からはほかに江戸期の5・皿も出土するが、やはり畦畔検出部分とは離れている。カワラケはいずれも器高の低い手づくねであり、地域色として注目される。在地系の3・内耳土器は口縁部はないが、段を持って「く」の字に強く折れており、器壁は厚い。6・銅銭は顔縁が人為的に削り込まれている。



第22図 3-1区1面1号溝



第23図 3-1区1面水田



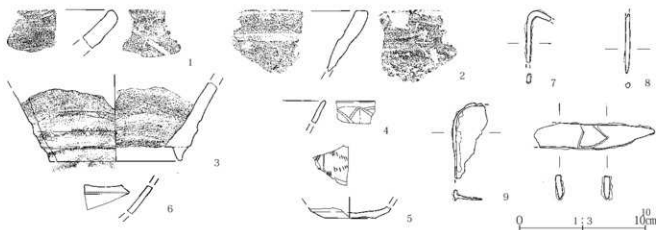
第24図 3-1区1面水田出土遺物

第7表 3-1区1面水田出土陶磁器

NO.	神田番号 PL.番号	種別	器形	出土位置	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
1	第24図 PL.23	在地系土器か	皿		8.0	7.0	1.5	1/7		にぶい紺	手づくねで口縁部のみ横撫で。器壁厚い。	中世。
2	第24図 PL.23	在地系土器か	皿	田筋	8.0	7.4	1.8	1/2		にぶい紺	手づくねで口縁部のみ横撫で。器壁厚い。	中世。
3	第24図	在地系土器	盤か		-	-	-	小片		紺	器表黒色。器壁が厚く、外面調整の特徴から盤類と推定される。	中世の可能性が高い。
4	第24図	美濃陶器	碗		-	-	-	小片		浅黄	尾呂茶碗の口縁部片。	江戸時代。
5	第24図	瀬戸・美濃陶器	皿		-	-	-	口縁部片		灰黄	口縁部は外反。内面から口縁部外面に灰釉。	17世紀か。

第8表 3-1区1面水田出土鉄製品

NO.	神田番号 PL.番号	種類	器種	出土位置	残存率	計測値				特徴・状態
6	第24図	金属製品	銭貨		ほぼ完形	径 2.4	厚 0.1	孔 0.6	重 2.3	北宋銭(聖宋元寶)。額縁を全て故意に削り落とす。



第25図 3-1区1面遺構外出土遺物

第9表 3-1区1面遺構外出土陶磁器

NO.	検出番号 PL.番号	種別	器形	出土位置	口径 (径)	底径 (幅)	器高 (厚)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
1	第25図	在地系土器	片口鉢	表土	-	-	-	小片	灰黄		口縁部小片。口縁端部丸みを持つ。	14世紀～15世紀か。
2	第25図	在地系土器	内耳焙烙か	表土	-	-	-	口縁部片	灰黄		断面は灰黄色から灰白色。口縁部は短く、内面に低い段差を持つ。外面口縁部下に型肌状の痕跡があり、焙烙の可能性が高い。	16世紀～17世紀。
3	第25図	尾張・美濃陶器	瓶類か	表土	-	(10.3)	-	1/5	灰白		高台脇に顕著な轆轤目。内面も轆轤目が認められるが、体部内面下端付近は僅かに摩滅して平滑となる。体部の立ち上がりはやや急である。	中世。
4	第25図	龍泉窯系青磁	碗	表採	-	-	-	小片	灰		外面は龍蓮弁文。横田・森田分類1-5-B類。	13世紀前半～14世紀初頭。
5	第25図 PL.23	同安窯系青磁	皿	表土	-	(4.0)	-	1/4	灰白		内面に柳状工具による筋文。底部外面は無釉。	12世紀。
6	第25図	中国白磁	碗	表採	-	-	-	体部下位片	白		体部内面に1状のへら書き横線。	11世紀～12世紀。

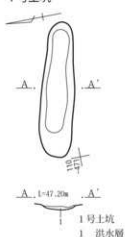
第10表 3-1区1面遺構外出土鉄製品

NO.	検出番号 PL.番号	種類	器種	出土位置	残存率	計測値				特徴・状態
7	第24図	金属製品	鉄貨	洪水層	ほぼ完形	径 2.1	厚 0.1	孔 0.6	重 2.2	北宋銭「元符通寶」
7	第24図	鉄器	不明	表土	一部片	長 (3.4)	幅 0.5	厚 0.3	重 (1.2)	錆化が進み、一部空洞化している。
8	PL.23	鉄器	針		先端部側	長 (3.2)	幅 0.2	厚 0.2	重 (0.7)	錆化が進んでいる。
9	同上	鉄製品	不明		一部片	長 (3.9)	幅 (1.8)	厚 0.6	重 (1.9)	金具の一部か、錆化が進んでいる。
10	同上	鉄器	刀子	表土	刃部端部片	長 (6.3)	幅 1.3	厚 0.3	重 (7.4)	錆化が進んでいる。

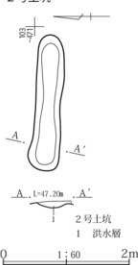
(3) 遺構外出土遺物(第25図、PL.23)

表土から出土した遺物である。在地系土器(1・2)のうち、2は口縁部が短く内側に段があり、浅いタイプの内耳土器で中世末～江戸初期であろう。3は高台がつく尾張型の片口鉢か瓶であり、13世紀代であろう。中国産青磁碗は同安窯系の5・柳描文と龍泉窯系の4・蓮弁文で、ほかに6・白磁碗がある。これらは内容から、本来1面水田出土遺物と合わせて扱われるべきものと考えられる。掲載遺物のほかに土師器大片7720g、同小片470g、須恵器大片5400g、同小片13986g、灰釉陶器片300g、近世国産磁器片4点、同施釉陶器片2点、同焼締陶器片1点、同在地土器片6点、近現代陶磁器片7点、同十能瓦4点、時期不明7点が出土している。

1号土坑



2号土坑



第26図 3-2区1面1・2号土坑

3 3-2区

(1)土坑

畦畔の東で、形状・埋没土の類似する土坑2基を検出した。同一面で確認された水田との関連も想定できるが、用途や詳細な時期などは不明である。

1号土坑(第26図、PL.15)

位置 105～110-465、110-470グリッド

2号土坑の北北東約7mの所に位置している。長さ215cm・幅42～52cm・深さ6cmの長楕円形を呈する。底面はやや平坦である。埋没土は洪水層で、遺物の出土はなかった。

2号土坑(第26図)

位置 100-470グリッド

1号土坑の南南西約7mの所に位置している。長さ216cm・幅39cm・深さ10cmの長楕円形を呈する。1号土坑と形状は似ている。埋没土は洪水層である。遺物の出土はなかった。

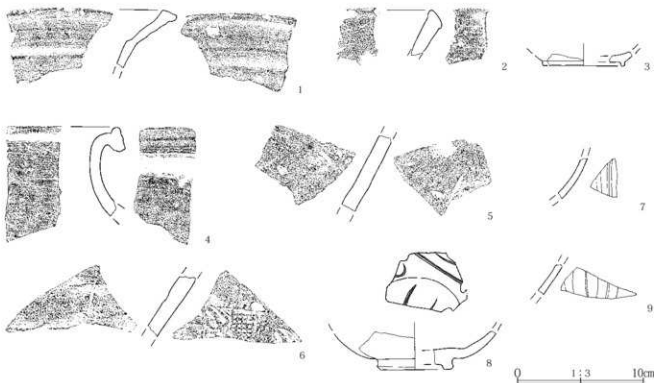
(2)水田(第28図、PL.14・15・23)

II b層(洪水層)直下で検出された。水田区画は11枚確認されたが、調査区幅が狭く、区画すべてを確認できた

ものはない。形状はややバラツキがあり、西側の方がやや細長い。詳細な規模は表3のとおり。地形は北東方向に緩やかに傾斜する。畦はやや潰れるが、明瞭である。西調査区東西端で比高差は3cmで、勾配0.1%。東調査区東西端で比高差は28cmで、勾配0.4%。6号畦畔の断面Aでは、上幅約35cm下幅約50cm高さ約7cmを計る。水口はS3・4・5の交点にあり、S5に導水される。5号畦畔南端の水口はS6に導水する。4号畦畔の東端近くの水口はS7に導水する。3号畦畔の水口は4号畦畔の水口に近く、すぐにS8に導水する。耕作土は浅間B軽石を含む黄褐色砂質土で、やや鉄分の凝集が見られる。水田面は凸凹しており、図化した以外の区画にも見られる。凸凹はおおよそ小穴の集まりで、多くは足跡と考えられ、東西方向に列を形成している。なお、東調査区の

第11表 3-2区1面水田面積計測表(m)

水田NO	長軸	短軸	面積(m ²)
S-1	(17.75)	(16.1)	(152.07)
S-2	(7.15)	(4.75)	(17.2)
S-3	(18.4)	9.25	(110.33)
S-4	12.75	(9.05)	(64.27)
S-5	(16.1)	9.65	(126.53)
S-6	19.05	(16.3)	(213.17)
S-7	(13.35)	(5.75)	(37.98)
S-8	(13.55)	(12.05)	(150.23)
S-9	(13.05)	(7.1)	(86.35)
S-10	(21.15)	(15.55)	(162.7)
S-11	(7.5)	(3.2)	(15.13)



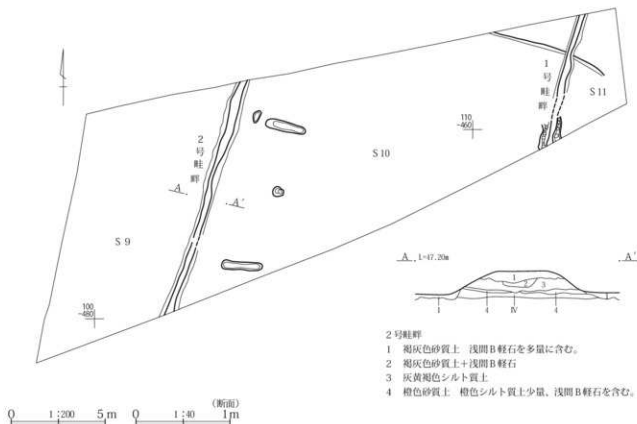
第27図 3-2区1面水田出土遺物

S9～11は検出面が耕作土下面と見られる。このため、2号畦畔の断面Aでは、上幅約55cm下幅約135cm高さ約22cmを計るが、大畦畔ではなく畦畔基部までを押さえたものと考えられる。出土遺物は水田としては多い。中世のまとまった一群であり、水田に直接関係する遺物ではないだろう。9・青磁碗は摩滅が激しくローリングを強く受けている。遺物は時期幅がある。1・在地系の内耳

土器は口唇部が外側に大きく張り出しており、16世紀でも新しい段階だろう。2・鉢は口唇部が上方へ尖り気味である。青磁碗は9・劃花文、7・8・蓮弁文で12～13世紀であり、4・常滑窯産物は口縁部の特徴から13世紀後半頃であろう。遺物の状況は、中世の屋敷遺構に伴う遺物組成であり、下に消滅した遺構があったか、周辺にその存在が想定される。

第12表 3-2区1面水田出土陶磁器

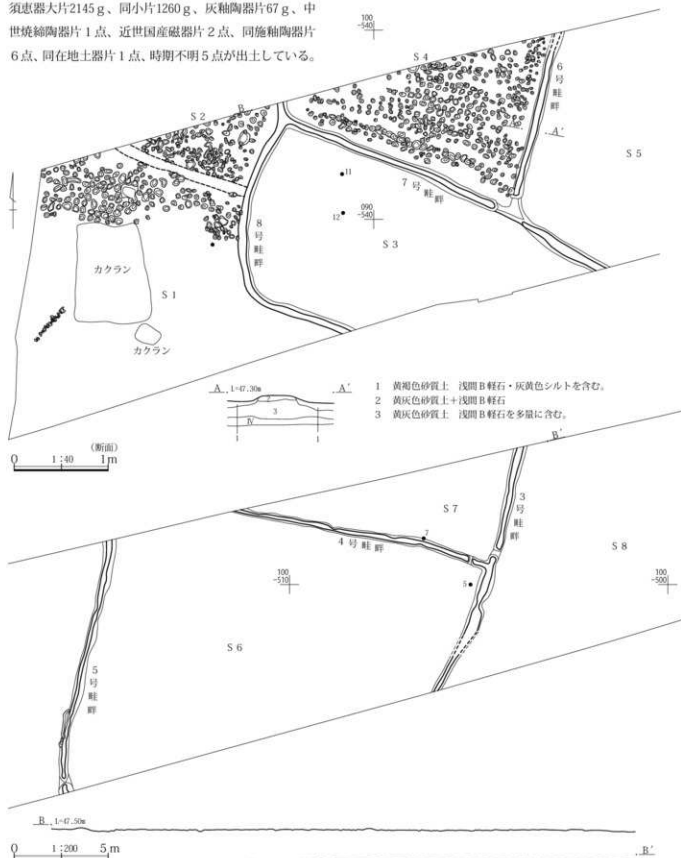
No.	検出番号 Pl.番号	種別	器形	出土位置	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
1	第27図	在地系土器	内耳鉢		-	-	-	口縁部 片	灰黄		外面器表は黒色、内面器表は暗灰色。口縁部は外反し、端部は幅広い。	16世紀後半
2	第27図	在地系土器	片口鉢		-	-	-	口縁部 片	灰		口縁部玉縁状を呈する。口縁端部上面僅かに内湾。	14世紀前半～ 中頃
3	第27図	瀬戸・美濃陶器	皿		-	(6.3)	-	1/8	灰黄		内外面灰釉。高台端部欠損部多い。	大室, 16世紀
4	第27図 Pl.23	常滑陶器	糞		-	-	-	小片	にぶい黄		口縁部「N」字状。肩部外面自然釉。	13世紀後半
5	第27図	常滑陶器	糞か		-	-	-	小片	灰黄		体部小片。	中世
6	第27図 Pl.23	常滑陶器	糞		-	-	-	小片	灰黄		内面に自然釉が斑状にかり、体部下位片であろう。外面に叩き目残る。	中世
7	第27図	龍泉窯系青磁	碗		-	-	-	小片	にぶい黄		外面に鑄蓮弁文。輪は白濁し、焼成不良。	13世紀前半～ 14世紀初頭
8	第27図 Pl.23	龍泉窯系青磁	碗		-	-	-	体部片	灰白		外面に鑄蓮弁文。横田・森田分類の碗1-5b型。	13世紀前半～ 14世紀初頭
9	第27図 Pl.23	龍泉窯系青磁	碗		-	(5.5)	-	1/6	灰白		横田・森田分類の碗1-2型。器表と割れ口は摩滅。	12世紀中～ 13世紀初頭



第28図 3-2区1面水田(1)

(3)遺構外出土遺物

掲載遺物はないが、土師器大片2505g、同小片85g、須恵器大片2145g、同小片1260g、灰釉陶器片67g、中世焼締陶器片1点、近世国産磁器片2点、同施釉陶器片6点、同在地土器片1点、時期不明5点が出土している。



第29図 3-2区1面水田(2)

第3節 2面の遺構と遺物

1 2区

(1) 土坑

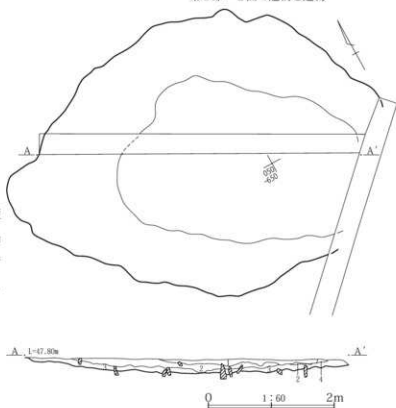
2号土坑(第30図、PL. 2)

位置 045～150-645～650グリッド

6号溝の北東に位置している。現状では長径534cm・短径435cm・深さ5～21cmの不正形を呈する。底面は凹凸がある。土坑番号を付けたが、人為的に掘られたものではなくて旧地形の窪みに洪水層がたまったものとも考えられる。浅間B軽石降下以前である。須恵器甕の破片、土師器杯の破片が出土している。

2号土坑

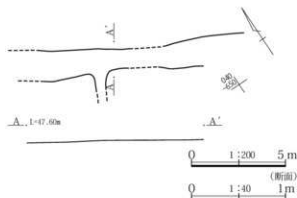
- 1 にぶい黄褐色砂質土 白色軽石を含む。ややしまる。
 - 2 にぶい黄褐色砂質土 ややしまる。灰黄褐色土を一部含む。
 - 3 灰黄褐色土 粘性あり。白色軽石、褐色土を含む。
 - 4 黒褐色土 ややしまり粘性あり。白色軽石、灰黄褐色土を含む。
- *人為的な土坑ではない。自然地形(旧地形)のなごりか。



第30図 2区2面2号土坑

(2) 畦畔(第31図・PL. 2)

位置 040～045-645～660グリッド。V層上面で確認される。疑似畦畔(凡例参照)と見られる。中央付近で分岐が認められるが、詳細は不明。走向方位はN-61°-W。太い方の規模は、残存長12.61m、幅は131～174cm、高さは最大で1cm認められる。水田に伴うと思われるが、規模形態は不明である。時期は中世以降である。



第31図 2区2面畦畔

(3) 旧河道(第11・32図)

位置 035～065-600～660グリッド。1号畦畔と重複し、調査過程では上位の層序で作図されているが、1号畦畔が疑似畦畔と見られるため、新旧関係不明。3面の畠より後出である。東西端とも調査区域外に延びる。中心部は南側調査区域外となるため、全体幅は不明。平面形は弓状で、南西端は浅く幅広く屈曲する。底面は緩やかに南方へ下り込み、壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。主体部分の走向方位はN-64°-Eで、南西端は西に折れてN-87°-Wとなる。規模は長さ56mで西に折れて、更に10m延びる。幅は1.0～7.8mで、最大深は約50cmである。3面の旧河道と不連続の河道変流・洪水作用により形成されたものであろう。近代磁器1点、十徳瓦2点が出土するが、造成土からの混入の可能性もある。



24号トレンチ

- 1 灰黄褐色砂質土 ややしまり弱い。白色粒子・炭化物粒子含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土 堅くしまる。
- 3 黒褐色土 ややしまり弱い。にぶい黄褐色土多量、白色粒子・炭土粒子微量を含む。
- 4 にぶい黄褐色土+黒褐色土 小礫含む。

第32図 24号トレンチ断面図

2 3-1区

(1)溝

当初、V層上面で凹凸面を検出したことから水田跡としての調査を実施したが、最終的に溝4条を検出した。走向方位に規則性はないが、形態的に類似する。用途や詳細な時期などは不明である。

2号溝(第33図、PL.11)

位置 080～090-565～580グリッド。南北両端は調査区域外へ延びる。平面形はやや弧状。走向方位はN-29～53°-W。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は22cmで、勾配1.3%で西方へ下向する。規模は長さ16.45m以上、上端幅17～50cm深さ14cmである。出土した須恵器小片2gは混入である。

3号溝(第33図、PL.11)

位置 085-590～595グリッド。北端は調査区域外へ延びる。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-75～80°-W。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は2cmで、勾配0.3%で西方へ下向する。規模は長さ6.08m以上、上端幅27～47cm深さ12cmである。出土した土師器大片10gは混入である。

4号溝(第33図、PL.11)

位置 085～090-575～585グリッド。北端は調査区域外へ延びる。平面形はやや弧状。走向方位はN-53～60°-W。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は1cmで、勾配0.1%で西方へ下向する。規模は長さ7.77m以上、上端幅32～49cm深さ7cmである。遺物は出土していない。

5号溝(第33図、PL.11)

位置 080-595～600グリッド。平面形は直線状。走向方位はN-89°-W。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差ほとんどない。埋没土は詳細不明。規模は長さ3.97m上端幅28～44cm深さ5cmである。遺物は出土していない。

3 3-2区

(1)土坑

3号土坑(第34図)

位置 110-455グリッド

調査区東端から検出された。長径41cm・短径35cm・深さ8cmの楕円形を呈する。自然埋没土には浅間B軽石を多

く含む。遺物の出土はなかった。機能・用途等は不明。

(2)溝

4条の溝を検出した。1面の水田区画に類似点があることから、水田に伴う痕跡である可能性もあるが、ここでは個別の溝として扱う。

1号溝(第34図、PL.16)

位置 095-495グリッド。北端は2号溝手前で立ち上がり、南端は調査区域外へ延びる。平面形は直線状。走向方位はN-23°-E。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は5cmで、勾配1.4%で南方へ下向する。規模は長さ3.52m以上、上端幅11～29cm深さ15cmである。遺物は出土していない。

2号溝(第34図、PL.16)

位置 095～105-490～510グリッド。東西両端は調査区域外へ延びる。平面形はやや蛇行する。走向方位はN-59～80°-W。断面形はU字形。底面は凸凹する。両端の比高差は10cmで、勾配0.4%で東方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ22.45m以上、上端幅35～129cm深さ18cmである。遺物は出土していない。

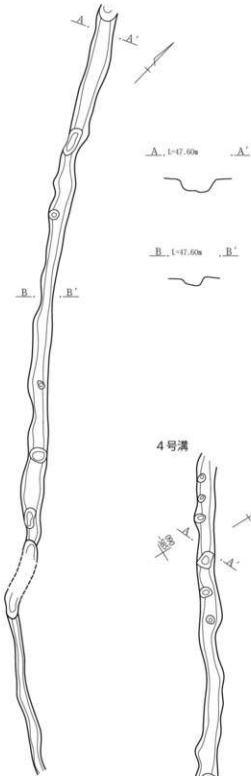
3号溝(第34図、PL.16)

位置 095～100-490グリッド。平面形はやや弧状。走向方位はN-4～14°-W。断面形は皿状。底面は丸みを持つ。両端の比高差は5cmで、勾配1.6%で南方へ下向する。規模は長さ3.13m以上、上端幅21～53cm深さ5cmである。遺物は出土していない。

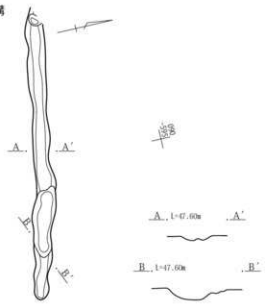
4号溝(第34図、PL.16)

位置 095～105-485～490グリッド。南北両端は調査区域外へ延びる。平面形は弧状。中程で不分明となり、小穴が見られる。おそらく底面の痕跡であろう走向方位はN-12°-E～N-15°-W。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は8cmで、勾配0.7%で南方へ下向する。規模は長さ10.73m以上、上端幅24～48cm深さ5cmである。遺物は出土していない。

2号溝



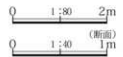
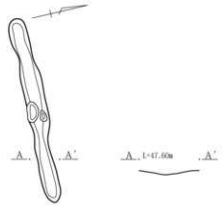
3号溝



4号溝



5号溝



第33図 3-1区2面2~5号溝

第4章 発掘調査の記録

3号土坑



3号土坑

1 灰色土 中世群土As-Bを多く含む。
ザラザラした層



1号溝

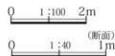


2号溝

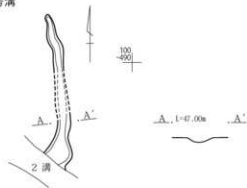


2号溝

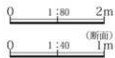
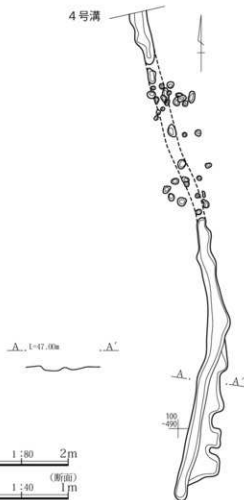
1 浅間B軽石 陶灰色シルトを多量に含む。



3号溝



4号溝



第34図 3-2区2面3号土坑、1~4号溝

第4節 3面の遺構と遺物

1 3-1区

(1) 土坑

検出された6基の土坑は、形状からピット状を呈する1～3号土坑、皿状で浅い4～6号土坑に分けられる。いずれも自然埋没である。用途などは不明である。同一面で調査された溝群とは、分布状況から関連は想定しにくい。

1号土坑(第35図)

位置 075～080-585グリッド

3号土坑の北北西約3.3mの所に位置している。長径57cm・短径46cm・深さ10～17cmの楕円形を呈する。埋没土は全体的に粘質で遺物の出土はなかった。

2号土坑(第35図)

位置 070～075-575グリッド

3号土坑の東南東約8.5mの所に位置している。長径60cm・短径57cm・深さ7～13cmの楕円形を呈する。底面は凹凸がある。遺物の出土はなかった。

1号土坑



A. 1.47.30m A'

1号土坑
1 にぶい黄色粘質土

2号土坑



A. 1.47.40m A'

4号土坑



A. 1.47.20m A'

4号土坑
1 にぶい黄色粘質土

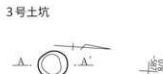
5号土坑



A. 1.47.20m A'

5号土坑
1 にぶい黄色粘質土
2 黄褐色ローム質土

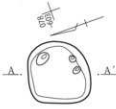
3号土坑



A. 1.47.40m A'

3号土坑
1 薄灰色粘質土

6号土坑



A. 1.47.20m A'

6号土坑
1 にぶい黄色粘質土

3号土坑(第35図)

位置 075-585グリッド

1号土坑の南南東約3.3mの所に位置している。長形48cm・短径42cm・深さ6cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦である。埋没土は粘質で遺物の出土はなかった。

4号土坑(第35図)

位置 080-605グリッド

5号土坑の北西約4.5mの所に位置している。長径107cm・短径97cm・深さ17～23cmの楕円形を呈する。埋没土はやや粘質で、遺物の出土はなかった。

5号土坑(第35図)

位置 080-600グリッド

6号土坑の北北東約2.5mの所に位置している。長さ140cm・幅70cm・深さ5cmの隅丸長方形を呈する。底面はやや凹凸がある。埋没土にはロームを含む。土師器製の小片が出土している。

6号土坑(第35図)

位置 075-600グリッド

1号住居の東1.5mの所に位置している。長形98cm・短径96cm・深さ3～10cmの不正形を呈する。底面は凹凸がある。埋没土は粘質で遺物の出土はなかった。

0 1:60 2m

第35図 3-1区3面1～6号土坑

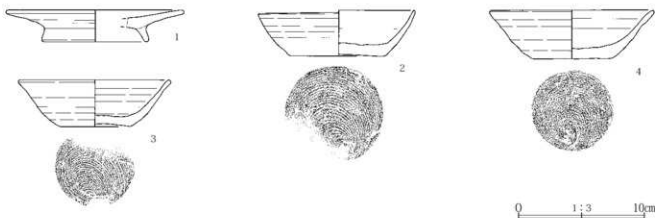
(2) 溝

検出された5条の溝は、浅く細長い7・8・10・11号溝4条と、蛇行して遺物を多く含む6・9号溝2条に分かれる。後者2条は埋没土中に砂礫・シルトが混じる点や、形態から流水の存在も考慮される。

6号溝(第36・37図、PL.12・23)

位置 070～080-565～615グリッド。9号溝と重複するが新旧関係は土層断面で観察されていない。平面的な調査手順から9号溝より後出と考えられる。東西両端は調査区域外へ延びる。東方は位置及び形態から3-2区10号溝と同一の溝と考えられる。平面形は蛇行する。走

行方向はN-71～86°-E。断面形はU字形。底面は丸みを持つが、9号溝と重複する部分は凸凹する。両端の比高差は18cmで、勾配0.4%で東方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ49.78m以上、上端幅60～159cm深さ19cmである。出土遺物は北側に並走して重複する9号溝と交差する付近が多く、遺物の内容も9号溝と近似する。1・須恵器皿、2～9・同杯、墨書のある10・同椀、11・釘状鉄器が出土する。ほかに土師器大片390g、土師器小片130g、須恵器大片1030g、須恵器小片1940g、灰釉陶器8gが出土する。出土遺物は9世紀前半～後半にかけて時期幅がある。



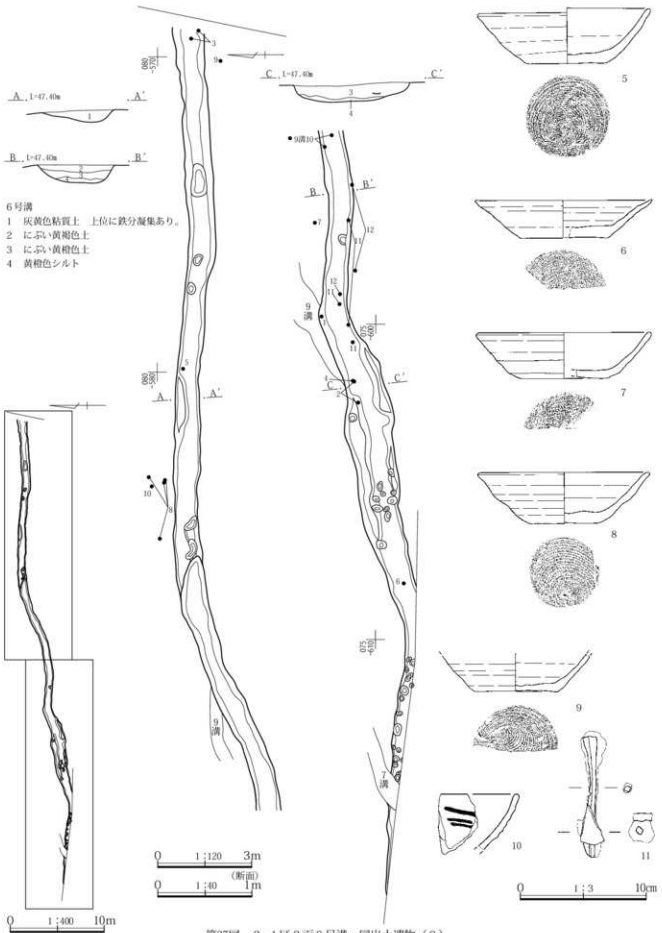
第36図 3-1区3面6号溝出土遺物(1)

第13表 3-1区3面6号溝出土土器

NO.	神岡番号 PL.番号	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第36図 PL.23	須恵器 皿	口縁部～底部 小片	口 13.8 高 2.5 底 8.0 台 8.0	細砂粒・蜀粒/酸 化釉にふい黄橙	ロク口整形、回転右回り。高台は貼付、底部の整形は不明。	
2	第36図 PL.23	須恵器 杯	2/3	口 12.1 高 3.6 底 7.4	細砂粒/還元釉/灰	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
3	第36図 PL.23	須恵器 杯	1/3	口 11.6 高 3.7 底 5.7	細砂粒/還元釉/灰	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
4	第36図 PL.23	須恵器 杯	3/5	口 12.7 高 3.8 底 6.4	細砂粒/還元釉/灰	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
5	第37図 PL.23	須恵器 杯	口縁部1/3欠 損	口 13.3 高 4.3 底 6.4	細砂粒/酸化釉/に ふい黄橙	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
6	第37図 PL.23	須恵器 杯	1/5	口 14.0 高 2.9 底 7.0	細砂粒/還元釉/灰	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
7	第37図 PL.23	須恵器 杯	1/5	口 13.5 高 3.6 底 7.0	細砂粒/還元釉/蜀 灰	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整か。	
8	第37図 PL.23	須恵器 杯	1/3	口 13.2 高 4.0 底 5.4	細砂粒・蜀粒/酸 化釉/灰黄橙	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
9	第37図 PL.23	須恵器 杯	底部-体部片	底 6.6	細砂粒/還元釉/灰	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
10	第37図 PL.23	須恵器 椀	口縁部片		細砂粒/還元釉/に ふい黄橙	ロク口整形、回転方向不明。	外面・縁部に墨書、判読不能。

第14表 3-1区3面6号溝出土鉄製品

NO.	神岡番号 PL.番号	種類	器種	出土位置	残存率	計測値	特徴・状態
11	第37図 PL.23	鉄器	不明		一部片	長(6.3) 幅 0.7 厚 0.3 重(10.4)	錆化が激しい。須恵器小片付着。



8号溝

7号溝



7号溝(第38図)

位置 070～090-590～615グリッド。南端は9号溝手前で立ち上がり、北端は調査区域外へ延びる。平面形はやや直線状。走行方位はN-47°～61°-E。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は10cmで、勾配0.3%で東方へ下向する。VI層土中から掘り込まれる。規模は長さ28.89m以上、上端幅28～63cm深さ14cmである。土師器大片40g、須恵器小片100gが出土する。

8号溝(第38図)

位置 075～090-580～590グリッド。南北端は調査区域外へ延びる。平面形はほぼ直線状。走行方位はN-34°～43°-E。断面形は皿状。底面は丸みを持つ。両端の比高差は18cmで、勾配0.9%で北方へ下向する。規模は長さ18.85m上端幅12～63cm深さ8cmである。遺物は出土していない。

9号溝(第39・40図、PL.12・23・24)

位置 070～075-590～605グリッド。6号溝と重複するが新旧関係は不明である。東西端とも6号溝と重複し

第38図 3-1区3面7・8号溝

て痕跡が不明瞭となる。平面形は蛇行し、走行方位はN-84°-W~N-82°-E。断面形は皿状で底面は凸凹する。両端の比高差はほとんどない。中央部に円礫が集中する。規模は長さ11.74m以上、上端幅36~146cm深さ13cmである。出土遺物は6号溝と交差する付近に、大量の礫に混じって出土している。1・土師器杯、2~9須恵器皿・杯・椀、11・灰軸陶器皿、12・長頸壺、13・須恵器裏が出土する。ほかに土師器大片40g、須恵器大片135g、須恵器小片230g、灰軸陶器2g、内黒土器5gが出土する。出土した遺物は礫と同様に投棄されたものと考えられ、本遺構が人為的に埋め戻され、あわせて6号溝が設けられた証左となる。なお、13・須恵器裏など大型の遺物は、後代の耕作などにより攪拌され分散し、上位でも広く出土している。出土遺物は9世紀前半~後半にかけて時期幅がある。

10号溝(第39図、PL.12)

位置 075~080-585~595グリッド。6・11号溝と重複するが新旧関係不明。東端は6号溝と重複して不明となる。西端は下位の4面3号島の畝間の一部と接して消滅する。おそらく削平されたもので、本来は西方に延びていたと推測される。下位の4面4号島とした畝間に延

長部と一致するものが2条あるが、調査段階では同一視されていない。畝間周辺で出土する礫(第46図)は9号溝に類似する。平面形はほぼ直線状。走行方位はN-80~88°-W。断面形は皿状。底面は丸みを持つ。両端の比高差は2cmで、勾配0.3%で東方へ下向する。規模は長さ6.82m以上、上端幅22~32cm深さ4cmである。

11号溝(第39図、PL.12)

位置 075~080-590~595グリッド。6・9・10号溝と重複するが新旧関係不明。南端は6号溝と重複して不明となる。平面形はへ字形。走行方位はN-37°-W~N-32°-E。断面形は皿状。底面は丸みを持つ。両端の比高差は4cmで、勾配0.9%で北方へ下向する。規模は長さ4.19m以上、上端幅26~41cm深さ6cmである。

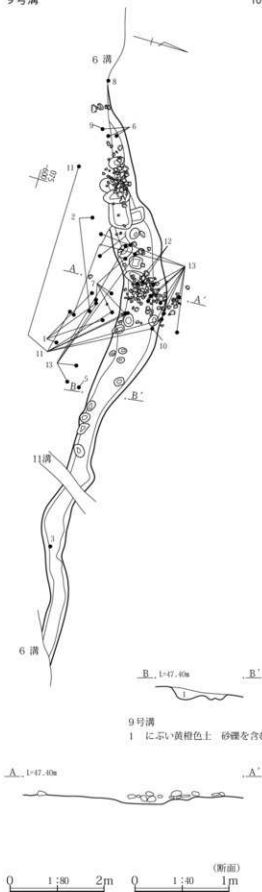
(3)遺構外出土遺物(第41図、PL.24・25)

調査段階では3面で、報告段階で3・4面とした調査面から出土した一群である。11・須恵器皿、12・同裏は大型のため、後代の耕作などにより攪拌され分散し、上位でも出土している。後者は9号溝周辺に破片が多く分布し、関係を想定させる。したがって、1~12・須恵器は内容から見ても、6・9号溝とあわせて扱うべき遺物と言える。

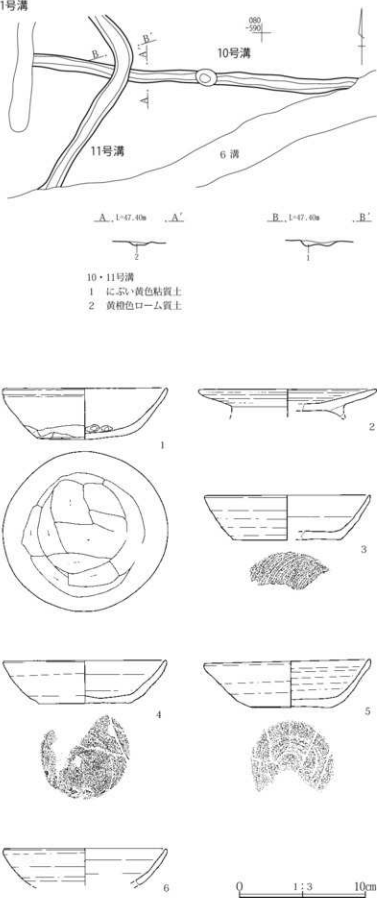
第15表 3-1区3面9号溝出土遺物

NO.	種別 PL.番号	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第39図 PL.23	土師器 杯	4/5	□13.0 高 4.0 底 7.0	細砂粒/良好/暗赤 褐色	□唇部傾ナデ。口縁部から体部中位まではナデ、下位から底部は手持ちへろ削り。	内面体部下位に小穴が2カ所。
2	第39図 PL.23	須恵器 皿	2/5	□14.0 底 8.8	細砂粒/還元焰/褐 灰	□口整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナデ。	
3	第39図	須恵器 杯	1/5	□13.0 高 3.5 底 8.4	細砂粒/還元焰/灰	□口整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
4	第39図	須恵器 杯	1/2	□12.7 高 3.4 底 7.4	細砂粒/還元焰/褐 灰	□口整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	底部は内外とも酸化焰。
5	第39図 PL.23	須恵器 杯	2/3	□13.0 高 3.8 底 6.4	細砂粒/還元焰/褐 灰	□口整形、回転右回り。底部は回転へろ削り。	
6	第40図 PL.23	須恵器 杯	口縁部片	□12.8	細砂粒・白色粒/ 還元焰/灰	□口整形、回転右回りか。	
7	第39図	須恵器 杯	4/5	□12.8 高 3.9 底 6.3	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰きみ/灰黄	□口整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
8	第40図 PL.23	須恵器 椀	底部一体部下 半片	底 8.3 台 8.3	細砂粒/還元焰/灰	□口整形、回転右回り。高台は貼付底部は回転系切り。	外面底部に墨書、「市」または「万」の異体字か。
9	第40図 PL.23	須恵器 椀	口縁部片	□14.4	細砂粒/酸化焰きみ/ にふい黄橙	□口整形、回転方向不明。	外面底部に墨書、判読不能。
10	第40図 PL.23	灰軸陶器 皿	1/3	□14.6 高 2.8 底 7.8 台 7.6	微砂粒・黒粒/還 元焰/灰白	□口整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナデ、底部は回転ナデ。内面のみな面施釉。	黒部14号須式期。
11	第40図 PL.23	灰軸陶器 長頸壺	胴部片	胴 17.6	細砂粒・黒粒/還 元焰/灰オリーブ	□口整形、回転右回り。中位から下位は回転へろ削り。	東海産
12	第40図 PL.23	灰軸陶器 長頸壺	胴部上位片	胴 25.0	微砂粒/還元焰/灰	□口整形、回転右回り。胴部は回転へろ削り。	東海産
13	第40図 PL.24	須恵器 裏	胴部片	胴 25.0	細砂粒/還元焰/灰	外面は平行明き痕が残る。内面はアテ具痕をナデ消しているが、下半に残る。	

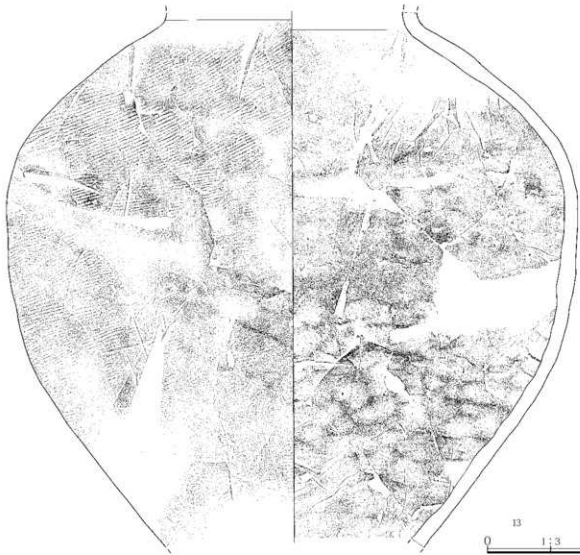
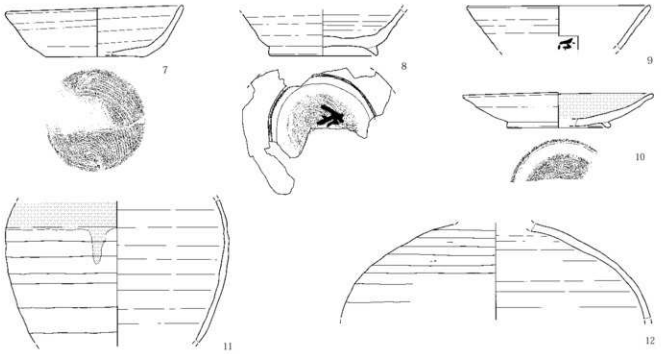
9号溝



10・11号溝

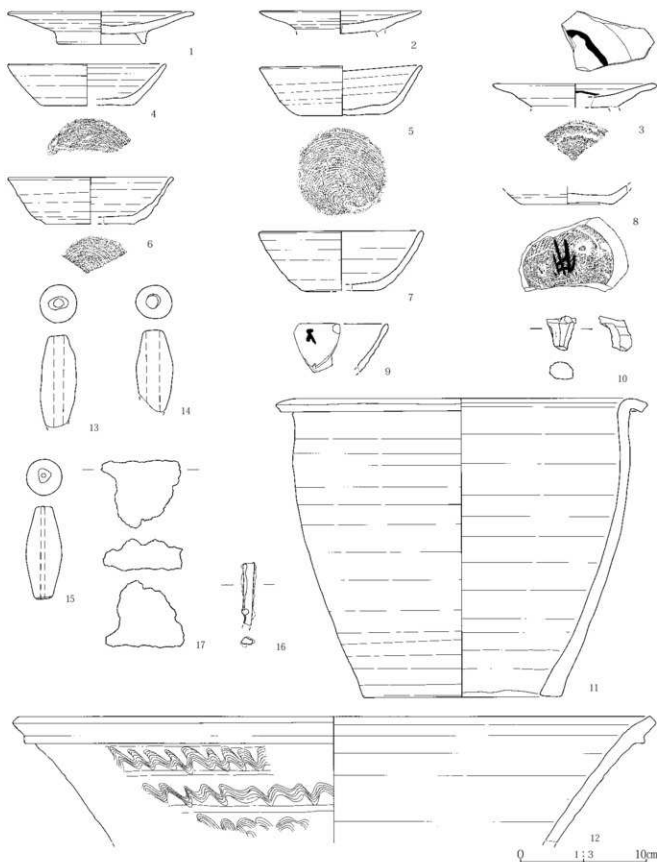


第39図 3-1区3面9号溝・同出土遺物(1)、10・11号溝



第40図 3-1区3面9号溝出土遺物(2)

第4章 発掘調査の記録



第16表 3-1区3面遺構外出土鉄製品

第41図 3-1区3面遺構外出土遺物

No.	種別 PL.番号	種類	器種	出土位置	残存率	計測値	特徴・状態
16	第41図	鉄器	不明	目層	一部片	長(3.3) 幅 0.5 厚 0.3 重(2.2)	錆化が激しい。
17	PL.24	鉄滓				長 4.2 幅 3.6 厚 1.7 重 22.7	

第17表 3-1区3面遺構外出土土器

NO.	検出番号 PL.番号	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第41区 PL.24	須恵器 皿	1/3	口 14.0 高 2.5 底 7.2 台 7.6	細砂粒/酸化塩/明 赤褐色	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナデ。	
2	第41区 PL.24	須恵器 皿	1/3(高台欠損)	口 12.2 底 7.0	細砂粒・角閃石/ 還元塩/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付が剥落、底部は 回転ナデ。	
3	第41区 PL.24	須恵器 皿	1/5	口 12.6 底 6.8	細砂粒/還元塩/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付が剥落、底部は 回転糸切り。	内面底部に墨書、 判読不能。
4	第41区 PL.24	須恵器 杯	1/4	口 12.2 高 3.2 底 7.4	細砂粒・褐粒/酸 化塩/にぶい赤褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
5	第41区 PL.24	須恵器 杯	3/4	口 12.6 高 4.0 底 7.2	細砂粒・白粒/還 元塩/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
6	第41区 PL.24	須恵器 杯	1/4	口 12.8 高 3.7 底 7.0	細砂粒/還元塩/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
7	第41区 PL.24	須恵器 椀	1/4	口 12.8 高 4.8 底 6.2	細砂粒/酸化塩/褐	ロクロ整形、回転右回り。底部はへう削り。	
8	第41区 PL.24	須恵器 杯	底部片	口 7.0	細砂粒/還元塩(内 面酸化塩)/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	外面底部に墨書、 判読不能。
9	第41区 PL.24	須恵器 椀	口縁部片		細砂粒/還元塩/に ぶい黄褐色	ロクロ整形、回転方向不明。	内面口縁部に墨書、 判読不能。
10	第41区 PL.24	土師器 香炉	獣足片		細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	獣足は添付、側面・底面は手持ちへう削り。	
11	第41区 PL.24	須恵器 甕	1/3	口 26.5 高 23.5 底 15.4	細砂粒・白粒/還 元塩/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部付近は内外ともナデ。	口縁部最大径は 29.3cm。
12	第41区 PL.24	須恵器 甕	口縁部片	口 49.6	細砂粒・粗砂粒/ 白粒/還元塩/暗灰	口縁部はロクロ整形。外面は凹線によって区画、区画 内に波状文が巡る。	
13	第41区 PL.24	土製品 土鉢	4/5(片方端 部欠損)	長(4.9) 孔 0.5 幅 1.9 重(15.7) 褐色	細砂粒/良好/暗赤 褐色	端部は平坦面をつくる。側面はナデ。	
14	第41区 PL.24	土製品 土鉢	3/4(片方端 部欠損)	長(4.3) 孔 0.7 幅 1.9 重(14.0) 褐色	細砂粒/良好/灰黄 褐色	端部は平坦面をつくらぬ。側面はナデ。	
15	第41区 PL.24	土製品 土鉢	完形	長 4.8 孔 0.3 幅 1.9 重 16.5	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	端部は平坦面をつくる。側面はナデ。	

2 3-2区

(1) 溝

調査区西端に集中して溝3条を検出した。走向方位は違うが分布状況から、1面の水田区画に類似点がある。また、微高地の縁辺にあたるため、排水などに関連した面も考慮される。

5号溝(第42区、PL.17)

位置 085～095-530～535グリッド。南端は調査区域外へ延びる。平面形はやや弧状。走向方位はN-25～54°-W。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は14cmで、勾配1.1%で南方へ下向する。埋没土は均質なシルトで洪水などによる埋没と思われる。規模は長さ12.51m以上、上端幅34～142cm深さ11cmである。

9号溝(第42区、PL.17)

位置 080～095-545～550グリッド。10号溝と重複するが新旧関係不明。南北端とも調査区域外へ延びる。平

面形は直線状。走向方位はN-30°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は8cmで、勾配0.6%で北方へ下向する。埋没土は詳細不明ながら、埋没後上位を洪水層(VI層土中)が被覆する。規模は長さ13.26m以上、上端幅83～126cm深さ44cmである。土師器大片11gが出土する。

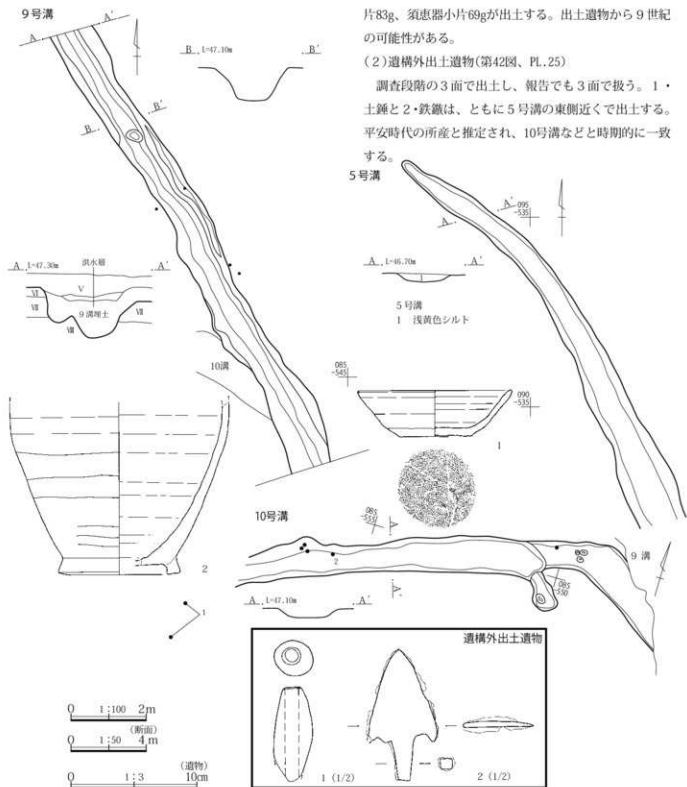
10号溝(第42区、PL.17・25)

位置 080～085-545～555グリッド。9号溝と重複するが新旧関係不明。東端は9号溝と重複して不明となり、西端は調査区域外へ延びる。位置及び形態から3-1区6号溝と同一の溝と考えられる。平面形はへんの字形。走向方位はN-73°-E～N-55°-W。断面形は皿状。底面はほぼ平坦。両端の比高差は5cmで、勾配0.4%で西方へ下向する。埋没土は詳細不明。規模は長さ11.58m以上、上端幅68～105cm深さ12cmである。須恵器杯(1)、灰軸陶器長頸壺(2)のほか、土師器大片9g、須恵器大

第18表 3-2区3面10号溝出土遺物1

NO.	検出番号 PL.番号	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第42区 PL.25	須恵器 杯	2/5	口 12.0 高 3.7 底 5.6	細砂粒/酸化塩/に ぶい黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
2	第42区 PL.25	灰軸陶器 長頸壺	底部～胴部下 半	口 9.0 底 9.6 台 7.8	細砂粒・黒粒/還 元塩/灰オリーブ	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナデ、 胴部下位は回転へう削り。	東海産

第4章 発掘調査の記録



片83g、須臾器小片69gが出土する。出土遺物から9世紀の可能性はある。

(2)遺構外出土遺物(第42図、PL.25)

調査段階の3面で出土し、報告でも3面で扱う。1・土鏝と2・鉄鏝は、ともに5号溝の東側近くで出土する。平安時代の所産と推定され、10号溝などと时期的に一致する。

第42図 3-2区3面5・9・10号溝・同出土遺物、同遺構外出土遺物

第19表 3-2区3面遺構外出土土器・鉄製品

NO.	検出番号 PL.番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第42図 PL.25	土製品 土鏝	4/5 (片方端 部欠損)	長 (5.0) 孔 0.7 幅 1.9 重 (17.2)	細砂粒/良好/不 均	端部は平坦面をつくらない。側面はナデ。	
NO.	検出番号 PL.番号	種類 器種	出土位置	計測値	特徴・状態		
2	第42図 PL.25	鉄器 鏝		刃部 長 (6.9) 幅 3.8 厚 0.6 重 (26.3)	柳葉鏝。錆化が強い。		

第5節 4面の遺構と遺物

1 2区

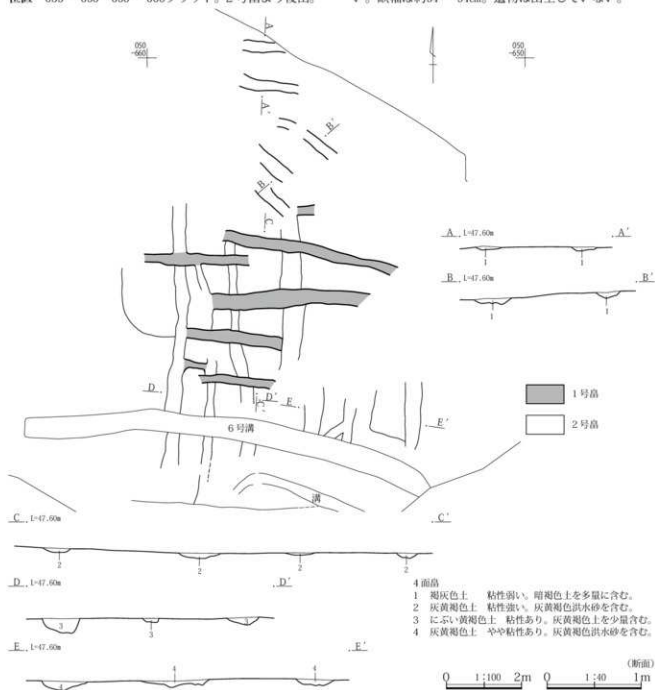
(1) 畝

調査区中央の狭い範囲であるが、畝2枚を検出した。
2基の畝は交差しており、時期が異なると考えられる。

1号畝(第43図、PL. 3)

位置 035～050-650～660グリッド。2号畝より後出。

11条の畝間を検出されたが、中央部3条は新田関係や分布状況から便宜的に同一遺構として扱う。平面形はほぼ直線状。走向方位は $N-93^{\circ}-77^{\circ}-W$ で、ほぼ東西軸を採る。中央部3条は $N-50^{\circ}-W$ 前後である。畝間の最大残存長は約4.68m。畝間の断面形はU字形で、最大幅約50cm、深さは最大約6cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は約54～94cm。遺物は出土していない。



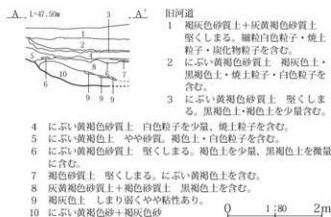
第43図 2区4面畝

2号冪(第43図、PL. 3)

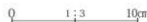
位置 040～045-650～660グリッド。1号冪より前出。8条の畝間が検出された。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-12°-W～N-9°-Eで、ほぼ南北軸を採る。畝間の最大残存長は約6.81m。畝間の断面形はU字形で、最大幅約55cm深さは最大約15cm。畝部は削平され残存しない。幅は40～124cm。遺物は出土していない。

(2)旧河道(第11・44図)

位置 035-655～660グリッド。東西端とも調査区域外へ延びる。平面形は直線状。走向方位はN-90°。断面形は南側の立ち上がりで攪乱により消滅するため不明。底面は凸凹する。洪水砂により中位まで埋まり、その後自然埋没か。規模不明。埋没後、硬化層が数度形成される。中世の在地系土器鉢1点(1)が埋没土中から出土する。ほかに土師器大片46g、須恵器小片16gが出土するが、いずれも奈良・平安時代の所産である。



第44図 2区4面旧河道断面図



第45図 2区4面旧河道出土遺物

第20表 2区4面旧河道出土遺物

No.	種別 PL.番号	種別	器形	出土位置	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
1	第45図	在地系土器	片口鉢	-	-	-	-	口縁部から体部片	明黄褐	明黄褐	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部も内湾する。端部は尖ると推定される。内面には使用による摩滅が認められる。	14世紀前半～中頃。

2 3-1区

(1)畝

4枚の畝が重複して検出された。調査面はほぼ同一のため、同一面として扱う。新旧関係は不明である。

1号冪(第47・48図、PL.12)

位置 調査区全体。2号冪とほぼ直交して重複するが新旧関係不明。分断されたものの一部を復元的に認識して、51条の畝間が検出された。中央部の畝間は直線状で、東端は弧状となり西に振れる。西端も同様に弧状で西に振れる。走向方位はN-6°-W～N-10°-E。畝間の最大残存長は16.48m。畝間の断面形はU字形で、幅は23～31cm深さは最大約19cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は東半部が狭く40cm前後で、西半部は広く130cm前後を計る。この場合、2種類の畝が東西に分かれて分布する。または、東半部に2時期の畝が重複している可能

性の二者がある。

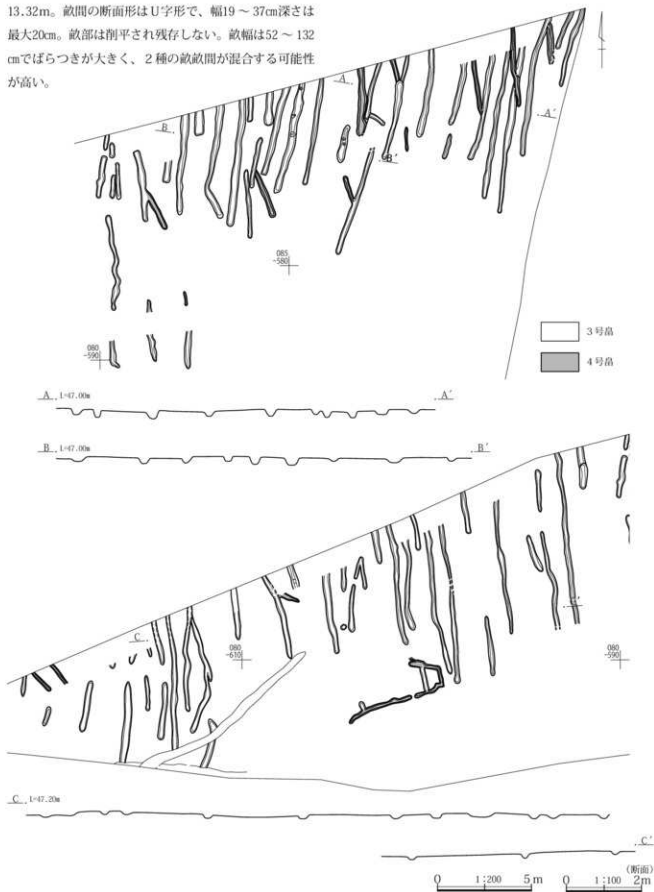
2号冪(第47・48図、PL.12)

位置 075～095-565～605グリッド。1号冪とほぼ直交して重複するが新旧関係不明。遺存状態が悪く、ぼらついた状態で14条の畝間が検出された。なお、西半部にも3条程度分布する。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-98～74°-Eで、ほぼ東西軸を採る。畝間の最大残存長は約17.0m。畝間の断面形はU字形で、最大幅約45cm深さは最大約6cm。畝部は削平され残存しない。畝幅はぼらつきが大きく、有効な数値ではないが、約40～170cmを計る。

3号冪(第46図)

位置 調査区全体。4号冪と重複するが新旧関係不明。分断されたものの一部を復元的に認識して、53条の畝間が検出された。平面形は直線状。走向方位はN-12°-W～N-19°-Eで、ほぼ南北軸を採るが、東端では東

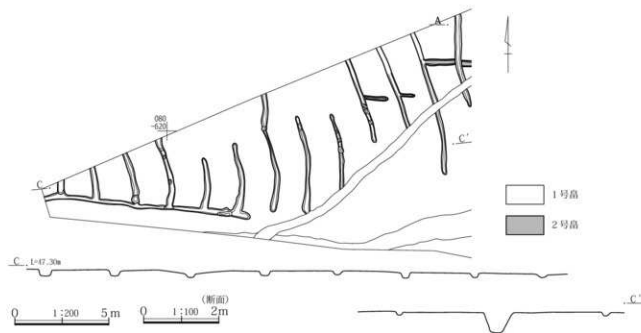
に振れ、西端では西に振れている。畝間の最大残存長は13.32m。畝間の断面形はU字形で、幅19～37cm深さは最大20cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は52～132cmでばらつきが大きく、2種の畝畝間が混合する可能性が高い。



第46図 3-1区4面3・4号畝



第47図 3-1区4面1・2号畝(1)



第48図 3-1区4面1・2号冢(2)

4号冢(第46図)

位置 075～095-565～605グリッド。3号冢と重複するが新旧関係不明。ばらついた状態で8条の畝間が検出された。なお、西端に2条程度分布する。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-4°28'-Wで、南北軸からやや西に傾く。畝間の最大残存長は2.10m。畝間の断面形はU字形で、最大幅34cm深さは最大約12cm。畝部は削平され残存しない。畝幅はばらつきが大きく、有効な数値ではないが、約168cmを計る部分がある。

3 3-2区

(1)冢

西調査区では、平面的な掘り下げによって、1号冢から2・3号冢の順で随時調査したが、相互の新旧関係は不明である。1号冢は調査区東半部に分布する。走向は、ほぼ南北軸と直交するもので時期が異なる。2号冢は散漫ながら調査区のほぼ全域に分布する。走向方位の違いから3～5枚の区画が想定でき、同時期の存在が想定される。3号冢は東端部のみで確認され、2-1号冢と重複するため異時期と考えられる。東調査区では、ほぼ全域に広がる冢2枚を検出した。南北軸と東西軸に走向することから、時期が異なると考えられる。

1-1号冢(第49図、PL.18)

位置 085～105-485～525グリッド。1-2号冢と南東部で一部重複するが新旧関係不明。中央部で断裂して

おり、区画が分かれる可能性がある。遺存状態は悪いが、北側で畝間が9条、南側で18条検出された。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-24°63'-Eで、北東-南西軸を採る。南端の方が東に振れ、北側に向かって徐々に北方に振れる。畝間の最大残存長は2.61m。畝間の断面形は皿状で、最大幅約25cm深さは最大約3cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は約10～36cmと狭い。

1-2号冢(第49図、PL.18)

位置 095～110-485～495グリッド。東西に3か所程度集中部分があり、東部は1-1号冢と重複するが新旧関係不明。東部はばらついた状態で畝間が13条、中央部は密集して15条程度、西部は大きさもばらついて14条が検出された。平面形は直線状。走向方位はN-24°40'-Wで、北西-南東軸を採る。畝間の最大残存長は6.65m。畝間の断面形は皿状で、西部の極端な部分を除き、最大幅約35cm深さは最大約3cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は密集する例が多く、計測不能。

2-1号冢(第50図、PL.18・19)

位置 100～105-495～505グリッド。7条の畝間が検出された。平面形は直線状。走向方位はN-36°50'-Eで、北東-南西軸を採る。畝間の最大長は約8.78mで、畝間の全長に近い。畝間の断面形はU字形で、幅約30～48cm深さは最大約23cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は42～105cm。

2-2号畝(第50図、PL.18・19)

位置 090～105-500～510グリッド。2-1号畝の西に約2.7mの間隔を置いて、同じ走向方位の畝間21条が検出された。平面形は直線状。走向方位はN-48～57°-Eで、北東-南西軸を採る。畝間の最大残存長は約15.65mだが、これは特殊例で、全体を検出できた畝間7条の全長は11.48～12.93mである。畝間の断面形はU字形で、幅約24～42cm深さは最大約19cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は約40～67cm。

2-3号畝(第50図、PL.19)

位置 085～100-515～525グリッド。2-2号畝の西に一部接して、直交方向の畝間10条が検出された。平面形は直線状。走向方位はN-15～28°-Wで、北西-南東軸を採る。畝間の最大残存長は約10.90mで、北側調査区域外へ延びる。また、長い畝間に交互して、長さ6m前後の短い畝間が見られ、異時期の畝である可能性もある。畝間の断面形はU字形で、最大幅約44cm深さは断面観察部分で約10cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は約30～81cm。また、異時期の畝と考えると、一つおきに計測すれば、約1.5m程度を計る。

2-4号畝(第50図)

位置 085～095-535～545グリッド。10条の畝間が検出された。平面形は直線状。走向方位はN-14～23°-Wで、北西-南東軸を採る。畝間の最大残存長は約7.15m。畝間の断面形はU字形で、幅約15～32cm深さは最大約15cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は約46～73cm。

2-5号畝(第50図)

位置 080～090-550～555グリッド。二種の畝間群が重複するが新旧関係不明。一つは南北に分かれる6条、もう一つは3条である。前者は南北で2.5m前後の間隔がある。平面形は直線状。走向方位は前者N-4～8°-W、後者N-4～10°-Eで、ともに南北軸を採る。畝間の最大残存長は3.65m。畝間の断面形はU字形で、幅約18～26cm深さは最大約3cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は約43～76cm。

3号畝(第51図、PL.21)

位置 095～105-485～505グリッド。6条の畝間が検出された。平面形は直線状。走向方位はN-17～26°-Wで、北西-南東軸を採る。畝間の最大残存長は約4.81

m。畝間の断面形はU字形で、幅約31～39cm深さは最大約9cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は約130～155cm。

4号畝(第52図)

位置 100～115-450～475グリッド。15条の畝間が検出された。西に1条別方向がある。平面形は直線状。走向方位はN-17～24°-Wで、北西-南東軸を採る。1条のみN-75°-E。畝間の最大残存長は約7.85m。畝間の遺存高浅く断面形不明。幅約31～51cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は約67～127cm。

5-1号畝(第53図、PL.20)

位置 110～115-450～470グリッド。7条の畝間が検出された。平面形は直線状。走向方位はN-4°-W～N-13°-Eで、南北軸を採る。畝間の最大残存長は約3.20m。畝間の断面形はU字形で、最大幅約27cm深さは最大約16cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は約211～270cm。

5-2号畝(第53図、PL.20)

位置 100～110-460～475グリッド。8条の畝間が検出された。平面形は直線状。走向方位はN-16～23°-Wで、北西-南東軸を採る。畝間の最大残存長は約8.45m。畝間の断面形はU字形で、最大幅41cm深さは最大約9cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は約88～124cm。

6-1号畝(第53図、PL.20)

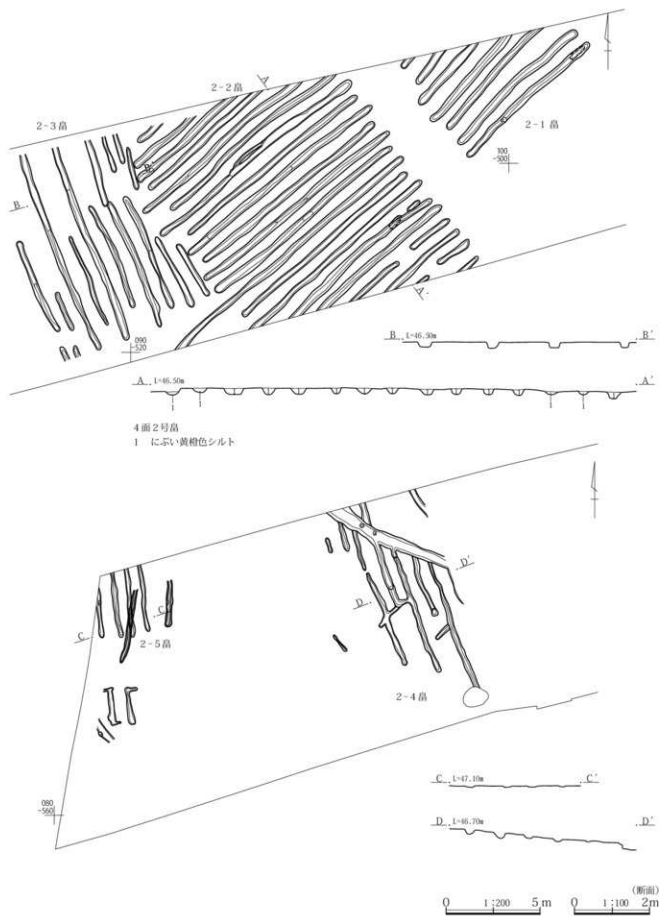
位置 105～115-450～465グリッド。4条の畝間が検出された。平面形は直線状。走向方位はN-67～72°-Eで、北東-南西軸を採る。畝間の最大残存長は約5.50mで、断続的に西方へ延びる傾向が見られ、畝間の全長とは異なる。畝間の断面形はU字形で、最大幅約34cm深さは最大約9cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は約144～170cm。

6-2号畝(第53図、PL.20)

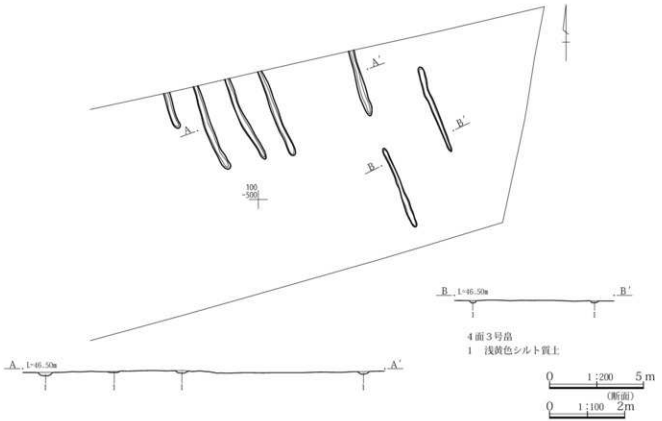
位置 100～110-465～480グリッド。6条の畝間群と4条の畝間群が重複する。平面形はともにやや弧状。走向方位は前者がN-60～79°-Eで、後者がN-70～84°-Eで、東西軸を採る。畝間の最大残存長は約11.92m。畝間の断面形はU字形で、最大幅約52cm深さは最大約14cm。畝部は削平され残存しない。畝幅は前者が87～210cm、後者が130～186cm。



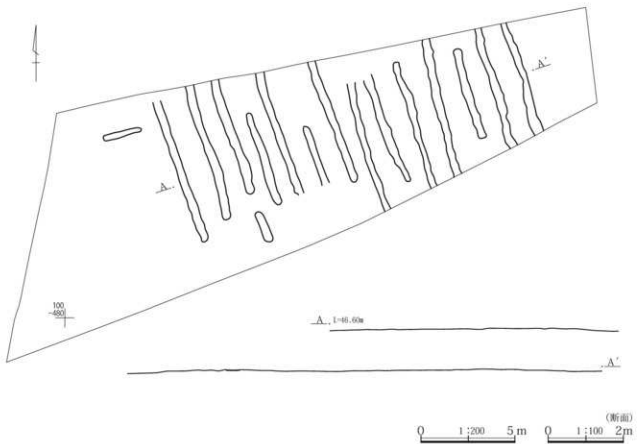
第49図 3-2区4面1-1・2号墳



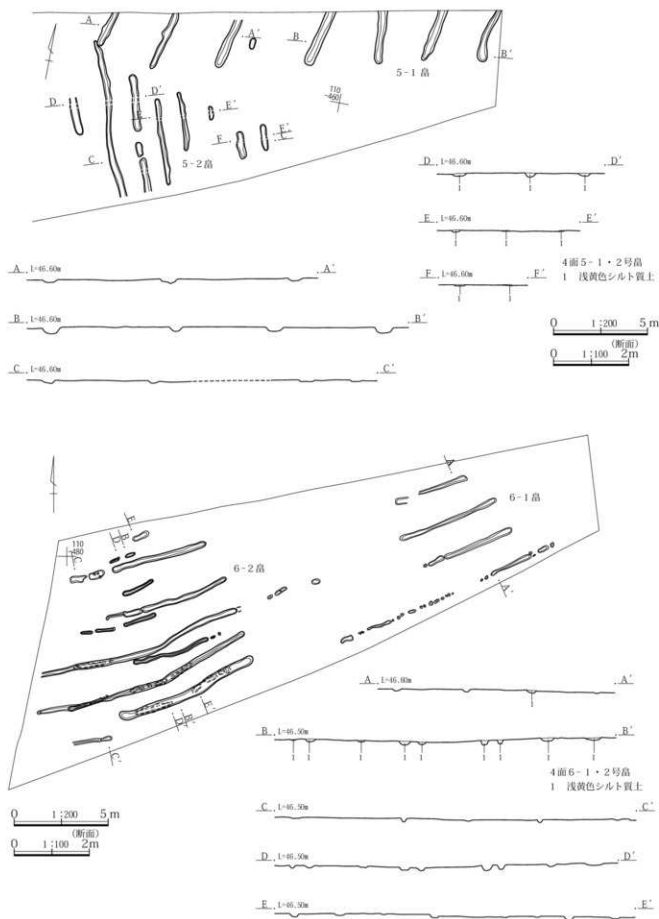
第50図 3-2区4面2-1～5号窟



第51図 3-2区4面3号品



第52図 3-2区4面4号品



第53図 3-2区4面5-1・2号窟、6-1・2号窟

第6節 5面の遺構と遺物

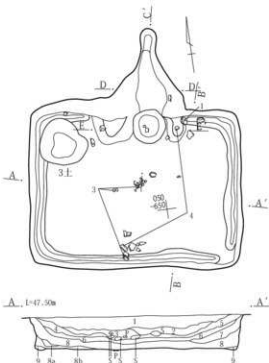
1 2区

9世紀後半の竪穴住居2軒、北カマドをもつ住居1軒と東カマドをもつ住居1軒が約19m離れて構築されている。また、同時期の大型掘立柱建物1棟を含むピット群が検出された。

(1) 竪穴住居

1号住居(第54～56図、PL. 4・5・25)

位置 045～050-645～650グリッド、2号住居の南西約19mの所に位置している。



1号住居

- 1 灰黄褐色土 やや砂質。白色軽石を含む。炭化物粒子を含む。
- 2 にぶい黄褐色土 やや砂質。白色軽石を少量。炭化物、焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色土 やや粘質。層下部の住居中央付近を中心に径10～20cm程の礫が多数に入る。土器も含む。
- 4 黒褐色土 やや粘質。しまりあり。炭化物、焼土粒子、白色軽石を含む。
- 5 暗褐色土 やや粘質。炭化物、焼土粒子、白色軽石を含む。
- 6 にぶい黄褐色土 やや粘質。炭化物、焼土粒子を含み、ロームを僅かに含む。
- 7 暗褐色土 やや粘質。炭化物、焼土粒子、白色軽石を含む。5層に近以。
- 8 暗褐色土 やや粘質。炭化物、焼土粒子、ロームブロックを含む。
- 8a 8層中にロームブロックを多く含む。
- 8b 8層中にロームブロックをやや多く含む。

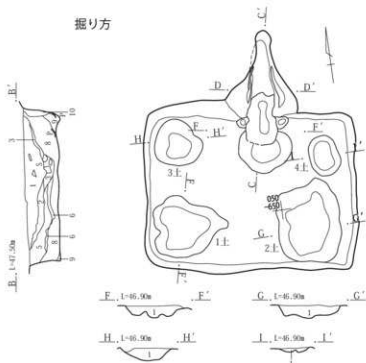
形状 隅丸方形。主軸方位 N-8°-E。

規模 面積7.81㎡、長辺(東西)3.39m、短辺(南北)2.52m、残存壁高50cm。

床面 ほぼ平坦である。貼り床なし。

カマド 北壁中央に設置される。燃焼部の大部分は壁を掘り込んで構築されている。規模は長さ183cm、焚き口部の幅52cm、両袖を有する。掘り方時に検出された焚き口部両脇のピットは袖石の抜き取り痕であろうか。いずれの深さも14cmほどである。カマド使用面には焼土・炭化物が多量に堆積していた。

掘り方



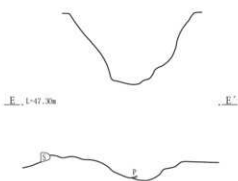
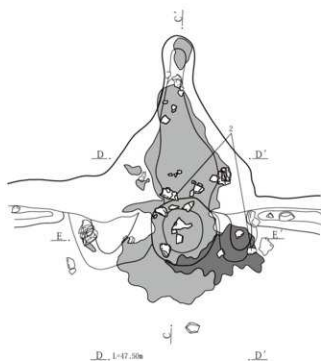
- 9 黄褐色粘質土 ロームブロックを多量に含む。潤滑のフク上。
- 10 黒褐色粘質土 地山ブロックが多量に入る。壁の崩落上か。
*白色軽石は、Hr-FA又は浅間C軽石と思われる。

1号住居内土坑

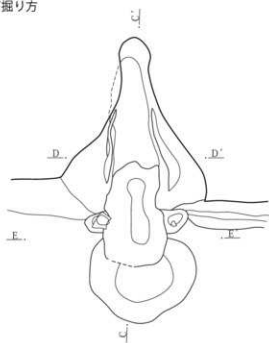
- 土坑1
- 1 にぶい黄褐色粘質土 ロームをブロック状に多量に含む。
- 土坑2
- 1 にぶい黄褐色粘質土 ロームをブロック状に多量に含む。
- 土坑3
- 1 にぶい黄褐色粘質土 ロームをブロック状に多量に含む。
- 土坑4
- 1 にぶい黄褐色粘質土 ロームを小さなブロックで多量に含む。
*浅く遺構ではない可能性がある。

0 1:60 2m

第54図 2区5面1号住居(1)



カマド掘り方



1号住居カマド

- 1 灰黄褐色土 地山の灰黄褐色土層とほぼ同じ土層。しまりやや弱い。
- 2 灰黄褐色土 潮灰色の粘性のある土が混じる。しまりやや弱い。
- 3 灰黄褐色土 シルト質上でブロック状に入る。しまり良い。
- 4 焼土 しまりやや弱い。
- 5 灰黄褐色土 灰黄褐色土のシルト質土混じり。しまりやや弱い。
- 6 灰黄褐色土 焼土を多量に含む。しまりやや弱い。
- 7 黒褐色土 焼土を少量含む。しまりやや弱い。
- 8 灰黄褐色土 焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。しまりやや弱い。
- 9 暗褐色土 炭化物粒子、焼土粒子を多量に含む。炭化層が中心となる。
- 10 暗褐色土 焼土粒子を含む。しまり弱い。
- 11 明赤褐色土 焼土中心層。しまり弱い。
- 12 黒褐色土 焼土粒子、炭化物粒子を含む。しまり弱い。
- 13 灰黄褐色土 焼土、炭化物粒子を含む。
- 14 灰黄褐色土 焼土、炭化物粒子を多量に含む。
- 15 にぶい黄褐色土 地山ローム上の崩落土。
- 16 灰黄褐色土 焼土、灰を含む。下層に灰が帯状に少し入る。
- 17 黒褐色土 黒色土混じり。焼土、炭化物粒子を多量に含む。地山2次ローム土を少量含む。
- 18 灰黄褐色土 2次ローム土を多量に、焼土、炭化物粒子を少量含む。
- 19 灰黄色土 2次ローム土中心。
- 20 黒褐色土 焼土、炭化物粒子を含む。
- 21 灰黄褐色土 2次ローム土を多量に、焼土、炭化物粒子を少量含む。
- 22 潮灰色土 黒色土中心。
- 23 灰黄褐色土 2次ローム土中心。焼土、炭化物粒子を少量含む。
- 24 にぶい黄褐色粘質土 ロームをブロック状に多量に含む。住居床下土塊と思われる。

0 1:30 1m

第55図 2区5面1号住居(2)

貯蔵穴 床面の北西隅にある住居内土坑3が貯蔵穴になる可能性がある。長径78cm・短径68cm・深さ20cmの楕円形を呈する。北東にある住居内土坑4は検出位置から判断すると貯蔵穴の可能性を否定できないが、掘り込みが浅く、遺構とならない可能性もある。

柱穴 検出できなかった。

周溝 幅12～22cmの溝が南東の隅では途切れているもののほぼ全周している。深さは1～2cmである。

住居内土坑1 床面の南西隅にある。長径118cm・短径78cm・深さ19cmの不正形を呈する。底面は凹凸が激しい。

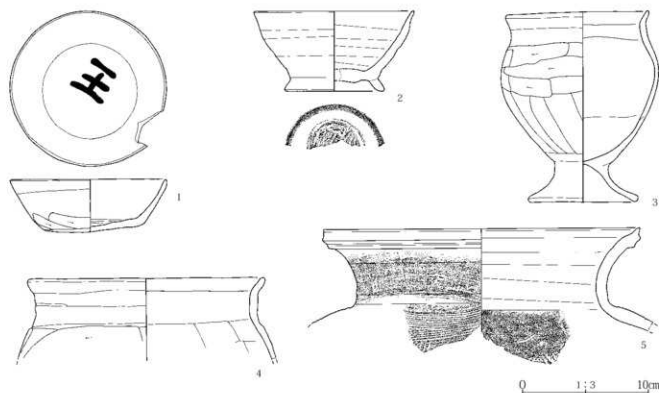
住居内土坑2 床面の南東隅にある。長さ120cm・幅97cm・深さ20cmの隅丸方形を呈する。底面はやや凹凸がある。

住居内土坑4 床面の北東隅から検出された。長径64cm・短径46cm・深さ7cmの楕円形を呈する。

埋没土 住居四隅からの自然埋没土と考えられる。3層下部、住居中央部付近から礫が多量に出土している。

遺物 全体的に遺物量は少ない。第56図1・「王」の墨書がある土師器杯はカマド周辺の床上2.3cmから、第56図3・土師器台付甕は住居中央部から床上2.3～22.2cmにかけての出土である。須恵器の椀はカマドからの出土であった。第56図4・土師器甕は床上2.3～3.2cmの出土である。

時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。



第56図 2区5面1号住居出土遺物

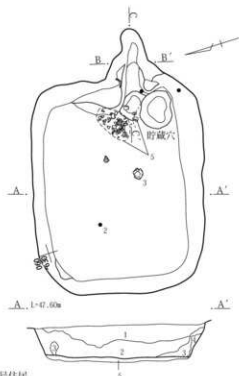
第21表 2区5面1号住居出土土器

No.	挿入番号 PL.番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第56図 PL.25	土師器 杯	+2.3cm 口縁部を僅かに欠損	□ 12.2 高 4.1 底 7.8	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへラ削り。	内面底部に「王」の墨書。
2	第56図 PL.25	須恵器 椀	+2.6cm 2/5	□ 12.6 高 6.3 底 6.9 台 7.6	細砂粒/酸化焰/にぶい橙	口縁部整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転系切り。	
3	第56図 PL.25	土師器 台付甕	+2.3～22.2cm 胴部・脚部一部欠損	□ 11.4 高 15.0 脚 8.0 底 4.4	細砂粒/良好/にぶい褐色	脚部は貼付、口縁部から頸部と脚部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
4	第56図 PL.25	土師器 甕	+2.3～3.2cm 口縁部～胴部上位片	□ 18.4	細砂粒多・角閃石/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
5	第56図 PL.25	須恵器 甕	口縁部～胴部上位片	□ 24.8	細砂粒/還元焰/暗灰	口縁部は口縁部整形。口縁部は縦位のカキ目、胴部は横位のカキ目。内面胴部にアテ具痕が残る。	

2号住居(第57・58図、PL. 5・6・25・26)

位置 055～060-625～630グリッド、1号住居の北東約19mの所に位置している。

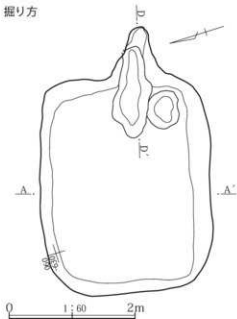
形状 隅丸方形。主軸方位 N-107°-E。



2号住居

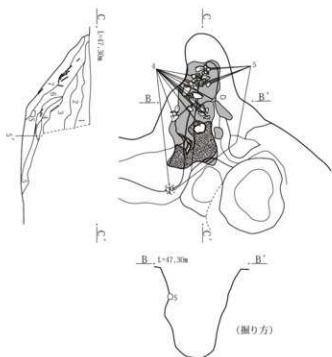
- 1 に深い黄褐色土 やや粘質。黄褐色の小ブロックをやや多く含む。白色軽石を多く含む。層上部を中心に、炭化物を多く含む。
- 2 暗褐色土 やや粘質。焼土、炭化物粒子を含む。黄褐色ロームブロックを少量含む。白色軽石も含む。
- 3 黒褐色土 やや粘質。焼土、炭化物粒子、白色軽石を含む。
- 4 褐色粘質土 地山ブロックを多く含む。壁が崩落した部分か。
- 5 灰黄褐色土 地山の2次ローム土を含む。しまり良い。貼床。
*白色軽石は、Br-FA又は浅間C軽石と思われる。

掘り方



規模 面積6.37㎡、長辺(東西)3.4m、短辺(南北)2.7m、残存壁高50cm。

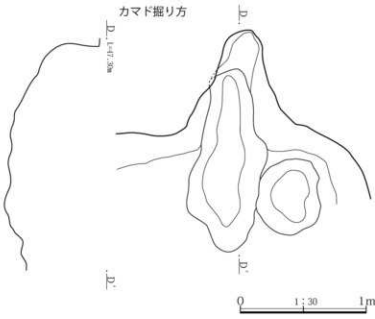
床面 ほぼ平坦である。灰黄褐色土(5層)により、掘り方底面から3～8cm貼り床している。



2号住居カマド

- 1 灰黄褐色土 シルト質土混じり。しまり弱い。
- 2 灰黄褐色土 焼土を含む。しまり弱い。
- 3 黒褐色土 焼土を少量含む。しまり弱い。
- 4 灰黄褐色土 焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。しまり弱い。
- 5 灰黄褐色土 焼土粒子を含む。炭化物粒子を少量含む。
- 6 褐色土 シルト質土。焼土粒子を少量含む。
- 7 灰黄褐色土 焼土を多量に含む。第1次カマドの焼土面と考えられる。

カマド掘り方



第57図 2区5面2号住居

カマド 東壁中央のやや南よりに設置される。燃焼部は床面から壁を掘り込んで構築され、規模は長さ146cm、焚き口部の幅27cm、両袖を有する。燃焼部や焚き口部の前面から遺物が出土し、焼土・炭化物が多量に堆積していた。

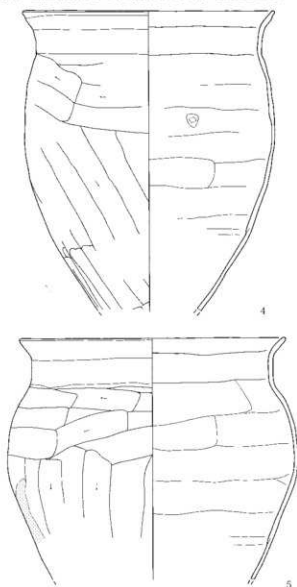
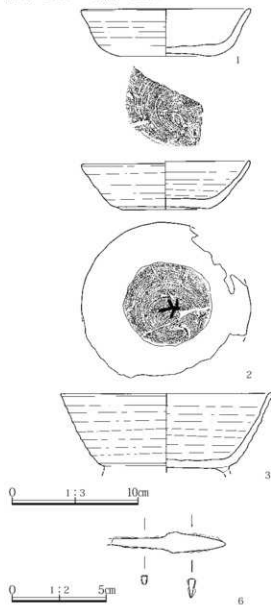
貯蔵穴 床面の南東隅から検出された。長径60cm・短径50cm・深さ10cmの楕円形を呈する。

柱穴 なし。 周溝 なし。

埋没土 自然埋没土と考えられる。1～4層は住居覆土で、5層は掘り方覆土である。

遺物 全体的に遺物量は少ない。土師器の甕は、いずれもカマド周辺から出土している。第58図4は床上1～17.7cmにかけて、5の甕は細片となった状態でカマド前面から出土したものである。第58図3は床上2.5cmからの出土、第58図2は埋土最上層からの出土であった。

時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。



第58図 2区5面2号住居出土遺物

第22表 2区5面2号住居出土土器

NO.	種別番号 PL.番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第58図 PL.25	須忠器 杯	1/3	口 13.0 高 3.7 底 7.4	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	外面の一部に煤が付着。
2	第58図 PL.25	須忠器 杯	+52.0cm 3/4	口 13.2 高 3.8 底 6.9	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	外面底部に「不」?の墨書。
3	第58図 PL.25	須忠器 碗	+2.5cm 3/4	口 16.4 底 11.0	細砂粒・角閃石/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付がほとんど剥落、底部は回転ヘラ削り。	

第4章 発掘調査の記録

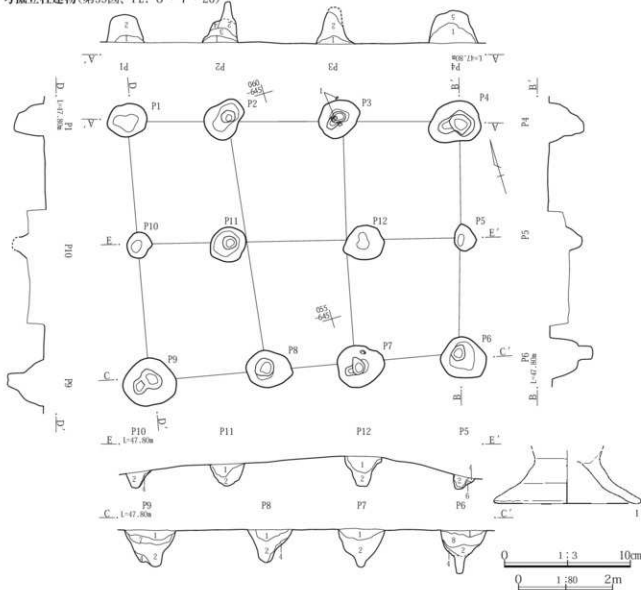
NO.	検出番号 PL.番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第58図 4	PL.26	土師器 罎	+1.0~17.7 cm 口縁部~ 胴部/位	口 19.8 胴 19.8~22.4	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面胴部はへラナデ。胴部の歪み大。	
第58図 5	PL.26	土師器 罎	+1.0~7.6 cm 口縁部~ 胴部/中位	口 20.7 胴 22.8	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面胴部はへラナデ。	胴部の一部に粘土付着。

第23表 2区5面2号住居出土鉄製品

NO.	検出番号 PL.番号	種類 器種	出土位置	残存率	計測値				特徴・状態
第58図 6	PL.25	鉄器 刀子		柄端部欠損	長 (6.0)	幅 1.1	厚 0.4	重 (4.1)	小型品か、錆が進んでいる。

(2) 掘立柱建物

1号掘立柱建物(第59図、PL. 6・7・26)



1号掘立

- | | |
|--|--|
| <p>1 褐灰色砂質土 F A、浅間C軽石をやや多量、炭化物粒子を微量に含む。</p> <p>2 黒褐色土 F A、浅間C軽石を少量、炭化物粒子を微量に含む。</p> <p>3 黒褐色土 黄褐色土小ブロックをやや多量に含む。</p> <p>4 にぶい黄褐色粘質土 黒褐色土小ブロック、黄褐色土小ブロックを多量に含む。</p> | <p>5 黒褐色土 黄褐色土小ブロックを多量に含む。</p> <p>6 黄褐色土ブロック</p> <p>7 褐灰色砂質土 黄褐色土大ブロックを多量、浅間C軽石、F Aをやや多量、炭化物粒子を微量に含む。</p> <p>8 褐灰色砂質土 黄褐色土小ブロックを少量、浅間C軽石、F Aをやや多量、炭化物粒子を微量に含む。</p> |
|--|--|

第59図 2区5面1号掘立柱建物・同出土遺物

第24表 2区5面1号掘立柱建物出土鉄製品

No.	神四番号 Pl.番号	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第59回 Pl.26	土師器 台付篋	脚部	脚 11.6	細砂粒/良好/に赤い赤銅	脚部は脚部に貼付、内外とも横ナデ。	

主軸方位 N-74°-78°-E 面積 36.4㎡

形態 2×3間・東西棟。総柱構造。柱筋の通りは全体に良いが、南辺は西端が南へ開いており、平面形はやや台形となる。あわせて西辺も西へ振れ、北西角は鋭角となる。P11はP2・P8を結んだ線より西側に張り出す。P12はP3とP7を結んだ線より東側に張り出す。したがって、P11・12は棟持ち柱となり、屋根は入母屋の可能性が高い。桁行柱間を平均すると、2.285m・約7.54

尺となる。北辺のP1-2間は2.02m、南辺のP7-8間は1.95mと狭くなるが、規則性はない。柱穴の規模は均質で、底面には柱のアタリ部分に小穴が見られる。詳細な規模は25表のとおり。

出土遺物 P3から1・土師器台付篋脚部が出土している。掲載遺物のほかに土師器大片85g、須臾器大片233g、同小片153gが出土している。

時期 出土遺物から9世紀代に比定される。

第25表 2区5面1号掘立柱建物計測表

柱穴No.	規模 (cm)				主軸方位	底部小穴規模 (cm)				
	長径	短径	深さ	形状		長径	短径	深さ	次ピットとの間隔 (m)	桁・梁の規模 (m)
P1	84.5	68.5	60.0	楕円					2.02	北辺 7.04
P2	89.5	69.5	49.0	不整円	30.5	23.5	39.5		2.45	
P3	90.5	71.0	68.0	楕円	31.0	20.5	36.0		2.51	
P4	112.0	84.0	69.0	楕円	43.5	41.5	9.5		2.46	東辺 5.05
P5	57.5	44.5	30.0	不整円	35.0	28.5	30.5		2.54	
P6	98.0	86.0	54.0	不整円					2.19	南辺 6.67
P7	99.5	87.0	81.0	楕円	37.5	26.5	29.5		1.95	
P8	100.0	76.0	69.0	楕円	42.5	35.5	18.0		2.53	
P9	114.0	100.5	76.0	楕円	62.0	28.5	29.5		2.91	西辺 5.58
P10	55.5	46.0	34.0	円					1.91	
P11	83.0	68.0	43.0	隅丸方	29.5	26.5	6.5		2.84	
P12	88.0	71.0	64.0	不整円					2.12	→P5

(3) 土坑

4基の土坑が検出されたが、1基は掘立柱建物の柱穴になる可能性もある。これを除くといずれも1・2号住居間に分布している。自然埋没である。ただし、用途などは不明である。

3号土坑(第60図、Pl. 7)

位置 050-630～635グリッド

5号土坑の北東約8mの所に位置している。長さ120cm・幅71cm・深さ20cmの隅丸長方形を呈する。底面は凹凸がある。埋没土は砂質で、浅間C軽石やHr-FAを含む。土師器製の破片が出土している。

4号土坑(第60図、Pl. 7)

位置 050-640グリッド

5号土坑に接している。長径77cm・短径75cm・深さ23～29cmのほぼ円形を呈する。底面は凹凸がある。埋没

土はやや砂質で焼土、炭化物粒子を少量含んでいる。遺物の出土はなかった。

5号土坑(第60図、Pl. 7)

位置 050-640グリッド

4号土坑に接している。長さ168cm・幅84cm・深さ34cmの隅丸長方形を呈する。埋没土はロームブロック、焼土、炭化物粒子、白色軽石を含む。土師器製の破片が出土している。

6号土坑(第60図、Pl. 7)

位置 065-600グリッド

調査区の東端から検出された。長さ109cm・幅102cm・深さ43cmの隅丸長方形を呈する。底面は凹凸がある。埋没土は砂質で遺物の出土はなかった。1号掘立柱建物のピットと似ていることから、掘立柱の柱穴になる可能性もある。

3号土坑



3号土坑

- 1 黒褐色砂質土 暗褐色土を含む。ややしる。Hr-FA、浅間C軽石と思われる粒子を少量含む。

4・5号土坑



4号土坑

- 1 灰黄褐色土 やや砂質。白色軽石を含む。焼土、炭化物粒子を少量含む。

- 2 黒褐色土 やや砂質。層下部に、地山ブロックを含む。焼土、炭化物粒子を僅かに含む。

5号土坑

- 1 にぶい黄褐色粘質土 ロームブロックを多量に含む。もろい。
2 黒褐色土 やや砂質。白色軽石を含み、焼土、炭化物粒子を少量含む。
3 暗褐色粘質土 地山ブロックを多く含む。

*白色軽石は、Hr-FA又は浅間C軽石と思われる。

6号土坑



6号土坑

- 1 黒褐色砂質土 ロームを小ブロックで少量、小さな礫を僅かに含む。

- 1a 1層に近辺。1層よりもロームをやや多く含む。

- 2 黒褐色砂質土 ロームブロックをやや多く含む。

*古代(少なくとも、浅間B軽石よりも古い)と考える。又、1号掘立の柱穴と似た様子であるため、掘立の柱穴の可能性もある。



第60図 2区5面3～6号土坑

(4)ピット

ピット群(第12・61図、PL. 7・8)

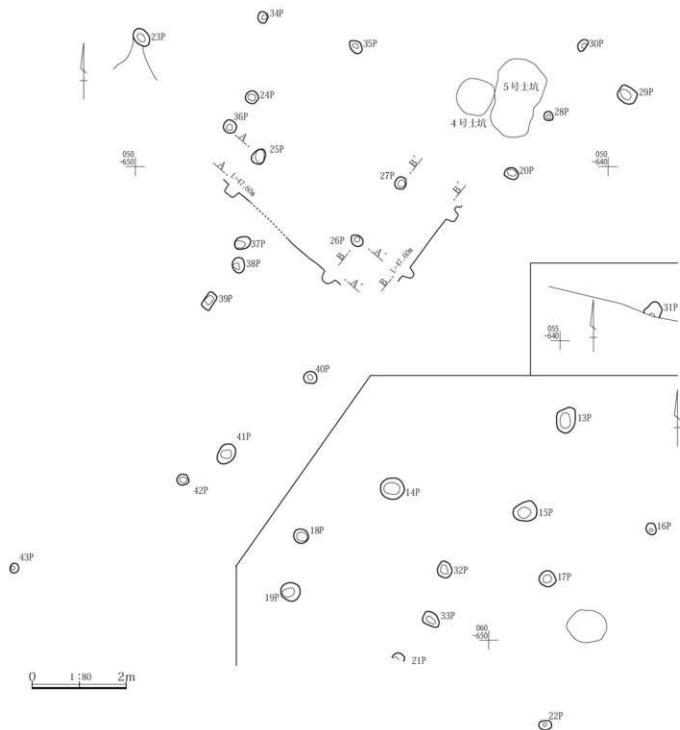
位置 040～065-635～655グリッド。31基が検出され、1号掘立柱建物の北側と南側にピットの集中する部分がある。埋没土の詳細は不明であり、各ピットを比較できる資料に欠ける。詳細な規模は26表のとおり。P13～15の規模は他より大きく、長径51～55cm、短径39～44.5cmで、深さは22～27.5cmである。3基の規模は共通しており、L字形に分布することから同一の掘立柱建物の一部とも考えられるが、角は直角ではなく鈍角気味である。ピット間の距離は、P13～P15が210cm、P14～P15が283cmを計る。この場合、南東に隣接する1号掘立柱建物との関連も想定されるが、規模は1号掘立柱建物よりもかなり小さい。P25～27は調査段階で掘立柱建物と認定されていたが、規模や規格において特に認定すべき要素がなく、ここではエレベーション図を参考

第26表 2区5面ピット計測表

ピットNo	位置(X-Y)	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
13	064-648	55.0	39.0	25.0
14	063-651	51.5	44.5	22.0
15	062-649	51.0	40.5	27.5
16	062-646	25.5	19.5	23.0
17	061-648	37.0	32.5	26.5
18	062-653	32.0	30.5	22.5
19	060-654	40.5	38.5	20.5
20	049-641	29.5	24.0	25.0
21	059-651	—	—	46.0
22	058-648	27.5	19.5	17.0
23	052-649	41.5	29.5	11.5
24	051-647	28.5	26.5	21.0
25	050-647	34.5	27.5	17.5
26	048-645	28.5	22.0	26.5
27	049-644	26.0	24.0	16.0
28	051-641	20.5	19.5	19.0
29	051-639	43.5	33.5	24.0
30	052-640	28.5	17.0	20.0
31	055-637	—	—	41.0
32	061-650	36.0	31.0	8.0
33	060-651	38.5	27.0	7.5
34	053-647	25.5	21.5	11.0
35	052-645	31.5	23.0	9.5
36	050-647	29.0	27.5	11.0
37	048-647	35.5	25.5	27.5
38	047-647	32.5	25.5	19.0
39	046-648	39.5	21.5	19.0
40	045-646	28.5	25.5	17.0
41	043-647	46.0	34.5	14.5
42	043-648	25.5	24.5	14.0
43	041-652	21.5	18.5	9.5

掲示する。22号ピットは1号掘立柱建物P10の西約20cmに位置する。確認面は22号トレンチの底面であり、その他のピットおよび1号掘立柱建物よりも40cm以上低い。こうした状況を考慮すると、22号ピットは本来深さ60cm近い規模を持っていたこととなる。したがって、上端径

も大きく考えた場合、1号掘立柱建物P10と重複するか、一部であった可能性も生じる。出土遺物は23号ピットから土師器大片10g、34号ピットから須恵器大片3g、36号ピットから土師器小片2gが出土し、いずれも奈良・平安時代の所産である。



第61図 2区5面ピット群

(5)溝

調査区の東側でやや蛇行する溝2条を検出した。埋没状況や出土遺物など相違点がある。

7号溝(第62図、PL. 8)

位置 060～070-615～625グリッド。北端は調査区域外へ延び、南端は攪乱に壊され、その先は2面旧河道のため不明となる。平面形はほぼ直線状。走行方位はN-20～37°-E。断面形は逆台形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は12cmで、勾配は1.2%で北方へ下向する。自然埋没と思われる。規模は長さ9.72m以上、上端幅32～58cm、深さは北壁部分で55cmであり、調査確認面は30cm程度下がっている。北壁での観察から、V・VI層中から掘り込まれていることが確実であり、4面との前後関係に検討の余地が残る。前出であった場合、他の調査区の3面に相当することとなる。土師器大片5g、須恵

器大片30g、須恵器小片5gが出土し、いずれも奈良・平安時代の所産である。

8号溝(第62図、PL. 8)

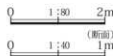
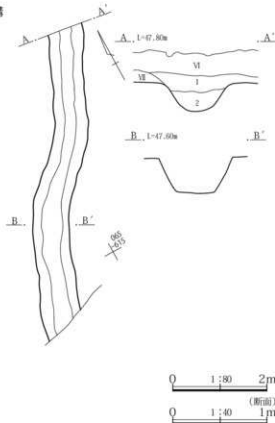
位置 060～070-610～615グリッド。北端は調査区域外へ延び、南端は攪乱に壊され、その先は2面旧河道のため不明となる。平面形はS字形に蛇行する。走行方位はN-22～45°-E。断面形は逆台形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は7cmで、勾配は1.1%で北方へ下向する。自然埋没と思われる。規模は長さ6.37m以上、上端幅64～82cm、深さは北壁部分で39cmであり、調査確認面は20cm程度下がっている。北壁での観察から、V・VI層中から掘り込まれていることが確実であり、4面との前後関係に検討の余地が残る。前出であった場合、他の調査区の3面に相当することとなる。遺物は出土していない。

7号溝



- 7号溝
 1 にぶい黄褐色土 しまり弱い。
 2 灰黄褐色土+褐灰色土 F A・浅間C軽石を微量に含む。
 3 暗褐色土 やや粘性あり。F A・浅間C軽石・砂を少量含む。
- 8号溝
 1 灰黄褐色土 F A・浅間C軽石を多量、にぶい黄褐色土を少量含む。
 2 にぶい黄褐色土 灰黄褐色土をやや多量、白色粒子を含む。

8号溝

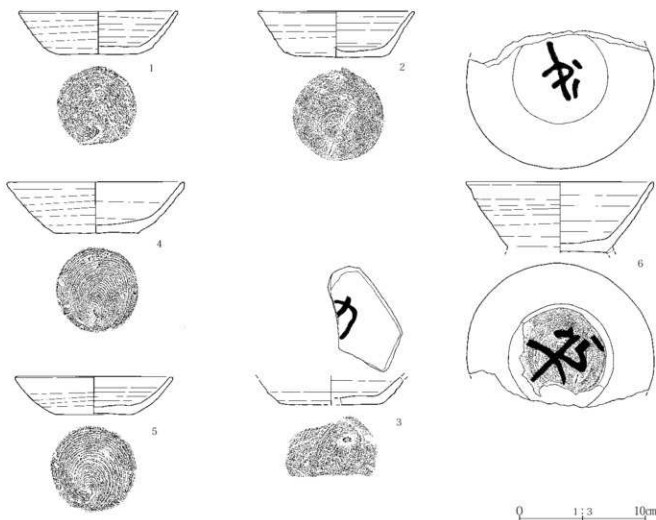


第62図 2区5面7・8号溝

(6)遺構外出土遺物(第63図、PL.26)

調査段階では5面(2)で出土地点を図化している(第12図)が、内容から上位の5面(1)に伴う可能性が高いため、報告段階の6面ではなく5面で扱うこととした。出土遺物は非常に少ないが、調査区南東部にやや集中す

る。調査段階では遺物集中として図化された遺物が9点あるが、9・須恵器碗を除き小片である。1～6・須恵器杯・椀はまとまりのある一群であり、1・2号住居・1号掘立柱建物に近接しており、関連が想定されよう。



第63図 2区5面遺構外出土遺物

第27表 2区5面遺構外出土遺物

No.	挿図番号 PL.番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第63図 PL.26	須恵器 杯	1/2	□12.4 高 3.4 底 6.4	細砂粒/還元焰/灰 白	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
2	第63図 PL.26	須恵器 杯	2/3	□12.4 高 3.6 底 7.0	細砂粒/還元焰/灰	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り後四隅を 回転ヘラ削り。	
3	第63図 PL.26	須恵器 杯	底部～体部下 位片	底 8.0	細砂粒/還元焰/灰	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	内面底部に「カ」? の墨書。
4	第63図 PL.26	須恵器 杯	ほぼ完形	□14.0 高 4.0 底 6.6	細砂粒・褐粒/酸 化焰/灰黄褐	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
5	第63図 PL.26	須恵器 杯	1/2	□12.2 高 3.0 底 6.2	細砂粒/還元焰/灰	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
6	第63図 PL.26	須恵器 椀	遺物集中 2/3(高台は欠 損)	□14.2 底 8.2	細砂粒/酸化焰/褐 灰	ロク口整形、回転右回り。高台は粘付。底部は回転ナデ。	内外面の底部に墨 書。内面は判読不 能。外面は「カ」か。

2 3-1区

(1) 竪穴住居

1号住居(第64～66図、PL.13・14・26)

位置 075～605グリッドに位置している。形状 隅丸方形。主軸方位 N-4°-E。

規模 面積7.04㎡、長辺(東西)3.3m、短辺(南北)3.0m、残存壁高40～45cm。

床面 ほぼ平坦である。掘り方はなかった。

カマド 北壁中央のやや東よりに設置される。燃焼部は床面に構築され、規模は長さ100cm、焚き口部の幅50cm、両袖を有する。燃焼部から焚き口にかけて礫の出土があった。また支脚が残されていた。煙道は長さ70cm、幅20～25cmで、煙り出しのピットは長径43cm、短径18cmである。

貯蔵穴 床面の北東隅から検出された。長径38cm・短径30cm・深さ15cmの楕円形を呈する。埋土層から礫が出

土している。

柱穴 2基のピットが検出されている。P1は長径45cm・短径41cm・深さ14cm、P2長径37cm・短径33cm・深さ11cmである。柱穴になるかどうかは不明である。

周溝 なし。

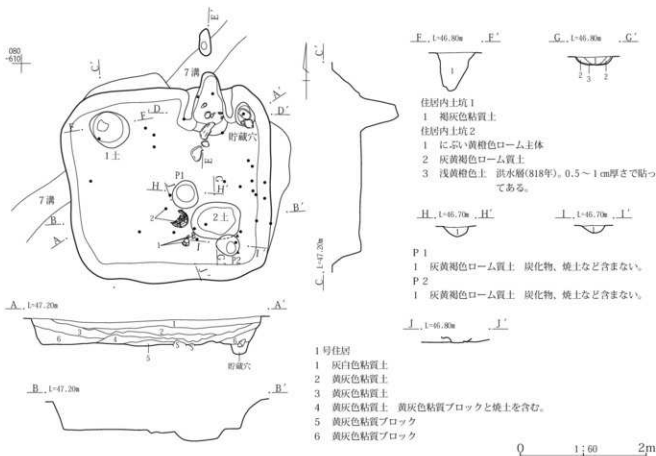
住居内土坑1 床面の北西隅から検出された。長径65cm・短径55cm・深さ60cmの楕円形に近い形状である。

住居内土坑2 床面の南東隅から検出された。長径78cm・短径58cm・深さ12cmの楕円形を呈する。底面に0.5～1cmの厚さで洪水層(818年)が貼ってあるのが認められた。

埋没土 住居四隅からの自然埋没土と考えられる。1～6層は住居覆土である。

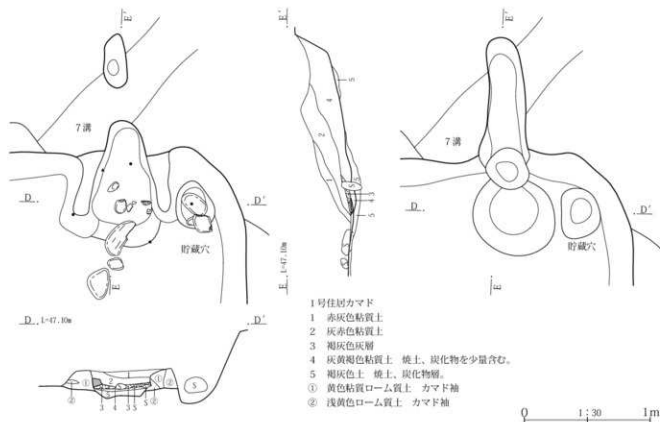
遺物 全体的に遺物量は少ない。床面中央の南壁寄りから土師器の椀と甕が出土している。第66図・1は床直上から、2は床土3～12cmの出土である。

時期 出土遺物から9世紀第4四半期に比定される。

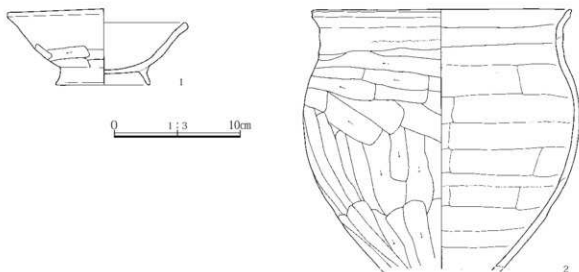


第64図 3-1区5面1号住居(1)

カマド掘り方



第65図 3-1区5面1号住居(2)



第66図 3-1区5面1号住居出土遺物

第28表 3-1区5面1号住居出土土器

NO.	挿図番号 Pl.番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第66図 Pl.26	土師器 椀	+1.0cm 口縁部1/4欠 損	口 14.0 高 6.0 底 6.8 台 7.4	細砂粒/良好/橙	高台は貼付、口唇部横ナデ、口縁部から体部上半はナデ、体部下半はヘラ削り、底部は回転ナデ。	
2	第66図 Pl.26	土師器 甕	+3.0~12.0 cm 口縁部~ 胴部下位1/2	口 20.3 胴 21.8	細砂粒多・角四石 /良好/にぶい赤褐	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

(2)土坑

20基の土坑が検出された。南西から北西にかけて直線的に分布する一群と、その南に離れて分布する土坑群からなる。皿形で浅い9・11号土坑2基を除けば、小規模でピット状を呈する。8～17、19～26土坑から遺物は出土していない。

7号土坑(第67図)

位置 070-575グリッド

12号土坑の南西3mの所に位置している。長径67cm・短径53cm・深さ22～40cmの楕円形を呈する。埋没土は自然で粘質、Hr-FAと浅間C軽石を含む。土師器製の破片が出土している。機能・用途不明である。

8号土坑(第67図)

位置 070-580グリッド

9号土坑の西に位置している。長径49cm・短径36cm・深さ16cmの不正形を呈する。埋没土は自然で粘質、7号土坑と同様にHr-FAと浅間C軽石を含む。機能・用途不明である。

9号土坑(第67図)

位置 070-575グリッド

7号土坑と8号土坑との中間に位置している。調査区外に延びているために形状は不明である。現状では長さ256cm・深さ64cmを測る。底面はほぼ平坦である。機能・用途不明である。

10号土坑(第67図)

位置 085-580グリッド

13号土坑の東に接している。長径79cm・短径70cm・深さ16cmの楕円形を呈する。埋没土は自然で、炭化物とHr-FAを多量に含んでいる。機能・用途不明である。

11号土坑(第67図)

位置 085-575～580グリッド

10号土坑の東南東約2.5mの所に位置している。長さ192cm・幅140cm・深さ5～9cmの方形を呈するものと思われる。底面は凹凸がある。埋没土は自然で粘質、機能・用途不明である。

12号土坑(第67図)

位置 070-570グリッド

7号土坑の北東約3mの所に位置している。完掘できなかったために、現状では長さ88cm・幅39cm・深さ14cmを測る。底面は平坦である。機能・用途不明である。

13号土坑(第67図)

位置 085-580グリッド

10号土坑の西に接している。長径42cm・短径35cm・深さ12cmの楕円形を呈する。埋没土は自然で粘質、Hr-FAを含む。機能・用途不明である。

14号土坑(第67図)

位置 085-585グリッド

13号土坑の南西約1.2mの所に位置している。長径61cm・短径45cm・深さ14cmの楕円形を呈する。埋没土は13号土坑と同様に自然で粘質、Hr-FAを含む。機能・用途不明である。

15号土坑(第67図)

位置 085-585～590グリッド

16号土坑の西に位置している。長径86cm・短径60cm・深さ6～21cmの楕円形を呈する。埋没土は粘質で1層にHr-FAを含んでいる。

16号土坑(第67図)

位置 085-585グリッド

15号土坑の東に位置している。長径46cm・短径41cm・深さ17cmのほぼ円形を呈する。埋没土は自然で粘質、1層にHr-FAを含んでいる。機能・用途不明である。

17号土坑(第67図)

位置 080-595グリッド

19号土坑の北東約4.3mの所に位置している。長径63cm・短径37cm・深さ31cmの楕円形を呈する。埋没土は15号土坑と同様に自然で粘質、1層にHr-FAを含む。機能・用途不明である。

18号土坑(第67図)

位置 075-600～605グリッド

1号住居の東に位置している。長径103cm・短径71cm・深さ11cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦である。燧1点が出土した。

19号土坑(第67図)

位置 075～080-595～600グリッド

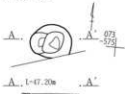
18号土坑の北東約5mの所に位置している。長径72cm・短径70cm・深さ24cmの円形を呈する。機能・用途不明である。

20号土坑(第67図)

位置 080-585グリッド

21号土坑の南西約50cmの所に位置している。長径57cm・

7号土坑



7号土坑

1 褐灰色粘質土 Hr-FAと浅間C軽石の混上。

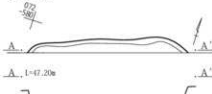
8号土坑

1 褐灰色粘質土 Hr-FAと浅間C軽石の混上。

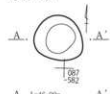
8号土坑



9号土坑



10号土坑



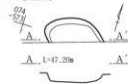
10号土坑

1 褐色土 炭化物、Hr-FAを多量に含む。

11号土坑



12号土坑



11号土坑

1 褐灰色粘質土

13号土坑



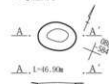
13号土坑

1 灰黄褐色粘質土 Hr-FAを含む。

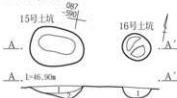
14号土坑

1 灰黄褐色粘質土 Hr-FAを含む。

14号土坑



15・16号土坑



15号・16号土坑

1 灰黄褐色粘質土 Hr-FAを含む。

2 灰黄褐色土 Hr-FAを含まないローム質土。

17号土坑

1 灰黄褐色粘質土 Hr-FAを含む。

2 灰黄褐色土 Hr-FAを含まないローム質土。

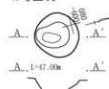
17号土坑



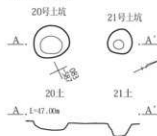
18号土坑



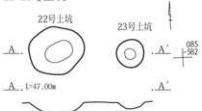
19号土坑



20・21号土坑



22・23号土坑



24号土坑



25号土坑



26号土坑



0 1:60 2m

第67図 3-1区5面7~26号土坑

短径52cm・深さ13cmのほぼ円形を呈する。機能・用途不明である。

21号土坑(第67図)

位置 080-585グリッド

20号土坑の北西約50cmの所に位置している。長径40cm・短径39cm・深さ20cmのほぼ円形を呈する。機能・用途不明である。

22号土坑(第67図)

位置 080-085-580-585グリッド

23号土坑の西約50cmの所に位置している。長径88cm・短径77cm・深さ16cmの楕円形を呈する。機能・用途不明である。

23号土坑(第67図)

位置 080-085-580グリッド

22号土坑の東約50cmの所に位置している。長径45cm・短径44cm・深さ10cmの円形を呈する。機能・用途不明である。

24号土坑(第67図)

位置 085-570グリッド

25号土坑の西約3.5mの所に位置している。長径52cm・短径44cm・深さ22cmの楕円形を呈する。機能・用途不明である。

25号土坑(第67図)

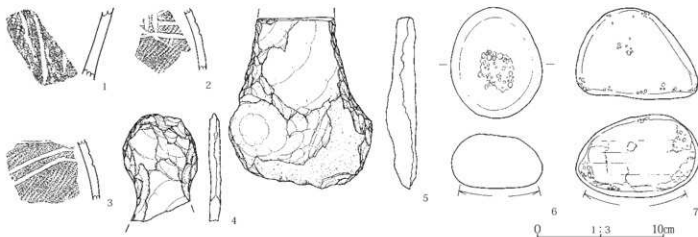
位置 085-570グリッド

24号土坑の東約3.5mの所に位置している。長径38cm・短径35cm・深さ15cmのほぼ円形を呈する。機能・用途不明である。

26号土坑(第67図)

位置 090-570グリッド

25号土坑の北約5.2mの所に位置している。長径86cm・短径74cm・深さ15cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸がある。機能・用途不明である。



第68図 3-1区5面遺構外遺物

第29表 3-1区5面遺構外出土土器

NO.	検出番号 図版番号	器形	出土位置 残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	第68図 PL.27	縄文土器 深鉢	Ⅱ層 胴部破片	粗砂、白色粒、石 灰	にぶい黄橙	ふつう	帯状沈線を重下させ、R.Lを縦位充填施文する。	称名寺式
2	第68図 PL.27	赤生土器 甕	Ⅱ層 胴部破片	細砂	黒褐	良好	L.R横位施文を地文とし、2条の沈線による三角ないし菱形 連繋文を描く。交点に縦位沈線を施す。内面磨き。	中期中葉
3	第68図 PL.27	赤生土器 甕	Ⅱ層 胴部破片	細砂	にぶい黄橙	ふつう	L.R横位施文を地文とし、2条の沈線による三角ないし菱形 連繋文を描く。内面横磨き。	中期中葉

第30表 3-1区5面遺構外出土土器

NO.	検出番号 図版番号	器種	形態・素材	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ (g)	製作・使用状況	石材
4	第68図 PL.27	打製石斧	分銅型	Ⅲ層	(8.6)	5.9	0.9	52.8	未製品? 剥離面の稜は比較的新鮮で、製作段階で破 損した可能性が高い。破損は節理面が影響している。	ホルンフェルス
5	第68図 PL.27	石鎌		Ⅲ層	(13.6)	11.3	2.4	383.8	完成状態。刃部が弱く摩耗する。装着部のエッジは 比較的新鮮で、完成後もまもなく破損した可能性が高 い。背面側に被熱剥落痕あり。石斧上端部を破損。	ホルンフェルス
6	第68図	凹石	扁平楕円鏡	Ⅳ層	9	7.2	4.4	433.4	表面とも摩耗するほか、背面中央より下端に偏った 集合打痕がある。集合打痕の摩耗も著しい。	粗粒輝石安山岩
7	第68図 PL.27	磨石	楕円鏡	表採	7.3	9.7	6.0	520.4	礫を分割後、分割面を機能部として使用。分割面は 顕著に摩耗している。	粗粒輝石安山岩

(3)遺構外出土遺物(第68図、PL.27)

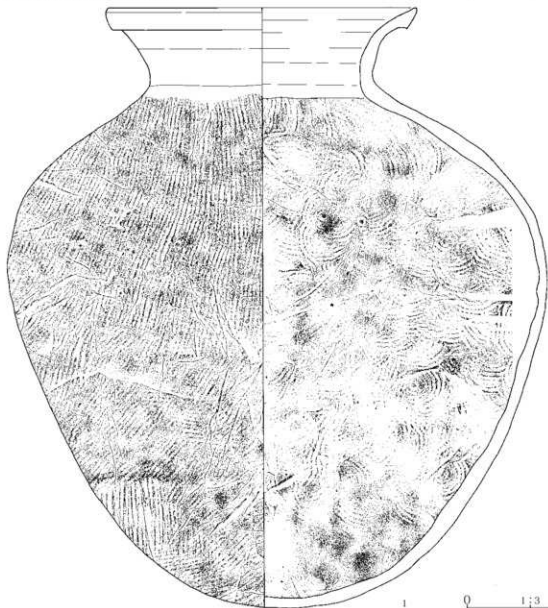
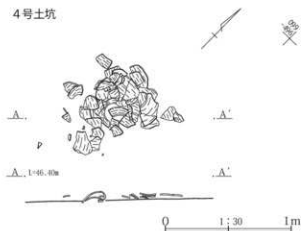
VII層から1・縄文土器、2・3・弥生土器、4～7・石器が出土しているが、同時期となる明確な遺構は発見できていない。

3 3-2区

(1)土坑

散在する状態で3基の土坑を検出した。4号土坑は大型の甕が出土しているが、土坑の規模は不明である。生活域との関連も想定される遺構である。

4号土坑



第69図 3-2区5面4号土坑・同出土遺物

第31表 3-2区5面4号土坑出土遺物

No.	神図番号 Pl.番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第69図 Pl.27	須恵器 甕	口縁部1/4欠 損	口 24.0 高 46.8 胴 42.3	細砂粒・白色粒/ 還元焰/灰	口縁部口クロ整形。胴部は外面に平行引き痕、内面に同心円状アテ具痕が残る。	

4号土坑(第69図、PL.21・27)

位置 095-495グリッド

平面のプランは明瞭ではなかった。須臾器の裏が一括して多量に出土したことから、土坑の存在が想定されたものである。土器片の出土範囲は、東西南北それぞれ約1mであった。

5号土坑(第70図)

位置 090-505～510グリッド



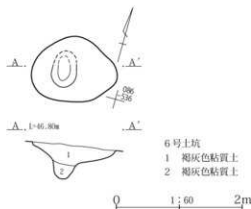
7号溝の東に位置している。長さ274cm・幅143～200cm・深さ10～19cmの不正形を呈する。底面は凹凸がある。遺物の出土はなかった。

6号土坑(第70図)

位置 085-535グリッド

5号溝の西約5mの所に位置している。長径137cm・短径105cm・深さは土坑の中心部に深く50cmの楕円形を呈する。埋没土は粘質で遺物の出土はなかった。

6号土坑



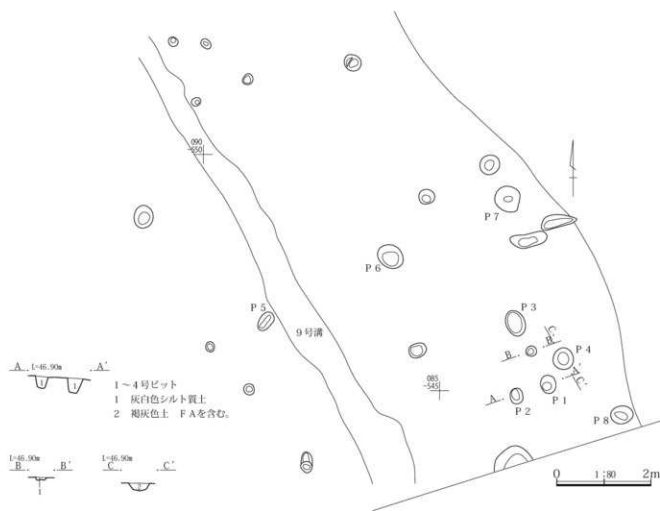
第70図 3-2区5面5・6号土坑

(2)ピット(第71図)

位置 080～085-540グリッド。24基のピットが平面測量されるが、ピット名称としては1～4号ピットだけ付番される。この4基は上位層で確認されており、他の20基は下位層での追加確認時であるため、差別化し、その規模を第32表に掲示した。また、これら以外についてもやや規模の大きなものだけ、便宜的にピット番号を付番して、計測を行った。P 5は平面ひょうたん型で、2基である可能性もあるが、長径は44cmで深さ35cmである。P 6は長径55cmで深さ34cm、P 7は長径58cmで深さ19cm、P 8は長径47cmで深さ20cmである。4基の規模はほぼ等しい。間隔については、P 5～P 6が306cm、P 6～P 7が282cm、P 7～P 8が519cmを計る。L字形に曲がる平面形をなし、角度もほぼ直角となっている。可能性とすれば、梁間1間で桁行2間の掘立柱建物を想定することも可能であろう。また、周辺は縄文土器・弥生土器が本遺跡内ではやや多く出土しており、遺構年代も幅を持たせて考えておく必要がある。なお、3面9号溝の位置を入れ込んであるとおり、3面段階から掘り込まれたピットも含まれる可能性がある。ピットから出土した遺物はない。

第32表 3-2区5面ピット計測表

ピットNo	位置 (X-Y)	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	084-542	40.0	33.5	31.5
2	084-543	33.5	26.5	24.5
3	085-543	24.5	22.5	6.0
4	085-542	46.5	44.0	16.0



第71図 3-2区5面1~4号ピット

(3) 溝

調査区の東端に位置する6号溝を除いて、やや集中し重複している。調査時の遺構名称から他に2条となるが、別遺構も考慮して枝番を付した。結果として、9条の溝となる。断面形は皿状で浅いものも多く、7C号溝・8D号溝はU字形で比較してやや深くなっている。すべて南～南東方向へ下向きしており、用途が近似する可能性がある。7・8号溝の一群は重複して、繰り返し形成されており、何らかの境界部分にあたることも想定される。9条全てにおいて、遺物は出土していない。

6号溝(第72図)

位置 100～105-485～495グリッド。南北端とも調査区域外へ延びる。平面形は直線状。走行方位はN-46～51°-W。断面形は皿状。底面は丸みを持つ。両端の比高差は6cmで、勾配0.6%で南方へ下向きする。規模は長さ10.73m以上、上端幅31～48cm深さ7cmである。

7A号溝(第72図、PL.21)

位置 090～095-510～520グリッド。南端は調査区域外へ延び、北端は7B号溝と重複または合流して不明となる。平面形はやや弧状。走行方位はN-46～65°-W。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は12cmで、勾配1.1%で南東方向へ下向きする。規模は長さ10.71m以上、上端幅26～43cm深さ5cmである。

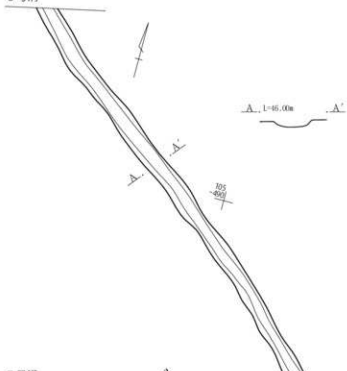
7B号溝(第72図、PL.21)

位置 090～100-515～520グリッド。北端は調査区域外へ延び、南端は7C号溝と重複または合流して不明となる。平面形はほぼ直線状。走行方位はN-20～37°-W。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は1cmで、勾配0.1%で南方へ下向きする。規模は長さ8.95m以上、上端幅32～44cm深さ5cmである。

7C号溝(第72図、PL.21)

位置 090～100-515～525グリッド。南端は7B号溝

6号溝



と重複または合流して不明となる。平面形はS字形に蛇行する。走行方位はN-11°-55'-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は13cmで、勾配1.1%で南方へ下向する。規模は長さ11.85m以上、上端幅31~78cm深さ20cmである。

8 A号溝(第73図、PL.21)

位置 090~095-525~530グリッド。平面形は直線状。走行方位はN-34°-W。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は7cmで、勾配1.1%で南方へ下向する。規模は長さ6.45m上端幅21~41cm深さ2cmである。

8 B号溝(第73図、PL.21)

位置 085~095-525~540グリッド。東西端とも調査区域外へ延びる。平面形は小刻みに蛇行する。走行方位はN-16°-56'-W。断面形は皿状。底面は凸凹する。

7号溝



第72図 3-2区5面6・7号溝

両端の比高差は15cmで、勾配0.9%で南方へ下向する。規模は長さ15.77m以上、上端幅37～166cm深さ12cmである。

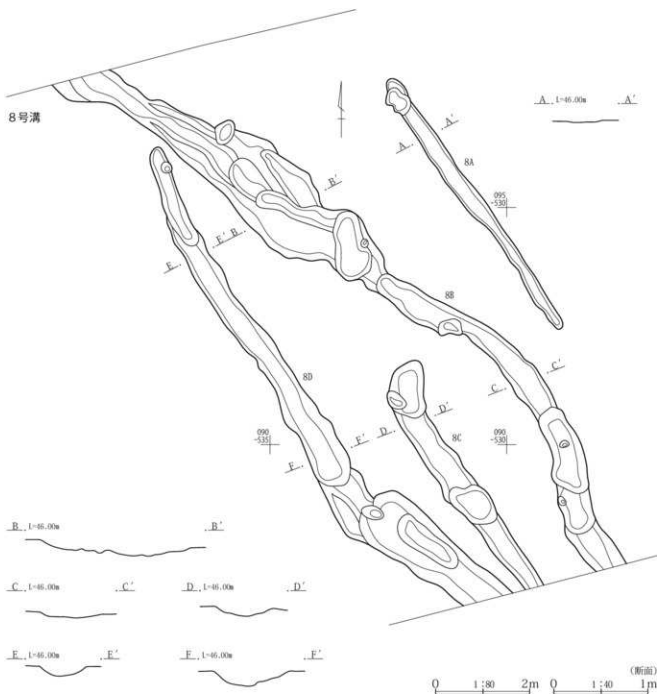
8C号溝(第73図、PL.21)

位置 085～090-525～530グリッド。南端は調査区域外へ延びる。平面形はほぼ直線状。走行方位はN-3～36°-W。断面形は皿状。底面は凸凹する。両端の比高差はほとんどない。規模は長さ5.68m以上、上端幅40

～77cm深さ10cmである。

8D号溝(第73図、PL.21)

位置 085～095-525～535グリッド。南端は調査区域外へ延びる。平面形はくの字形。走行方位はN-20～52°-W。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は7cmで、勾配0.6%で南方へ下向する。規模は長さ12.22m以上、上端幅35～123cm深さ17cmである。

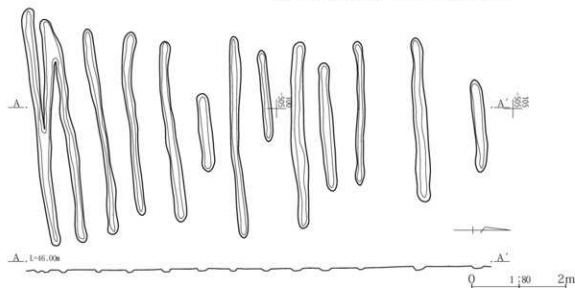


第73図 3-2区5面8号溝

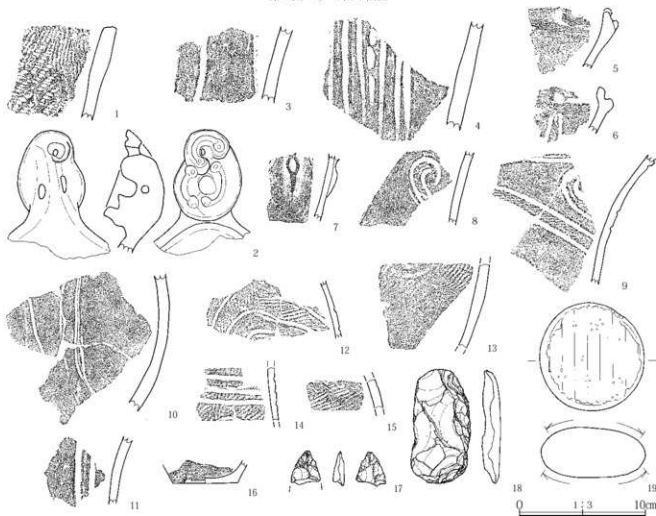
(4) 畝(第74図、PL.22)

位置 090～105-500～505グリッド。14条の畝間が検出された。平面形は直線状。走向方位はN-82°-90°-Eで、東西軸を採る。畝間の最大残存長は5.03m。畝間

の断面形はU字形で、幅約14～29cm深さは最大約8cm。畝部は削平され残存しない。幅は約19～103cm。北端で広くなる状況から考えて、南端は異時期または作物が異なる可能性も残る。遺物は出土していない。



第74図 3-2区5面畝



第75図 3-2区5面遺構外遺物

(5)遺構外出土遺物(第75図、Pl.28)

縄文時代中期土器1点(1)、同後期土器10点(2～11)、弥生時代中期土器5点、石器3点が、調査区の西

端の微高地縁辺で出土した。比較的集中して出土するが、同時期に比定される遺構は見つかっていない。

第33表 3-2区5面遺構外出土土器

NO.	検出番号 図版番号	器形	出土位置 残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	第75図 Pl.28	縄文土器 深鉢	Ⅱ層 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒	明赤褐	良好	縦・太2種類のR Lを縦位施文する。	中期
2	第75図 Pl.28	縄文土器 深鉢	Ⅱ層 口縁部破片	細砂	橙	良好	波頂部の突起。高文連続文を施す。	称名寺式
3	第75図 Pl.28	縄文土器 深鉢	Ⅱ層 胴部破片	粗砂、細礫、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	縦位、弧状の帯状沈線を施す。	称名寺式
4	第75図 Pl.28	縄文土器 深鉢	Ⅱ層 胴部破片	粗砂、細礫	にぶい黄橙	ふつう	集合沈線による懸垂文を施す。一部沈線間に列点を充填する。	堀之内1式
5	第75図 Pl.28	縄文土器 深鉢	Ⅱ層 口縁部破片	粗砂、黒色粒	にぶい黄褐	良好	口縁が短く内折。内折部に高文を施した貼付を付す。	堀之内1式
6	第75図 Pl.28	縄文土器 深鉢	Ⅱ層 口縁部破片	粗砂、黒色粒	橙	ふつう	小突起を付す波状口縁で、口縁が短く内折。波頂部から2条の沈線を垂下させる。内折部に高文、沈線を施す。	堀之内1式
7	第75図 Pl.28	縄文土器 深鉢	Ⅱ層 胴部破片	粗砂、黒色粒	赤褐	良好	顕状隆帯、沈線を垂下させる。	堀之内1式
8	第75図 Pl.28	縄文土器 深鉢	Ⅱ層 胴部破片	粗砂、黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	横位沈線をめぐらして区画、区画内に斜行する帯状沈線、人組み状渦巻モチーフを施し、LRを充填施文する。	堀之内1式
9	第75図 Pl.28	縄文土器 深鉢	Ⅱ層 胴部破片				NO. 8と同一個体。	堀之内1式
10	第75図 Pl.28	縄文土器 深鉢	Ⅱ層 胴部破片	細砂	橙	ふつう	沈線による懸垂文を施す。	堀之内1式
11	第75図 Pl.28	縄文土器 深鉢	Ⅱ層 胴部破片	粗砂、細礫、白色粒、石英	橙	ふつう	縦位沈線を施す。	堀之内1式
12	第75図 Pl.28	弥生土器 壺	Ⅱ層 胴部破片	粗砂、黒色粒	赤褐	良好	帯状沈線により渦巻モチーフを描き、無筋LRを充填施文する。内面磨き。	中期中葉
13	第75図 Pl.28	弥生土器 壺	Ⅱ層 胴部破片	粗砂、黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	LR横位施文を地文とし、2条の沈線による逆U字状モチーフを描く。下半は無文。内面磨き。	中期中葉
14	第75図 Pl.28	弥生土器 壺	Ⅱ層 胴部破片	粗砂、黒色粒	にぶい褐	ふつう	LR横位施文を地文とし、複数条の沈線をめぐらす。下端に逆U字状の沈線が見られる。内面ナデ。	中期中葉
15	第75図 Pl.28	弥生土器 壺	Ⅱ層 胴部破片	粗砂、赤色粒	にぶい橙	ふつう	結節LRを横位施文する。内面磨き。	
16	第75図 Pl.28	弥生土器 鉢か	Ⅱ層 底部破片	粗砂、黒色粒	にぶい赤褐	良好	推定底径5.0cm。外面横位のナデ。底面磨き。	

第34表 3-2区5面遺構外出土石器

NO.	検出番号 図版番号	器種	形態・素材	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ (g)	製作・使用状況	石材
17	第75図 Pl.28	石鏃	不明	Ⅱ層	(0.9)	(0.8)	(0.3)	0.13	未製品？先端部破片。先端の厚味が有り、石鏃としての完成度は低い。	黒曜石
18	第75図 Pl.28	打製石斧	短冊型	V層	9.0	4.7	1.6	76	完成状態。左辺側の加工が少なく、右辺側の加工先行する。刃部には強い摩耗が残る。	ホルンフェルス
19	第75図 Pl.28	磨石	偏平円礫	Ⅲ層	8.5	8.3	4.0	428.2	表裏面とも摩耗する。上端側小口に打痕がある。	粗粒輝石安山岩

第7節 6面の遺構と遺物

1 2区

(1) 畝

本遺構は調査段階で1連の畝として把握されたが、整理段階で断面観察を手がかりに、畝間の走向方位を考慮しながら、4つの畝に区分けして報告することとした。なお、本遺構は本来調査区全体に広がっていたものと考えられるが、北側中央部および西半部は、攪乱により消滅し不明である。また、南壁に沿って、1～2面段階に旧河道が形成されたため、この部分も空白地となっている。状況から考えて、本来は南側にも連続していたものと考えられる。

1号畝(第77図、PL. 9)

位置 調査区全域。2～4号畝より前出。北東部の遺存状況は悪く、畝間は4条で、全体の畝間数は20条検出された。平面形は西方にやや湾曲する弧状。走向方位は $N-8^{\circ}-W \sim N-16^{\circ}-E$ で、南北軸を採る。畝間の最大残存長は直線で約10.60m。畝間の断面形はU字形で、最大幅約50cm深さは最大約5cm。畝部は削平され残存しない。幅は約12～81cm。

2号畝(第77図、PL. 9)

位置 調査区全域。3・4号畝より前出で、1号畝より後出。一部分断されたものを復元的に認識して、46条の畝間が検出された。平面形は直線状。東西軸を採るものが大部分であるが、調査区中央部に北西-南東軸を採るものもあり、同一遺構でない可能性もある。このため、新旧関係や分布状況から便宜的に同一遺構として扱う。走向方位は東西軸で $N-68 \sim 76^{\circ}-W$ 、北西-南東軸で $N-29^{\circ}-W$ である。畝間の最大残存長は直線で約7.50m。畝間の断面形はU字形で、幅約16～46cm深さは最大約12cm。畝部は削平され残存しない。幅は16～151cm。

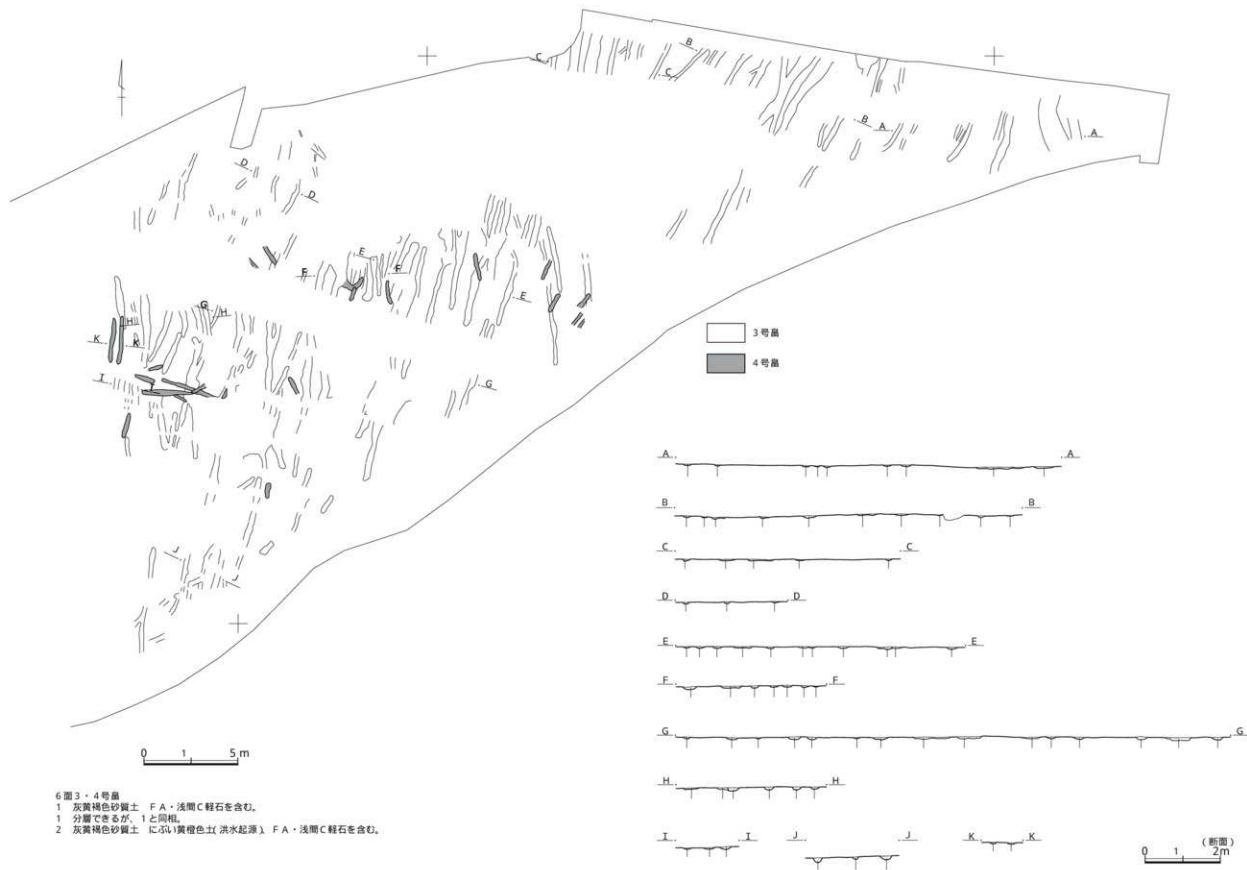
3号畝(第76図、PL. 9)

位置 調査区全域。4号畝より前出で、1・2号畝より後出。分断されたものの一部を復元的に認識して、畝間は北東部で30条、西部で35条を検出した。平面形は全体に直線状だが、一部西方に湾曲する傾向が見られる。交差するものもあり、新旧関係や分布状況から便宜的に同

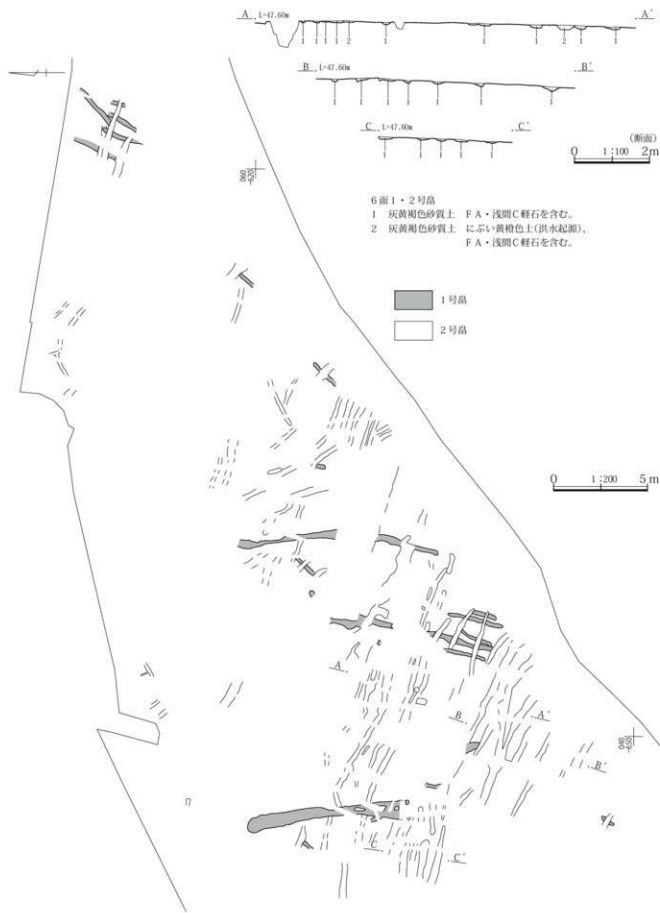
一遺構として扱っており、計測対象から除外したものである。走向方位は $N-9^{\circ}-W \sim N-46^{\circ}-E$ 。畝間の最大残存長は約7.0m。畝間の断面形はU字形で、最大幅約68cm深さは最大約10cm。畝部は削平され残存しない。幅は約24～220cm。

4号畝(第76図、PL. 9)

位置 045～060-630～655グリッド。1～3号畝より後出。24条の畝間が検出された。遺存状態悪く、まとまりとして把握し難い。新旧関係や分布状況から便宜的に同一遺構として扱っており、走向方位はばらつきが大きく計測除外。畝間の最大残存長は約2.73m。畝間の断面形はU字形で、幅20～22cm深さは最大約4cm。畝部は削平され残存しない。幅は約18～90cm。



第 3 2 区 6 面 3・4 号 墓



第77図 2区6面1・2号品

第8節 まとめ

1 縄文時代(2区5面、3-1・2区5面)

当期の遺構は発見できなかった。遺構外出土遺物としても2区は皆無で、3-1区も非常に少ない。3-2区では調査区西端部で集中して出土している。ここを境として東方は低地となるため、微高地の東面縁辺に集中していることが判明した。

掲載遺物は12点であり、非掲載遺物を含めると、前期前半1点、中期1点、称名寺式期5点、堀之内1式期10点、ほか後期前葉12点である。後期は称名寺式から堀之内1式にまとまるが、小破片に止まっている。

近隣の調査では、新島遺跡(新井2011)(国交省分)で前期前葉から後期前葉まで長期的に数点ずつ計16点が出土し、本遺跡と一致している。遺構は見つかっておらず、近隣に集落などの存在はないと結論づけている。また、矢部遺跡・新島遺跡(大江2006)(県道分)では縄文時代、弥生時代とも出土遺物はない。

第35表 器種別石材表

器種	01ホルン	02チャート	03珪石	04黒曜石	05粗安	総計
01石鏃	1					1
02打製石斧	3					3
03石鏃		1		1		2
04削器	1					1
05石核		1				1
06細工鏃	3		1			4
07四石					1	1
08磨石					3	3
総計	8	2	1	1	4	16

第36表 剥片石材組成表

区	遺構名	石材	重量(g)	個数
3-1	包含層	チャート	118.9	6
2	包含層	黒曜石	9.5	1
3-1	包含層	珪質頁岩	11.4	1
2,3-1,3-2	包含層	ホルンフェルス	1241.1	21

2 弥生時代(2区5面、3-1・2区5面)

当期も遺構は発見できず、遺物の出土する傾向も縄文時代と全く同じである。時期は中期中葉にほぼ限定される。破片も小さく、近隣に集落などの存在は想定できない。なお、隣接する新島遺跡(国交省分)では遺物は出土していない。

3 縄文時代・弥生時代石器

当期の石器はすべて3-1・2区で出土し、掲載遺物はいずれも5面遺構外出土遺物である。非掲載遺物では分銅型の打製石斧1点、凹基無茎石鏃1点(未製品)、削器1点、石核1点、磨石1点などがある。第8表は非掲載遺物を含めて石材組成を総括したものである。本地域は、ホルンフェルス・チャートが卓越する地域であり、石鏃・打製石斧・石鏃・削器に使用されている。黒曜石の石鏃は1点である。礫石器は全て粗粒輝石安山岩である。剥片の出土状況では、ホルンフェルスは石鏃や石斧の量に比して少ないため、遺跡内での制作は想定されない。

4 平安時代(全調査区2~5面)

(1)集落

竪穴住居は2区5面で2軒、3-1区5面で1軒が調査されている。時期は9世紀後半でまとまっている。2区では2×3軒の掘立柱建物1棟見つかると、少ないながらも同時期の出土遺物がある。土坑・ピットは2区から3-2区西側まで、散漫な状態ながら連続する。多くは出土遺物がなく、時期は確定できないが、この範囲が集落域と考えられる。

周辺遺跡では県道分の新島遺跡、矢部遺跡で住居が調査されている。6世紀後半~7世紀が5軒、9世紀が4軒で、少ないながらも現在の矢場川寄りにやや集まる傾向がある。したがって、本遺跡もあわせて、9世紀代に住居が点在する状況が復元される。

(2)溝と洪水

当期の溝は、2~5面が該当する。溝の埋没状況として、直接洪水により埋没したものは見つかっていない。2面については、3-1・3-2区の上位1面で水田が検出され、2面の溝についても走向が近似し、水田との関連が考えられる。5面は住居と同一面で、集落域に所在して多様な用途が想定されるが、3-2区の溝群は微高地と低地部の境界付近であり、排水などの用途も想定されよう。

3面の溝群は注意を要する。特に3-1区6・9溝は出土遺物も多く、時期は9世紀第2・3四半期にわたり時期幅がある。下位に3-1区1号住居もあるため、そ

うした遺物も混入しているよう。両溝は重複しており、9号溝が人為的に埋められ、6号溝に切り替わった可能性がある。また、3-2区10号溝はその延長にあり、3-1区6号溝と同一である可能性が高い。この溝から、少ないながらも同時期の遺物が出土している。ところで、これに重複する3-2区9号溝は、北壁の土層観察の結果、埋没土上位と確認面に別々の洪水層が堆積しており、洪水層に挟まれた層位にある。こうした状況から、3-1区1号住居の年代観である9世紀第4四半期以降、As-B降下以前において、溝が数度構築される中、繰り返し洪水があったと推測される。

洪水との関係では、4・5面の畝も関係深い。形態的な特徴など詳細は次項で扱うが、いずれも洪水で直接埋没したのではなく、畝間内に洪水混入が入った状況であった。2区では集落面である5面を挟んで、4・6面で畝が発見されている。いずれも洪水との関係が想定されるが、時期を確定できる遺物は出していない。2区住居2軒の年代観である9世紀第3・4四半期を基準とすれば、その前後に洪水が繰り返されたことが判明する。ただし、それらは上・下限を示すに止まっている。

さて、本地域の洪水に関しては、矢部遺跡において弘

仁9年(818)年の地震に起因する洪水堆積の可能性が指摘されている(坂口2006)。しかし、本遺跡出土の高に伴う洪水混入について、可能性は否定できないものの、追認できる成果は得られなかった。

(3) 畝

計測数値は第9表に示したとおりである。畝の走向方位に着目すると、2区・3-1区は真北方向を軸に、東西に若干ずつ振れる傾向がある。重複するものもそれに直交している。それに対して、3-2区西側は全体に東西方向への振れが大きく、北東-南西軸のものが目立つ。この傾向は3-2区東側に向かって切り替わり、再び東西への振れが小さくなる。以上は地形に即した耕作方位を示すものと言える。

畝は遺存状態が悪く、詳細な分析に耐えうるものはないが、比較的安定した傾向を示すものが数例見られた。3-1区4面1号畝は南側を後代の溝で壊されるものの、畝間列がほぼ規則的に検出されている。畝間幅には2種類あり、40cm前後のものと、130cm前後のものがあり、東西に分布域が分かれている。ただし、狭い例が畝間の重複例の可能性もある。

3-2区4面2号畝も良好な例である。特に2-2号

第37表 畝計測数値一覧表

調査区	調査面	遺構名	条数	走向方位	畝幅(cm)	畝間残存長(m)	畝間幅(cm)	畝間最大深さ(cm)
2	1	-	5	N-9~15°-E	70~118	4.98	23~50	7
2	4	1	11	N-93°~77°-W	54~94	4.68	50	6
2	4	2	8	12°W-N-9°E	40~124	6.81	55	15
3-1	4	1	51	6°W-N-10°E	40~130	16.48	25~31	6
3-1	4	2	14	N-98°~74°-E	40~170	17.00	45	6
3-1	4	3	53	12°W-N-19°E	52~132	13.32	19~37	20
3-1	4	4	8	N-4~28°-W	168	2.10	34	12
3-2	4	1-1	27	N-24~63°-E	10~36	2.61	25	3
3-2	4	1-2	42	N-24~40°-W	-	6.65	35	3
3-2	4	2-1	7	N-36~50°-E	42~105	8.78	30~48	23
3-2	4	2-2	21	N-48~57°-E	40~67	11.48	24~42	19
3-2	4	2-3	10	N-15~28°-W	30~81	10.90	44	10
3-2	4	2-4	10	N-14~23°-W	46~73	7.15	15~32	15
3-2	4	2-5	6	N-4~8°-W	43~76	3.65	18~26	3
3-2	4	3	6	N-17~26°-W	130~155	4.81	31~39	9
3-2	4	4	15	N-17~24°-W	67~127	7.85	31~51	-
3-2	4	5-1	7	4°W-N-13°E	211~270	3.20	27	16
3-2	4	5-2	8	N-16~23°-W	88~124	8.45	41	9
3-2	4	6-1	4	N-67~72°-E	144~170	5.50	34	9
3-2	4	6-2	6	N-60~79°-E	87~210	11.92	52	14
3-2	5	-	14	N-82~90°-E	19~103	5.03	14~29	8
2	6	1	20	8°W-N-16°E	12~81	10.60	50	5
2	6	2	46	N-68~76°-E	16~151	7.50	16~46	12
2	6	3	65	9°W-N-46°E	24~220	7.0	68	10
2	6	4	24	-	18~90	2.73	20~22	4

畝は畝間の全長がとらえられており、約12mを計っている。これにより畝の全体規模は不明ながら、耕作単位の一例が判明した。畝間幅は40～67cmと狭い。

なお、本遺跡では自然科学分析は行っておらず、作物に関する分析データは得られていない。

(4) 墨書土器

墨書土器は10点出土している。2区では1号住居から「王」と墨書された土師器杯、2号住居では「不」？と読める墨書を持つ須恵器杯が出土している。また遺構外出土遺物でも2例がある。3-1区では住居からの出土はないが、6・9号溝で3点、遺構外出土遺物でも3点出土している。時期はいずれも9世紀後半である。なお、周辺遺跡である新島遺跡・矢部遺跡では報告されていない。

5 中世～近世(1・2面)

(1) 土坑・溝

2区では土坑と溝が重複して見つかり、分布は調査区中央部に集中している。走向方位もほぼ一致しており、何らかの地割に対応したのと言える。

6号溝は洪水により埋没している。2面では南側で旧河道も見つかり、6号溝はほぼこれに並走している。位置的には現矢場川流路に最も近接している部分である。現矢場川は2区南方で大きく蛇行しており、攻撃面を造っている。おそらく、2区から3区が洪水に被災する頻度は高かったと言える。

(2) 畝・水田

畝は2区のみで見つかった。面積も狭く、詳細は不明である。下位2面では畦畔も見つかり、3-1・2区に比して微高地に位置し、当期は畝作優位な土地柄であったと言える。

水田は3-1区東半部から以東で検出されている。区画形態なども一致することから、一連の水田と思われる。調査区の幅では水田区画全体を露呈できたものではなく、概して区画は大きいと言える。3-2区は明確な水田区画を検出しているが、畦の高さは低く上部は削られている。水田面に小穴が目立つが、多くは足跡と見られる。また、3-2区東側は耕作土下が確認面であり、畦畔の規模は同様に大きくない。配水は東方へ流していた。

(3) 出土遺物

出土遺物は水田覆土及び耕土中が多く、直接遺構に伴う状況ではなかった。中世遺物が多く、屋敷遺構の組成に類似する特徴があった。

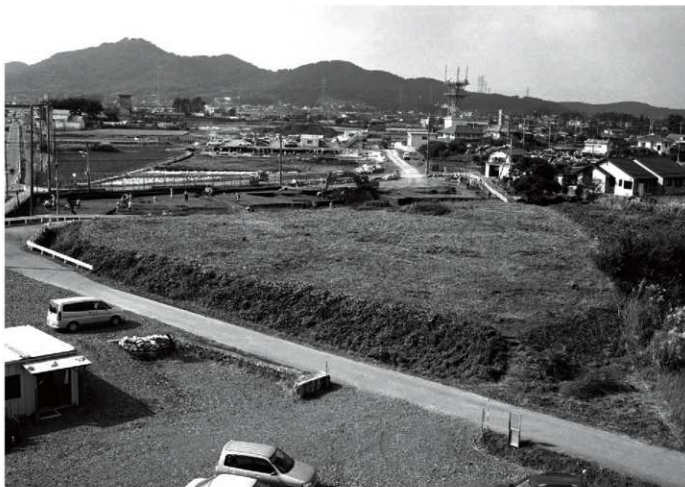
在地系土器では、3-1区1面水田で出土したカワラケ2点があり、器高の低い手づくねで、地域色を示す遺物として注目される。全体として在地系土器は点数が少ないがやや時代幅があり、搬入品では中国産の青磁・白磁は12～13世紀代で占められ、常滑窯産の鉢・甕も13世紀代であった。碗・皿類は幅があり、古瀬戸～大窯段階がわずかに出土した。

以上から、中国陶磁は伝世品も含まれようが、常滑窯産も含まれることから、周辺で13世紀頃以降に中世屋敷が存在した可能性がある。

参考文献

- 新井仁2011「総括」『新島遺跡』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 大江正行2006『矢部遺跡・新島遺跡』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 坂口一2006『矢部遺跡1区3号溝の洪水層について』『矢部遺跡・新島遺跡』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

写真図版



1区全景（東から）



2区1面空中写真（南東から）



2区 1面1号溝全景(東から)



2区 1面2号溝全景(東から)



2区 1面3号・5号溝全景(北から)



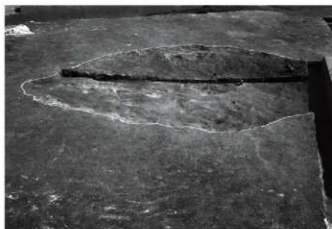
2区 1面4号溝、1号土坑全景(北から)



2区 1面6号溝全景(東から)



2区 1面畠全景(北から)



2区 2面2号土坑全景(南から)



2区 2面畦畔全景(南西から)



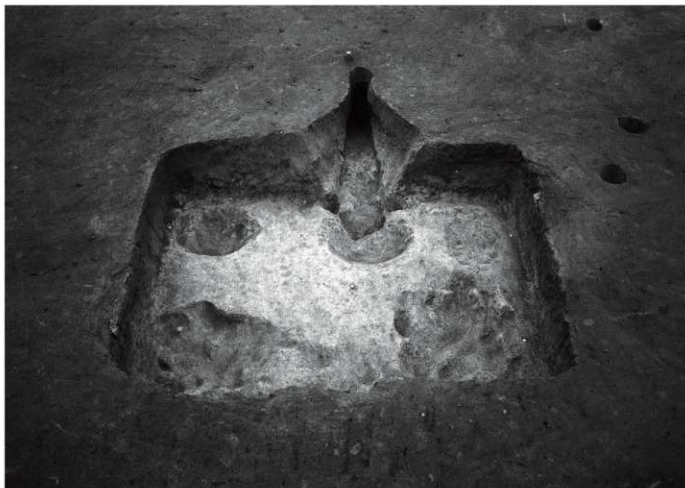
2区 4面島全景（南東から）



2区 5面空中写真（南から）



2区 5面 1号住居完掘全景（南から）



2区 5面 1号住居掘り方全景（南から）



2区 5面 1号住居遺物出土状況（南から）



2区 5面 1号住居作業風景（南から）



2区 5面 1号住居カマド遺物出土状況（南から）



2区 5面 1号住居カマド完掘全景（南から）



2区 5面 2号住居完掘全景（西から）



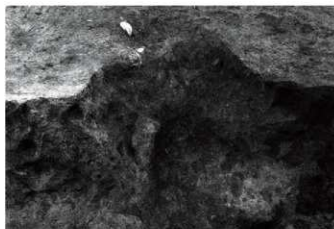
2区 5面 2号住居遺物出土状況 (西から)



2区 5面 2号住居掘り方全景 (西から)



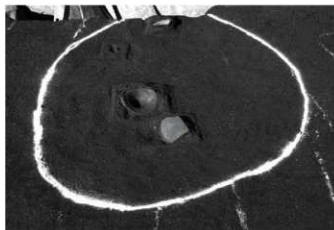
2区 5面 2号住居作業風景 (北から)



2区 5面 2号住居カマド完掘全景 (西から)



2区 5面 2号住居カマド掘り方全景 (西から)



2区 5面 1号掘立 3号ピット遺物出土状況 (南から)



2区 5面 1号掘立 6号ピットセクション (南から)



2区 5面 1号掘立 7号ピットセクション (南から)



2区 5面 1号掘立 12号ピットセクション (南から)



2区 5面 1号掘立全景 (西から)



2区 5面 25～27号ピット全景 (南から)



2区 5面 3号土坑全景 (南から)



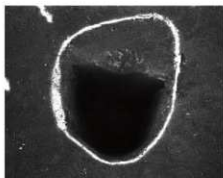
2区 5面 4号・5号土坑全景 (南から)



2区 5面 6号土坑全景 (南から)



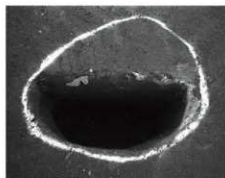
2区 5面 14～16号ピット全景 (南から)



2区 5面 13号ピットセクション (南から)



2区 5面 14号ピットセクション (南から)



2区 5面 15号ピットセクション (南から)



2区 5面 7号・8号溝全景 (北東から)



2区 6面空中写真(東から)



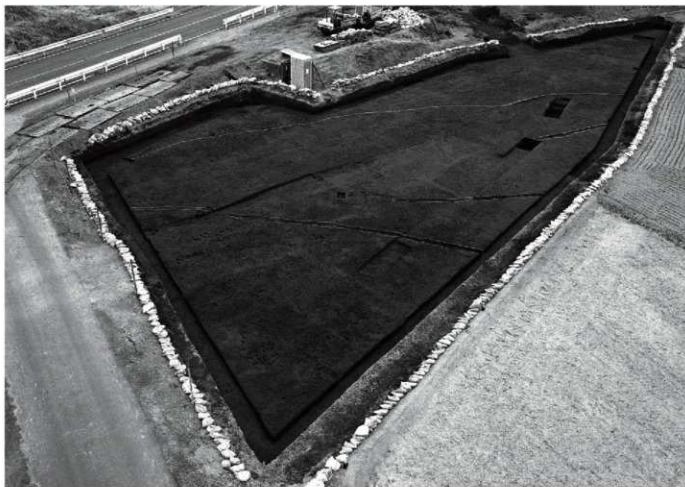
2区 6面空中写真(南から)



3区全景（南東から）



3-1区 1面全景（北東から）



3-1区 2面全景（北東から）



3-1区 2面2～5号溝全景（南東から）



3-1区 3面6・9・10・11号溝 (東から)



3-1区 4面全景 (南西から)



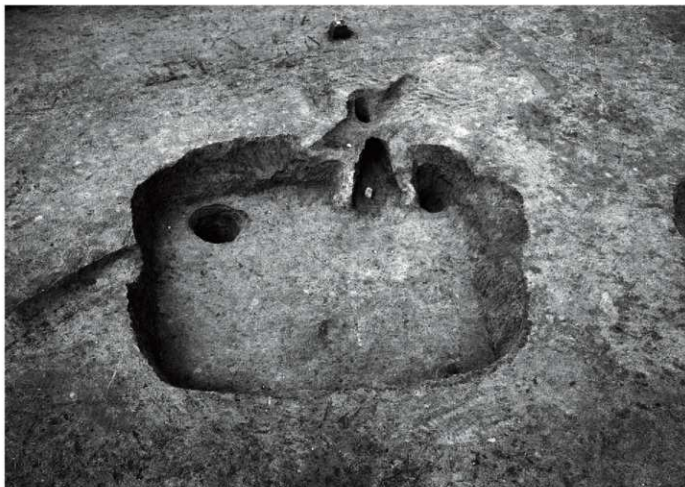
3-1区 4面全景 (南東から)



3-1区 4面作業風景 (南東から)



3-1区 5面全景 (西から)



3-1区 5面1号住居全景 (南西から)



3-1区 5面1号住居遺物出土状況（東から）



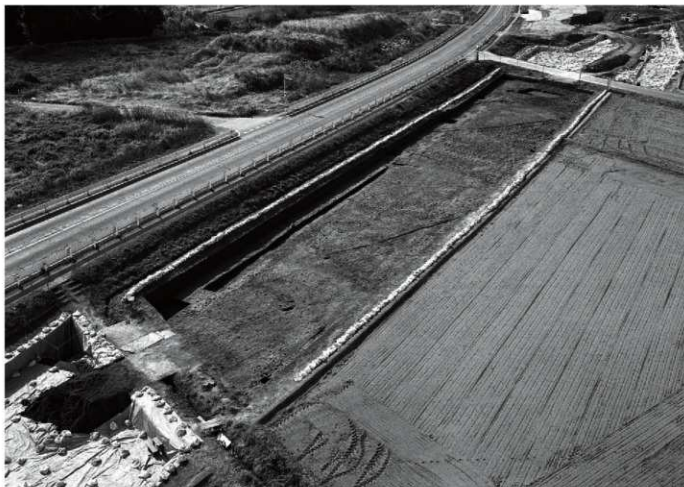
3-1区 5面1号住居カマド全景（南から）



3-1区 5面1号住居内2号土坑全景（西から）



3-2区 1面水田全景（北東から）



3-2区 1面全景（北東から）



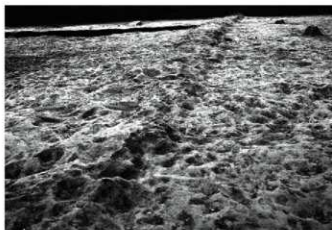
3-2区 1面東側全景（西から）



3-2区 1面1号土坑全景（北西から）



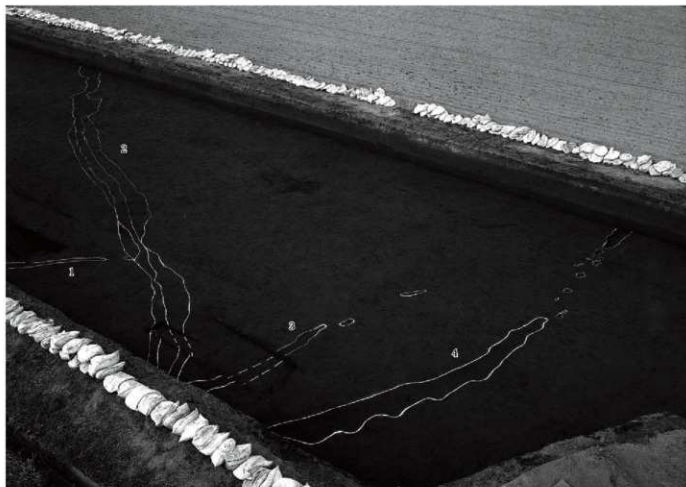
3-2区 1面6号畦畔（南から）



3-2区 1面2号畦畔（北から）



3-2区 1面2号畦畔セクション（南西から）



3-2区 2面 1～4号溝全景 (南東から)



3-2区 2面東側全景 (西から)



3-2区 3面5号満全景（南から）



3-2区 3面9号・10号満全景（南西から）



3-2区 4面1号畠全景（北東から）



3-2区 4面2号畠全景（南西から）



3-2区 4面2号畠 (南東から)



3-2区 4面2号畠 (南東から)



3-2区 4面5号・6号畠全景（南西から）



3-2区 4面5号・6号畠全景（東から）



3-2区 4面3号畠 (南西から)



3-2区 5面4号土坑遺物出土状況 (西から)



3-2区 5面7号・8号溝全景 (西から)



3-2区 5面全景 (東から)



3-2区 5面東側全景 (北東から)

2区1面遺構外



3-1区1面水田



3-1区1面遺構外



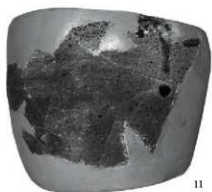
3-2区1面水田



3-1区3面6号溝



3-1区3面9号溝(1)



11



12

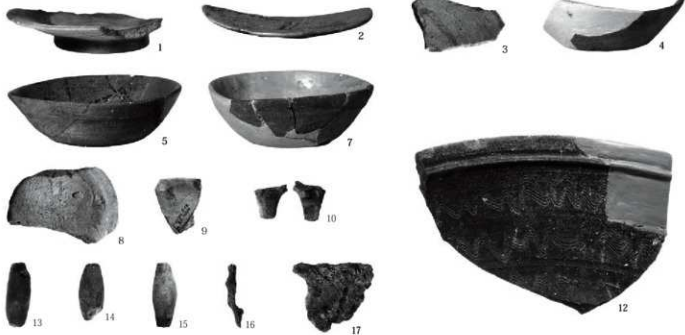
PL.24

3-1区3面9号溝(2)



13

3-1区3面遺構外(1)



12

13

14

15

16

17

3-1区3面遺構外(2)



3-2区3面10号溝



3-2区3面遺構外



2区5面1号住居



2区5面2号住居(1)



2区5面2号住居(2)



2区5面1号掘立柱建物



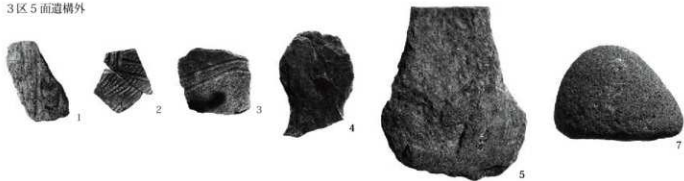
2区5面遺構外



3-1区5面1号住居



3区5面遺構外



3-2区5面4号土坑



PL.28

3-2区5面遺構外



報 告 書 抄 録

ふりがな	ただかりふかまちいせき
書名	只上深町遺跡
副書名	北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	529
編著者名	菊池実 飯森康広
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20120227
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北碓町大字下箱田784-2
遺跡名ふりがな	ただかりふかまちいせき
遺跡名	只上深町遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけいんおおたしただかりまち
遺跡所在地	群馬県太田市只上町
市町村コード	10205
遺跡番号	T0389
北緯(日本測地系)	362010
東経(日本測地系)	1392357
北緯(世界測地系)	362021
東経(世界測地系)	1392345
調査期間	20050101-20050331/20051001-20060331
調査面積	3416
調査原因	道路建設
種別	集落/田畑/散布地
主な時代	縄文/弥生/平安/中世・近世
遺跡概要	散布地-縄文-土器+石器/散布地-弥生-土器+石器/集落-平安-竪穴住居3+ 掘立柱建物1+土坑33+溝20-土器+石器+鉄器/田畑-平安-高12/集落-中世・ 近世-土坑5+溝15-陶磁器+金属器/田畑-中世・近世-水田1+畠1
特記事項	平安時代では竪穴住居・掘立柱建物が発出され、墨書土器が比較的多く出土する。
要約	縄文時代から江戸時代にいたる複合遺跡である。平安時代の竪穴住居跡3軒と掘立柱 建物1棟を検出した。このほか、中国産白磁・青磁を含む中世陶磁器が比較的多く出 土した。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第529巻

只上深町遺跡

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24(2012)年2月20日 印刷

平成24(2012)年2月27日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田1784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／川島美術印刷株式会社
